

エキスが含まれてゐるかは少くとも其の料理人と同等否な其れ以上の素養をもつたものでなければ分らない……。ところで私の考へは後日、ペンデイクセン一派の貨幣理論の芳醇をもつて、幾らか鹽梅されたとはいへ、現在の私の「貨幣の魂」——本質觀は、なほ大體において、英米にて完成され、而して少くも英米人の思想においては不惑の域に入れる現實的なる貨幣理論の埒を出ること幾歩でもない。そして斯かる立場に據つたのでは、團體主義の香り高きクナップ——ペンデイクセン——エルスタアてふ主流を流れくだるにつれて、明確に精醇化しきたりたる、此の象徴的なる名目主義的貨幣理論の精髓をそしやくするのは、更らにはまた其れによる貨幣價值論の行詰りを打開せしめるべく、此の著者がとくに選んで援ききたりたる、ヘ氏の價值數の理念をかみわけるのは、必ずしも容易すい仕事では在りえないからである。

けれども私に課せられた主使命が、所詮は同書前篇よりも寧ろその「後篇」のうへに在るものと看することによりて、とまれ、忠實な紹述と微力の限りの鑑賞とを試みることにする。が、そもそも紹介者の立場と學問的視野にして、すでに然かく、進みをらす又た展かれをらない限りは、若し、著者がヘルツフェルダアの著述を紹述するに際して、この無名の、獨逸貨

幣學者の所論を正だしく紹介することをもつて、私の貨幣價值論研究の歩みを進めてみたいと思ふ」といはれたる其の口吻を姑らく假用するならば、私は左のごとく豫じめ言ひ釋きおくを、讀者に對する義務なりと思ふ。……この有力なる貨幣學者の所説所論を正だしく跡付けるのによりて、私はただ貨幣經濟理論上みづからを啓かうと期するに過ぎない……。

二

いま私は圖らず、氏の曾つて拙論著「金融經濟の諸問題」を批評せられたる、謂はば給付的文筆」の末尾に見え、さうして當年いばらのごとく心をさした、左の一節を回想せざるを得ない。「一つ苦言を呈せねばならぬ其れは著者の筆があまりに美はしく、爲めに問題を平明直截に論議すべき此の種の論策において却つてしばしば論理の歩みを迂回的にはこび、讀者をして往々澁滞の感を懷かせる恐れのあるといふ一點である」。いま謂はば此の「反對給付的な文章」のなかで、若し其れを欲したとするならば、この著者に對して私は、同書の表現様式にかかはりて果して同様の苦言を返戻し得るであらうか。否。私の意圖は

實は専ら、之を記さうが爲めに一流の迂路を此所までたどり來りたるものであるが、氏の
にありては、まことに文章暢達論理平明と云ふに盡きるのを覚えるのである。さうして
時ありてか、讀者に、迂路ないしは岐路にわけいつてゐると感ぜしめる箇所あらうとも、
それは其所にて取扱はれてゐる主題のかかはる一の認識をば、他の學問との關係におい
て、側面はた背面より、より有効に又より博大到説盡しようと思はれた技巧的な副産物に
外ならぬので、全體として些の澁滞のない筆觸で論下されてゐる。かかる文態について
の談は凡そ本文たる諸章についてであるが、若しそれ附録中の前後二文ごときに到りて
は、氏が前者において優れたるエッセイストでありたる其れ以上にすら、スケッチライ
タアとしての良き表現力の持主であることを明示して遺憾なきを覺える。

おもふに氏の有する明達謹直な表現力は、或ひは、かの最近經濟學界最大の收穫の一つ
であつたる「經濟生活の歴史的考察」の著者の行文行論の態様より轉入せられた、おのづか
らなる靈感があつた故ではなからうか。さうして若し、表現の一點において此の二著者
間に、何らか共通な強味の存在するを一度び認めるものは、さらに深く其の思想内容の一
角に立ちいりてもまた、彼此承繼の跡の潜在するのを看過しないであらう。其れは何か。

この著書の諸論攻の裏らに脈々と流れてゐる、そして今いふた坂西由藏教授の諸論考に
ば、うばくとしてゐる、歴史的な精神または發展史的觀方が即ち其れであらねばならぬ。
何故となうして此れこそ、氏の論策に一層の強味を付け加へるものであらねばならぬ。何故とな
らば、學說體系の分析および經濟現象の解剖について著者がすでに一方の名手であるこ
とは世上周知のところであると思はれるのであるが、今、之を裏付けるのに、斯くも豊饒な
歴史的^{ヒストロギッシェル}精神をもつてせられるならば、其の研究成果の必ずや輝かしかるべき事を豫斷せ
しめるものがあるからだ。この意味において私は同書繙讀にあたり、まつさきに、そして
其れは同時に最雄章でもあるところの「後篇」四から味讀し行つたものであつた。（場所は
づれの事であるが、通讀の順序を言ふたついでに、私は此の外尙ほ、第七章と第八章とを轉換して讀
んで見たことを特に附言したい。）

三

同書の構想については其の序文に短言されてゐるが、其れを更らに分析してみれば、そ
こには其の目的と範圍と研究方法とが、明確に記されてゐると思ふ。まづ其の公刊の目

的を限定して「……世に問はんとするのでなく、ただ暫らく愛する學校を離れて外遊の途に上らんとするに際して、一つは聊か追憶の記念としたためと、いま一つは新しく興へられた研究の進路に對する基礎工事として自から顧みたいためである」と言はれたのは、著者の回顧的な主觀よりの言説としてみれば、異議は在りえない。が、その範圍スチを説いて、「題して……と云ふも、決して謂はゆる貨幣經濟そのものの體系的解説を試みんとするものでなく、それは著者の今日の能力の限界を超ゆる……ただ志したところは、謂はば貨幣てふ窓から時に應じて現實の經濟社會を管見して、二三の特殊問題を取扱つたといふに過ぎぬ」とされたに到りては、吾人は敢へて、同書が其れ以上の或るものを有つてゐると言ひたいのである。それは大正十一年より大正十四年にわたりて主として「國民經濟雜誌」上に發表された論文集ではあるが、可なり朱筆の加へられてゐるのみではなく、その内容の一斑——「前篇、貨幣學說。一、エルスタアの貨幣概念。二、ヘルツフェルダアの靜態貨幣價值論。三、アダム・スミスと貨幣數量說。附、貨幣の價值」の論理。後篇、貨幣流通。四、經濟組織の發達と貨幣の職能。五、資本主義の成熟と企業者の地位。六、爲替相場の決定について。七、ドーズ案の國際經濟理論。八、獨逸賠償金問題の前途。九、明治年代における金融組織の發達。附、二短文。——

を瞥見する人々は、私が左のごとく言ふのを敢へて過當とはされぬであらうからである。すなはち「エッセイス」とは云へ、同書には、凡そ體系的貨幣理論の構成として要請さるべき、貨幣價值理論、貨幣及び信用創出理論、貨幣價值殊に對外價值變動論、てふ三主要テーマが、可なり組織的に展開されてゐるからである。ビグウの論文集を別てる用語を藉りれば、純理貨幣理論と應用貨幣理論との二領域が、またカッセル流に言へば靜態貨幣理論と動態貨幣理論との二分野が、きはめて秩序的に論究されてゐるからである。

ただ人或ひは、貨幣の本質の闡明さるべきであらうところの「前篇」における三章が皆な、いはゆる批評的消極的論考に終始せられて、建設的積極的部分ともいふべき論攻の手薄すなのを難ぜられるかも知れない。其れは、或る程度まで同書の一弱點であらう。が、そこにこそ却りて、この著者の把持される研究態度の特異さがあり、同時に其の「後篇」——貨幣流通すなはち貨幣の動態理論——をもつて前篇を生命づけんとせられた所以があるのであらうから、その潜在的意想について、私は若干の言詮を費してみたいと思ふ。一語に建設的部分といふとも、其れに先きだちて尨大な消極的論考を乗りこえねばならず、即ち、近世までの貨幣諸學說については例へばモンローやラアプリンらの書中 (Monroe,

Monetary Theory before Adam Smith; Loughlin, The Principles of Money. ch. vi.) に示されたるごとき、また十九世紀より二十世紀初葉にわたる獨逸貨幣理論の發展についてはシュモラア賀壽記念論文集におけるアルトマンの論文や、ブレンタノ祝賀論文集におけるパライの論文中(Altmann, Zur deutschen Geldlehre des 19. Jahrhunderts, in Festgabe fuer Schmoller. I. Band. Leipzig 1908; Palvi, Ungeoesste Fragen der Geldtheorie, in Festgabe fuer Lujo Brentano. II. Band. Leipzig 1925.) に現はれてゐるとき、前代および現代の老雜たる文獻と諸提唱とを評隲し、然るのち、はじめ一新説を打開せねばならぬのであつて、其れは正しく人力を超越する仕事でなければならぬ。ゆゑに此所に研究上、或る獨自な態度を探りたる同書ごときの場合にありて、之を評價すべくんば、その研究成果について試みるよりも、寧ろまづ、その方法ないし態度について是非すべきであると思はれる。

この點について著者に左の言葉がある。「……一方に於て貨幣概念構成のいよいよ困難なるを悟ると共に、他方に於ては徒らに先人の糟粕を嘗める以外に、街頭における進展休みなき貨幣流通の實相を捉へることを外にしては理論の礎石を据ゑることは到底出來ないと感じるに至つた。そこで機會の與へられる毎に勉めて貨幣理論の限界を超え

て、金融其の他貨幣流通の全域に視野を擴げて來た。……従つて本書後篇に於て主として取扱はれた國際貨幣流通に關する諸問題は、その研究の態度においておのづから多少の特質をもち得るものと自から信じてゐる。さうして恐らく、之に照應せしめたものであらう。その主著と論文集において、——勿論より早やく、——増井氏のと殆んど同じき研究態度を一貫し來りたるベンディクセンの「貨幣の作用きを認識しようとならば、吾人は先づ、その上に貨幣經濟の名でよばれる現代の經濟生活がうち建てられてゐる其の主義原理を見出さねばならぬ」と言つた語を、同書の題句たらしめて居られるのである。私は之を正しい觀方であると思ふ。何故であるか。おもふに現實生活の變遷まづおこりて次いで之を理論づける學說體系のあらはれるの事情は、一八一〇年代の英國の降りて一九七〇年代及び一九一〇年代の獨逸の貨幣流通實相における推移ありて、其れぞれの時代を反映する種々の思想と文獻が生れたる事實で、十分論證されるのであるが、然らば奔湍のごとき最近時の貨幣流通現象に直面しては、果して而して結局、いかなる考へを根本的導索として貨幣の本質にせまらべきであるかと云ふに、吾人は此の點、アルトマンの夙とに道破したところに信ずるからである。すなはち、十九世紀の獨逸貨幣諸學說につ

いて「のなかで、ア氏が一九〇八年すでに、貨幣の價値をただしく基礎づけるには、その靜態^{シュタテ}的な品質的な考察より進みいるとともに、その動態^{ダイナミク}的な數量的な研究を施さなくてはならぬ」と論じた方法に信ずるからである。文獻の重さになされる書齋から現實の街頭に立ちいでたることが、「ファウスト」を成長させたる途であると思はれるからである。また、貨幣てふ物^{ディンゲン・ツッヒ}そのものを捉へるかはりに、その認識對象の有つ作用を捕捉するのより、妥當である事は、カントにおいて既に許されたる方法であるからである。しばらく左右田博士の言葉を味はう、「……In diesem Sinne bedeutet „Was ist Geld?“ „sogleich „Was ist die Funktionen des Geldes?“……(Soda, Geld und Wert, S. 3.) およそ斯やうな其の作用その職分その關係を動的に考へて本質を認識しようとする方法に信ずるからなのである。かやうにして、同書後篇の諸章は、其の前篇の、を生動させる役割をつとめる。即ち前篇にては正面よりの積極的見解をきく機會の尠なかつたに拘らず、この著者の方法に據りてはこの後篇において、前篇のクリティツシヤア・タイトルなるに對應すべき、一種のポジティブ・タイトルが、おのづから展開される相たになつてゐると私は思ふ。この意味を、一應、心に疊んでおいてから、私は今まづ、前篇諸章から紹述することである。

四

そもそも貨幣論上、現代二つの主流とも看られる金屬主義^{メタリスムス}と名目主義^{ノミナリスムス}との二思想が、一九〇五年、クナップ(一九二六年二月二十日ゆく)の「貨幣國定學說」の出現によりて始めて、今日の意味における顯著な對立をとりうるに到つたのは明白である。(從來、金屬主義以外の思想を容れなかつた英米貨幣論においても、一九二四年にはクナップ主著が英譯されたのみでなく、近時、ケーンズ、ホートレイ、アンダーソンらに現はれる思想が必ずしも金屬主義と目さるべきでないことは、注意さるべきである。) 然しかの歐州大戰後幾多の追隨者をえ、その基礎に立ちて貨幣の理論および政策を論ずるものの漸く多きを致したる、この國定學說とても、其の論争的試練のうち、若し、主著「貨幣の本質等をもつて試みたるベンデイクセン」(一九二〇年七月二十九日ゆく)の有力なる經濟的名目主義又は指圖學說(wirtschaftlicher Nominalismus, oder Anweisungstheorie)てふ辯護なく、また降りて「貨幣の魂」をもつて新進カール・ヘルスタアの打開したる商品要求權學說(Das Geld, Anrecht auf Ware, Theorie)てふ發展のなかつたならば、その理論的成長は、けだし、斯くのごとくでは在りえなかつたであらうことも明

白である。この意味において、國定學說に源を發する名目主義の主流が、増井氏のいふがごとく大體において、クナップ、ベンディクセン、エルスタアと云ふ流れに在ることは、實に疑ふべからざる事實である。(かく、名目主義の主張の本流の其れに對立して、かの貨幣概念の二方面として抽象的計算單位または購買力單位と貨幣的章券とを認めるリイフマンにいたりつては高だか分流に屬するものである。これを、短く知らうがためには、おのおの前掲書について、クナップ第三版附録、ベンディクセン第一章、エルスタア著中のベンディクセンへの獻辭を見し、後ち續りてリイフマンの二著、一般經濟學第二章第三、四節、諸國民國富論第三章第三節を往見するのを便宜であると思ふ。)

さうして今増井氏はまづ、この名目主義の思潮の眞つただなかに自から沈潜するによりて貨幣理論の分析を施こしつづつ其の内面的連絡を明かにするとともに、ついで其の缺陷を批判するによりて或る他の考へを援き來り自からの原野を拓かうとする。別言すれば、その共鳴信念を名目主義の本流に浸たしながらも一度び其の缺陷である貨幣價值の問題に當面するや、之れを解かうが爲めに、ヘルツフェルダアが經濟社會の靜態的考察より得きたれる價值數の概念に據りて以つて新局面を開拓しようとするのである。そ

の考へ自體がすでに興味ありといふのみでなく、私は、この名目主義の流れを、團體主義すなはち經濟生活の團體主義的見方といふ前提で説かうとせられる點に共鳴を禁じ得ないものである。かやうにして、吾人は少しく此の點を逍遙してみる。

著者は、とまれエルスタアは自から稱して、クナップ——ベンディクセンの流れを享け、之を綜集成して一體系を作つたので、……一つも獨創はないと謂ふてゐる事を吟味して、若干の異論を提出する。ただし同時に、名目主義一般の前提する特徴として今日の貨幣經濟をば團體經濟であるとなす概念から出發してゐる點には、深き同感を表してゐるのである。おもふに現代貨幣經濟を交換經濟と觀るとき、そこには依然、貨幣の商品性すなはち實材的性質が問題となる。これに對して、之をクナップの支拂團體又はベンディクセンの團體經濟と觀するとき、ここには貨幣の名目的概念が確然と把握し得られる。あらゆる經濟理論は其の時代における實在の寫象なるがゆゑに、近世經濟生活にして、いよいよ産業の社會化の傾向をたどり以つて團體的色彩を強からしめんとするのに連れて、貨幣理論また社會化し従うて團體經濟の特色を前提し來る事は、學の理念のまさ^{イデ}に指標するところであらねばならぬ。否な名目的概念こそは、近代貨幣といふ理念の具現で

あり、理想イデアですらも在り得るであらう。

さりながら、概念の論理は、どこまでも概念の論理たるにとどまりて、生活の論理たりえず、そこに「生と學との距り」の存在を絶つをえない。で、生命の論理を解明すべき現實の難所に立ちいたると、この雄大にも深刻に開展し來りたる名目主義の大流も遂ひに行き詰らざるを得ず、天空高く舞ひあがれる……かれらの體系は生と學との痛ましき分裂を擔はねばならなかつたのである。かくて此の著者は、此の方向における貨幣理論の發展はエルスタアをもつて終りだ、と私かに考へてをられる。(同書、三頁、四頁、一五八頁)他の場所でもまた、名目主義の議論は「議論としては、いかに透徹してゐても一度び現實の貨幣問題即ち貨幣價值の問題を解明しようとするときは、忽ち脚下にけつまづかねばならぬ」とも言ひきつてゐる。(同上、六八頁)さらにまた後との箇所では、そもそも經濟生活の基本的概念である「所有」の表章が、凡そ貨幣で行はれ得るものであるならば、「その貨幣は自から其の價值をもつ」とどうして言ひ得ないだらうか? (同上、二六一頁とも言うてゐる。彼れは斯やうにして漸く、名目主義の重要思想に對して懷疑し行つたのである。(因みに、ここで著者がいふ價值とは、福田博士の *Wert des Geldes* の意想を承けたと自ら稱するところの、貨幣が

有つ價值、即ち貨幣それ自からの價值、と云ふ意味に解してゐるのである。)

そもそも名目主義殊に國定學說に對する嚴びしい論難の最大なるものは、最初よりして、貨幣の價值に關するものであつた。爾來、この方面に對する非難はいよいよ盛んとなり、クナツプ自から其の名著第三版以後の附録に採録してゐるやうな、賛否多數の論争文が公けにせられた。さうして、この貨幣價值の問題は現實的問題として最重要のものであつたし、歐洲大戰發生後殊に其の終了後の、中東歐諸國殊に獨逸境太利における未曾有の貨幣價值暴落および爲替相場慘落の現象を眼前に据ゑては、貨幣の對内外價值安定の問題こそは貨幣理論の直面せざるを得ない中心でもあつた。かやうにして、貨幣の本質論において名目説の理論に傾聴せねばならなかつたる人々も、其の價值の論議にいたると其れより背き去れるものが尠くなかつたので、卒直に言うて、わたくしもまた曾つて一二の小文の發表を通して其の背叛者の一人であつたことである。ところで、増井氏もまた此の點つよく、名目主義の行詰りを認められるのである。「まことに章券主義學派の陣營は、貨幣價值を論ぜねばならぬやうになつて、惡戰苦闘の跡が見える。……さればといつて、大戰後における歐洲諸國の狀態は金屬主義論をもつてしては到底説明し盡く

せない多くのものを持つてゐる。」(同上、六八頁)。「この時に當つて、心から顧みるべき新しき途は二つしかない。」で、この新しき途二つとは、源を奧太利派に汲むリイフマンの所説と、さうして主としてカント哲學の立場からジムメルを經過して進んだる左右田喜一郎博士の見解とである、と彼れは解する。

この間にありて、増井氏は第一の途によらず、また第二の途をすすまずして、おそらくは第三の途と彼れには映つたであらうところのヘルツフェルダアのわずかに拓いた徑を顧みたのである。へ氏は、貨幣は、經濟生活のおのの瞬間において靜態價值をもつもので、かかる價值のうちにこそ貨幣そのものの本質が存するとする。さうして、わが著者はへ氏の所論に多大の興味を感じ、その論評の結び「……生活の論理に導かれて此所まで來ると、貨幣の價值はつひに經濟社會の靜態的考察といふ點まで、行きつかねばならぬ。へ氏の貨幣學説は、けだし此の方向における最も深き歩みである。」(同書、二六二頁)さうして右の引用文における省略箇所には實に、左の語が讀まれるのである、「貨幣の對外價值の理論にとりて、殊に外國爲替投機の盛んなる今日において、この靜態的貨幣價值説の有つ實際的

意義は決して輕くはない。」(ここに幾らかの私の言葉を許されたい。このへ氏學説を一語にすることは到底不可能であるが、其れは質的にして同時に量的なる價值數の概念を核心とするもので、國民的總財産の潜在力が何時にても顯現力とならうとする靜態價值なるものの把持者こそ貨幣なのであり、其れは國家的強制力に基かず、自から先驗的に存在するものであると云ふごときの考へである、と私は理解するてふ事である。)

五

まさしく否な恐らくは此れであつたであらう、——増井氏が此のとき心から顧みるべき途二つありと呼びつつ、しかも、かのリイフマンの途、又はこの左右田博士の道の何づれをも進まずして、けい、き、よく、多きところの、この第三の、即ちヘルツフェルダアの、小徑をパイオニアのごとく拓き進みゆかれた動機といふものは！密かに思ふに、この小徑を拓き進むによりて、主として取扱はれたる國際貨幣流通に關する諸問題(同書序文中の語)の展覽場たらしめたところの、その後篇の諸章殊に第六、七、八章への、思想的橋梁を見出さうと試みられたものではなからうか？はたして然らば、その構想は正鵠を得てゐる

ものであるし、また着想^{アイディア}において可なりの獨創を示すへ氏論議をもつて正統派名目主義の弱點を救はむとせられたる、我が著者の意圖そのものにいたりても、或る程度までの効果^{効果}を収めえたものであると思はれる。さりながら、ヘルツフェルダアの價值數の概念による靜態價值の理論そのものが可なり深刻なる理解力を要請するのみでなく、其れ自體が極めて^{striking}な論理を内在しをること恰も米人アンダアソンの社會的貨幣價值論のスリツペリイネスに類するものがあるのを、われわれは知らねばならない。ここに復た難所があるのである。

かやうにして圖らずも思ふ、斯くまでの論理の王國を開展せしめて以つて名目主義價值論の弱點を救はうとする事は、そもそもカルタリズムス其れ自體の思想よりして内面的にエマネットしてくる必然的要求なのであるか否か？ 其れが既に一箇の問題であらねばならないと。本當のところは、この團體主義的な見方のうちにこそ、貨幣を名目主義的に見る基礎があるとともに、逆に、この名目主義の採る團體主義的な見方に立つからこそ、さらには又、その見解の必然的結果としてこそ、名目主義的論考のうちには、此の論争點たる貨幣價值の問題が、自分自身の而して本來本然の問題とはなつて來ないのではな

からうか？ 少くとも斯かる考へは、かの後とより挿入されたクナツプ主著最終章最終節「貨幣價值及び價格に關する辯論」に現はれてゐる、初めのはうの論議の行間^{ビトウインゼン}よりして讀みとりえられるところであらねばならぬ。然し、其れは、この著者にとりては全然交渉のない餘談であらう。何故とならば、名目主義その後の發展集大成相を採り、更らに其の上は何ものか其れに足りない部分を補足すべく精進せられるのが、ここ當面における著者の武者振りなのであるからだ。

漫語のついでに「アダム・スミスと貨幣數量説」についての感想を一語しておきたい。スミスにいたるまでの數量説的思考發展の記述について同文が決して漫然、モンローの著作の類よりして得きたれるものでなく、可なり丹念に第一次源泉より考證し來れる跡のしるきを、私どもは認める。ただ人或ひは、これはスミスではなくして、リカルドウにおける數量説の論證にはあらずや、と爲すなきを保しがたいと思ふ。が、それは元もと「スミスにおける數量説」ではなく、「スミスと數量説」なのであるから、かかる論難は若し提示されたにしても、少くも明確には當らぬものであらう。

けれども、次いで、數量説てふ觀念を殆んど缺いてゐるところの名目主義中心の高き論調よりして、急に、エトランジェであるところの件んの考證に落下し來られたので、理解對象における急激なる轉換に出會うて、少なき驚愕を感じる人々も必無ではなからう。それにも拘らず、この著者の構圖は正當視せられねばならない。この數量説の潜在的前提なくしては、後篇中の或る章節記述は爲めに、或ひは、思想的背景の乏しきを訴へられることも生ずるであらうから。……ただし、同章にて、之に對する明確な結論を提示し來ない事は、或る他章における同様な場合に同じく、著者論態における遺憾として残る。けだし、人々は、アウフゲクレエルタア以上のものを同著者に期待してゐるからである。

六

とまれ、正しく滑臺に据ゑられたる純理の船は、今や現實の海へ進水し來つた。すなはち、半ば天上の概念界に住んだる論理は、今、おのづからなる方向轉換を試み、地上の世界にありたちて以つて生活事實をば解明しようとするのであつた。「前篇より」後篇への進行に伴うて現はれきたる思想的展望が、之に外ならない。

實に其處にては、前二章にて展かれたる經濟生活の發展史的考察より、後三章にて示されたる國際貨幣流通の現實的觀照にわたる、二つの論集團の何れも、より多くの現實的動的空氣を呼吸してゐる。（ここにては暫らく、松方公業績に巧みにもあざなはせて明治金融組織の發達を史論したる、最後の一章に至りては、それが輝かしき長篇なるにも拘らず、一箇單行的な論策なるのゆゑをもつて、觸れないことにする。）と同時に、其處にては、増井氏の眞面目ないし學問的本領と言ひも得られるべきものが、より鮮かに現はれてゐる。いま、たまたま本領といふたやうな漠然とした語を用ひると、私の聯想癖は圖らず、かのギツフェンの有名な「バヂオット評」をおもひだす。——其れは、バ氏が政治論金融論その他何れにてあれ、往くとして不可なるなきうちにも圖らずも打ちこんだる其の現實的金融經濟論において其の本領が見出だされると云ふ、評語なのである。事實「バヂオットの」英國憲法論よりして、その「ロムバード街」に讀み轉するとき、眞骨頭の有する内在力によりて讀者の心はやすやすと開かれるのである。その本領の在るところだからである。いま吾人は勿論、同著者の強き又た弱き局面の何れに在るか、敢へて尋ねようとするものでない。が、氏はおそらく抽象的論理よりも寧ろ、現實的流通經濟現象の觀察解剖及び分析において、よりス

トロングなのではなからうか。すくなくとも私は、これら後篇の諸章に轉じたる時、恰も長き隧道を過ぎて大いなる街道に立ちいで、四邊豁達な大地の風光に接するの感じを懐いたのは、事實であつた。従うて斯かる氏の「本領なる此處にあつては、もはや管々しき引用を要せず、太き線をもちひて論旨を素描して足りるを覺えるのである。」

さて篇頭の二章こそは相ひまつて、看者のおよそ、壓卷の文字を形成するものと爲される所であらう。まづ第四章「經濟組織の發達と貨幣の機能」は、左右田博士の謂はゆる貨幣經濟前期を姑らく措き、ラアフリンの謂はゆる或る第三財が間接交換の手段化されたる貨幣經濟の成立以降について、現代の箇人主義資本主義營利主義の經濟生活より集産主義進みて共產主義の其れに亘り、貨幣の機能には、そもそも如何なる變遷が在りたるか、將た在るべきであるかを考察し、以つて貨幣の本質の認識に對する若干の暗示を提供しようとする試みである。ウオオカアは曾つて「貨幣の盡す作用を盡すものを貨幣と云ふ」(Money is what money does)といみじくも定義したのだけれども、其れは勿論、自足完了の定義ではなく、然らば貨幣は如何なる作用を盡すか」と云ふ、次ぎの問題に進まざるを

得ない中間的定言に過ぎない。さうして今、この著者は、件んの進める問題をば動態的に把握しようとするのである。彼れは、其が交換手段たるより起り、支拂手段たるに伸し、今や營利手段たる機能が最前景に現はれるに到つたる、經濟生活の發展相をば、可なり該博に然し不幸にもカール・メンガーのとは異なる視角よりして、史論し來つてゐる。

おもふに右の行論は、貨幣資本生産資本金融資本の權化としての貨幣の作用を凝視し來りたるものであらう。そして、今日其れが主として營利手段に用ひられるといふのは、「……結局、經濟單位殊に企業の立場において、計算用具として使はれるといふのと同じ意味になる……」。(同書、一八八頁)そこで彼れの覗うてゐる所に漸く近づく。即ち、この意味における貨幣の存在理由は、集産主義においても同様なのであるが、然かし、その貨幣は今日の其れとは餘程機能を異にして來る。けだし、其れは最早や營利の手段としてでなく、「……官憲が經濟上の計畫を立てる場合において、經濟單位の爲めにでなく、社會全體のために、計算の用具として使用されるものであるからだ」と言ふ。(同上、一九四、一八七頁)然らば、其の結論とするところは、何であるか。いま手短かに言へば、その完成するまでは、貨幣は經濟的方面に強く作用する、ところが其の完成の曉には、交換よりも寧ろ支拂用具と

して法律的方面に有力に關係してくる、更らに生産手段が漸く社會化されていくことになれば、貨幣は再び社會全體の爲めに計算用具として有力に團體經濟的に働くことになると云ふに在るのである。(因みに、この完成迄と完成直後とにおける作用きの差別観は、メンガアの有名なる「貨幣生成の論證」——「國民經濟學原理」第九章第一節——にも見えてゐる。)

按ずるに、次の文章にても、此の同じき思想が窺はれるのであるが、資本主義より産業の社會化へと云ふ趣向にかかはらしめて或る經濟的インスティテュションの職分上の推移變遷を考察する事に、この著者は特殊な興味を示してをられる。そして其れは、經濟生活の團體主義化または社會化を考へるものの必然に、直面すべき最も興味あるテーマたるのを失はぬのである。一つ難點を言へば、氏が行論途上、價值尺度でふ機能を明かに認めず、わづかに其れを營利の手段と同じ意味なる旨を暗示しをれるに過ぎないことであらう。然るに斯かるごときは、一方にては價值論における名目主義の行詰りを指摘するとともに、他方においては更らに國際的貨幣價值變動を現實的に詳述しようとする、わが著者にとりては、再顧せられ、再吟味せられるべき點ではあるまいか。

七

とまれ、かの文の目標は産業の社會化の傾向より貨幣機能における發展方向をば高所より眺めるに在るのだから、かかる細目を超えて大體の思想を鑑賞するのにとどめ、轉じて同工によりて企業者職分の發展を考察しようとする第五章資本主義の成熟と企業者の地位を顧みることとする。それは恐らくリイフマンらの所見とともに、典型的な資本會社すなはち大株式會社をば資本主義成熟期における企業形態發展の趨合であると看、その時代の企業者の眞職分を尋ねて結局眞の企業者と見るべき株式會社重役の地位のいよいよ高まれるのにつれ資本家たる一般株主に對する營利、一般消費者に對する善き勤勞の提供、および従業者一般に對する福祉的配慮ごとき、もろもろの任務の發達を考察したものである。これを一言に盡くせば、その産業の合理化および社會化に伴ふ其の企業的社會的職分の發達を、究明したものである。かの名目主義の價值論を補完するべく會つてヘルツフェルダを引き來れる、此の著者は、ここにては、米國の新進ナイト氏の新見解を紹述してくる。この點まさしく、著者が百味筆筒の持主いな巧みな利用者である

ことが窺はれる！ すなはち、企業参加者の收める利得の轉來する源泉を「不確實」と「技術的危険」の二要因に別ち、重役から總支配人、支配人、部長、課長、一般社員、職工、職工と、下だるに従うて、其の負ふところの危険には、不確實の量が減じて、技術的危険の量が増はる、(同書、二一七頁)と同時に、その報酬もまた利潤から賃銀に變はつてくる(同書、二一六頁)旨を説けるものが其れである。この見解には興味ある理論が含まれてゐるのだが、中んづく本當の企業者——産業界の將帥は何人であるかを尋討し來られた理論の中にこそ、私どもを強く打つたる考へが閃いてゐる。言ふ。「昔の將帥は……財産の所有といふ偶然の狀態さへあれば皆な直ちにキャプテンたり得たるものである。従つて、その將帥は一に専ら財産に指導せられ……無意識に營利の途のみを辿つてゐる。然るに今日では多少の財産を積んで株券所有者となつても直ちに産業界の將帥とはなれぬ、今日のキャプテンは決して偶然からなつたものでない。企業が大規模となり殊に株式會社制度が完成するに至つて、社會における企業者の選定の方法は往時の單なる偶然から離れて、合理化した。即ち、資本會社の出現は企業者の選擇範圍を擴張して資本所有といふ條件から解放した……社會が資本の所有よりも寧ろ眞の企業者の能力を尊重するからである。廣く

人材を天下に求めんとする要求からである。……株主は單に投資の安全を監督し得る程度の利害を有するに止まり、豫め計算されたる収益以上の利益を收めんとする企業本來の意思を失ふた。之に反して、眞の企業者と見るべき重役の位置はいよいよ高まつた。……産業に對し、單なる収益以外の目的を設定し得ることが、即ち資本主義爛熟期における(此の眞の企業者に文化的使命の存する所以である。)(同上、二一九—二二二頁、ただし括弧内の語は、私のもの) 右の言葉によりて、著者のねらへる所は何であるか。それが、同章末尾に見える「投資の社會化と生産の會化である」ことは、更めて言ふまでもあるまい。

右の著者の言説は、英米獨諸國企業界においてますます著はれて來てゐる現實、否、な輓近本邦にてもいよいよ顯現し來てゐる現象を正だしく認識したるものである。むしろ、かく能力ある企業家を任意に且つ計慮的に選定し得べき目的のためにすら、株式會社企業制——「デョイント・ストツキズム」は發達したとともに、既存の株式會社は大規模化し來つたとも看えられる。ただ一見問題となるのは、この點を可なり力論してゐる先覺の著述(例へば邦書にても、ユモラア「企業論」。ライフマン「企業形態論」。福田博士「國民經濟講話」第二卷、第六編、第三十七章。上田博士「株式會社經濟論」中編、第一章。同「社會改造と企業」一、等)の考慮

または考證によりて、自家所説を確認せしめる手法を採らなかつたことであらう。が然し、私見を挿むならば、其れは従來多くの文獻が「企業の研究から出發して後に企業者に及ぼしてゐるが故に、企業者そのものの意義は常に不明瞭を免かれざる」ことを（同上、二一〇頁）顧みられ、企業者そのものの意義および地位を前景にすゑて、端的に此れを描出しようとした、意想むしろ意識から出たものではあるまいか。しかし、斯かる着想むしろ獨自の見識からではあるまいか。

しからば、其れは可なり効果を收めたものと思はれる。かやうな研究法に據れるがため、右の引用文中とく、括弧内に挿んだ拙言「眞の企業者すなはち重役の使命をば、往年かの福田上田兩博士間に應酬せられし如きの難關を乗りこえて、直截に論究しえたものであるからである。ことばを換へて言へば、隱約のうちには企業者の職分の分擔を認めつつもなほ事實上の損益負擔の危険を荷ふ株主を凡そ企業者と看す、ただ専ら、その經營上の指導者であり主宰者である（Fuehrer oder Leiter）重役を直ちに企業者と看做す事によりて、彼れらが出資者と消費者と従業者とに對する職分、即ち社會一般に對する任務を、簡論しえたものであるからである。而して、産業の合理化社會化を力説せんとする此の著

者の意圖、および企業者に關する通念に顧みて、之は正當な推論であらう。ただし、かの株式會社組織における「眞實の企業者」の何人であるかを「理論的に」——勿論「法律的に」とまでは言はない——説明すべき全責任が、同文によりて解除せられたものとは到底思惟し得られない事は勿論である。（福田博士、前掲書、一一八—一一九九頁。上田博士株式會社、濟論一〇三頁。同、社會改造と企業、十七頁）因みに言ふ、同章は、同書後出の附録「ラテナウの觀たる産業組織」に現はれてゐる著者のラ氏禮讚の言葉と併せ讀むによりて、その見解を層内面的に捕捉し得られる事であらう。

八

もし其れ第六、第七、第八章に展開された一層現實的な論策の集團に到りては、實に同書の掲げる一大主題「貨幣流通理論」の核心であり、動態的貨幣理論そのものであり、また著者最得意の壇場でもあること、其は世上周知のところであらう。

まづ其の初めなる爲替相場の決定については、其の行論の順序の妥當性いかんを描く

とすれば、盛られたる内容においては、決して掛け値なしに言うて、同題を掲げてゐるビグウ、カツセルの論文の以上に殆んど剰すところなく盡くしてをり、充分に後出二章の前論と看做し「えられるものである。氏は章頭その行間より読みとりえられるクナップの概念を道うて、爲替相場をば主として爲替手形に對する「價格」と考へ、その變動を惹起する諸勢力に關する從來學說を檢討しつつ、今日の現實相の觀察の結果を右に加量して以つて爲替相場決定理論を盡くさうとする。ただし諸學說とはいへ、同章中最大の興味を傾けられてゐるものは、購買力平價説の考察と、内外市場における爲替投機の影響とにあるやうに見うけられる。而して其れは、正當である。すなはち、今日のごとく英米ほか一二小國を除く大方の謂はゆる金本位國において、自由金市場 *Free Gold market* の運用が事實において停止されてゐる現勢（一九二六年春の狀態）を顧みての論策としては、正當であるのである。ただし、この狀態の下にありて、基本的とする一時期より他時期にわたりての爲替相場の變動の近似價的説明が、少くとも購買力平價説の「比較的部分」において見出されるものと、私は見るものである。すなはち、ビグウの説くがやうに、同説は由來、基本的、一定時期における二國の貨幣單位の有する國內購買力 *internal purchasing power* の比較的な數表的

示が其のまま其の對外購買力 *external purchasing power* の表章に一致するといふ積極的部分と、一度かくして得られた數表的表示を基本として其の後ち關係二國內における同購買力上に變動の生ずる毎に其れだけ其の爲替相場が騰落するといふ比較的部分とに、別たれることは本當である。そして又、ビ氏の解するがやうに、「積極的部分にして眞ならば、比較的部分はまた必然眞でなければならぬ。けれども逆に、積極的部分にして若し謬れりとしても、その比較的部分に到りては尙ほ眞實であり得る」とは明かであると思ふ。（*Butt* on, *Essays in Applied Economics*, London, 1923, ch. xv.）即ち、一定時における二國間の爲替相場が

其の時限における購買力平價にて正しく表示せられる、とは言ひ得ぬにしても、一定時の後に生ずべき爲替相場の變動の方向と其の幅に到りては、大體その後における兩國内の購買力の變動に平衡しゆく傾向を有するものと思ふ。（會々本節校正の砌り、同主題の精思精論を含むの名篇の新聞に接した。山崎覺次郎博士の若干の貨幣問題、第三篇之である。）

かくて、著者増井氏の見解にかかはらせて言へば、「或る種の政策上の目的に對しては便利なる法則であり得る以上の權威をば、此の學説は、内在してゐるものと思はれるのである。そもそも貨幣數量説の示す大體的傾向を承認する限り、或る種の政策上の目的より

してすら、購買力平價説の便利なる法則なる事を承認すべき筈であるが、グスタフ・カッセルの入念に考察したる多少のデヴィエーションを考慮し斟酌するならば、平價説はこの著者の幾らか吝み示されたる以上の賛同に値ひするものであらねばならない。(Casel, The World's Monetary Problems, I. Memor. ch. v. ; Do, Money and Foreign Exchanges after 1914. ch. 2.) けれど、一面には金本位制の運用が停止せられてゐるとともに、他面には國際貿易關係が復舊せられず國內に尙ほ紙幣の洪水があふれてゐる、今日及び明日における國際支拂現象を説明するものとしては、元と金輸出入の自由を前提とするところの、支拂差額説、貿易差額説又は需要供給説のみにては、不十分であるからである。また、斯かる狀態に大凡そ妥當する説明として、購買力平價説に立ちまされる理論としては、尙ほ見當りさうにないからである。(ここに金本位制運用の停止とは、一方にては金の輸入および自由鑄造を、而して他方にては金の自由輸出または自由兌換のうへにての自由輸出および自由鑄造しを内容とする、自由金市場の狀態の失はれたることを指す。)

しかして、次いで自由金市場の運用の喪はれた場合には、銀相場の變動を豫想して行はれる金爲替への短期投資的投機取引が銀爲替の中心市場より浸入し來ること、また將來にわたる金利政策爲替政策の變更を豫測して行はれる同投機取引が廣く世界の爲替中心市場より襲來することは、共に避くべからざる必然的情勢なのであるから、此れらの事情が購買力平價説その者の含んでゐる若干の缺陷と相ひまつて、其の理論の指し示す方向より、其れだけ轉位^{デヴィエーション}するのだ、と解釋して宜ろしいと思はれる。要するに幾らか教科書的になるにしても、同論文にして若し、まづ自由金市場の行はれる場合に妥當する理論を説き、次いで購買力平價説の内在する弱點を批判しをはりに同文にありて最も輝ける「投機を胎める投資」と「投資を胎める投機」とが現實に爲替相場に及ぼす影響を纏めて舉示されたならば、より優れたる効果をもたらし得た事であらう。そして若干、本文の目的外にわたつけれども、圓貨に對する上海または紐育筋より來たる單なる投機ないしは思惑買の爲替相場に及ぼす影響の様相、および強度については、井上準之助氏の著作の併讀によりて得るところ多かるべき旨を、申添へておく。(我が國際金融の現状及び改善策「第三章第四章」) もつとも、カッセルの論證にしても、又た増井井上兩氏の記述にしても、近き將來わが國のやがて、英米瑞等がすでに決行した金輸出禁止の解除に追隨するの曉に到れば、大なる程度において實際的には不要のものと化すであらう。けれど、貨幣の對外價值

安定に對しては金屬主義による本位制の運用以外に他の歸趣はないであらうし、そして然る上は全體としての國際貸借を改善する外に他の良途はないであらうからである。

九

いま轉じて第七第八章殊に第七章に讀み進むならば、最も優れた文字が見出されるであらう。ただし、私はさきに小書きしおいたごとく、ここにも再び、右の二章の順序を轉換し、一つには「後至者」をば「前出のもの」の論理的連續たらしめ、二つには其の後至者たらしめられるであらうところの「D-1」案の國際經濟理論をば卷末において最も光る理論的な大結びたらしめるの、より適切なる所以を、切言するを禁じ得ないものである。もつと卒直にいへば、この二章は別たれずに一長篇とせられて差支へないものと思はれる。

實に第八獨逸賠償金問題の前途中には、それ獨自の考察の展開と看らるべき、其が獨逸の立場に立ちては何故にかく行惱むのであるか（同書、三二〇頁以下）、戰爭に基因せる國際貸借の棒引論が何故に英國に可能であるのに對して米國には殆んど不可能なのであるか（同上、三三八頁以下）、人為的に起された膨脹證券の制度が何故に破綻したるか（同上、三三

五頁以下）等の問題への解答ありて、獨自に傾聽せらるべきの見解すくなしとはしない。のみならず、昨年ロカルノ條約が結ばれて獨逸を國際聯盟に加へたれども、露西亞は超然この國際的協調の圈外に立ち、勢ひ國際政局を暗らくしてゐるのであるから、著者が同文の結論中に力説されたる「露西亞を再び世界經濟の一單位に加へること」は實に、右の賠償金問題を超越する底の一大緊急問題にすらも屬するのである。かくて、その獨立の存在理由は充分、同章の所有するところである。が然し、大局より觀ては一記述的説明に外ならないところの同章の内容を讀みし、然るのち「D-1」案の國際經濟理論に進むことと爲したならば、この後者中に展開されてゐる、深き純理を把握するに、より、恰好なる準備的序説が供與される形ちになつた事でもあらう。

それは、さて措き、そもそも「D-1」案の内在してゐる國際經濟理論は、まさしく「貨幣經濟の漣を超えて、實物經濟の深潭に注がれてゐる。」（同上、二七九頁）だから、そこでは、貨幣流通經濟を裏付ける國際經濟生活の實相を透視せんとする鋭き理論的ジンが要請されるのであるが、わが著者は果して、モルトン著作をよくそしやくし、且つ之を超えて、正だしき歸趨を指標してゐる。すなはち、賠償金總額は……一、應、千三百二十拾億金馬克となつてゐる。

るが、實際上は將來において發生すべき輸出超過額のみが、其の賠償の標準および限度となる外はないのである。しかも今や一弗約四馬てふ爲替平價の強制的に維持されてゐる限り、いはゆる爲替關係による人爲的出超は望み得られぬとともに、其れが若し可能となつたにしても、獨逸國民の生存と健康を脅かしてまで、その既存國富、否、なより、惡きものとして將來の生産力を奪取するを得ないと論ずる。(昔日のフリードリヒリストが、獨逸國民の將來を憂へて、「國富それ自體よりも、限りもなく遙かに一層重要なものは、國富を創造しゆく國民力即ち將來の生産力である」と論策したる如きの熱情をば、實に往年の「婦人職業問題」の此の同じ著者は、同國民のために披瀝してゐる！)

そこで其の結論は、此れ以外には在り得ない、……獨逸内外の貨幣經濟の回復を俟つて、「他のすべての車輪は、國際經濟の自働的運營によつて回轉しはじめ、獨逸の國力の許す限りにおいて、賠償金の收受は完全に果される筈である」。(同上、二九八頁) 然り、は、す、な、の、で、ある。この「筈」を完うするには、「……何を措いても一部分の生産力は留保されねばならぬ」。(同上、二九八—二九九頁) さらば、此れと彼れとは、果して矛盾するところなく遂行し得られるであらうか。之は明白に難中の難であらねばならない。而して斯かる豫想は、ひと

り一家言なのではなく、少くともドーズ案の黒幕の背後にをつたところのケインズは勿論、ドーズ氏の片腕モルトン氏以上に實は同案作成に直接參與したところのデヨサイア・スタンプ卿の見解も、同然なのを見るのである。思ふにドーズ支拂計畫は、増井氏の言ふが如く「ヴェルサイユ條約に對する本質的の挑戦なのであつた。そして此の挑戦は見事に勝利を克ち得たのである」。(同上、二五九頁) で、私は、之に對して附言したい、第二のドーズ案は必ずや近き將來に生れ來り、見事第一のドーズ案を修正して、獨逸國民否、な歐洲諸國民の生産力—恆産—恆心を支持するであらう。矛盾の統一は其處にあると。ただし、之を招來すべくんば、戰爭革命は、斷じて起されてはならぬ。Cease making war!……Cease making revolutions! この如きはあへて、カツセルを待つて知るべきでなく、斯くして、何ものにも超えて、歐洲諸國民の有てるところの帝國主義的な國際心理は、改造されねばならない。

一〇

以上、長文を草し、新著紹介の埒をとくに踏み超えて、私かにおもふ、その之を稿する動機は果して何であつたかと。まづ本質の純理において貨幣の概念を明かにしつつ、ついで

流通の觀察において貨幣經濟生活の動態實相を明確に示したる其の論法の妥當なるに動された爲めであるか。其れも、あるにはあつたであらう。が然し、一つ一つのメリツツを超えて、その全體に漂うてゐる團體主義の見方に立つて、貨幣經濟生活の行手を統一的に見通さうとした其の精神其の論究の態度が、強く私を打つたが爲めに外ならぬのである。「この上みは一體どうなつてゐるのだらうか。……このさき、本流と看做すべきブリガツハに沿うて何處までも行くなら、ドーナウはだんだん細つて行き、森深く縫うて行つて、谿川となり、それから泉となり、やがては苔の下た水となるであらう」。齋藤茂吉氏稿、「ドーナウ源流行」いくつかの國土を限りては國土に没しつつ息もつがせず流れてゐる此の大河の水は、その黒海に放出されるまで、源流、苔の下た水の生命をそのままにやどして漫々と流れる。大きな連続と統一が、其處にあるのである。いま私の見きたつた同書全巻を流れる思想は、縦し其の調子に高低緩急があつたにしても、「斷絶されざる團體主義」であつた。苔の下た水は、團體主義であつた。かやうにして言はんとし言ひ得ざる思想の、力強き此の表現に出會うて共鳴禁じ得なかつたのには無理がなかつたのである。

おもふ、私は會つて「社會對立より社會連帶へ」の文（大正十二年十月稿）を結ぶに、左の一節

をもつてした。「……それは、一九〇五年以降少くとも獨逸學界の興味をあつめた貨幣價値の根據に關しての金屬主義より名目主義への論争なるものは、畢竟するに經濟思想における個人主義より團體主義へ、無機的經濟生活觀より有機的經濟生活觀へ、放任經濟主義より統制經濟主義へ、又た綜合經濟主義より共同經濟主義への傾向を示すものに外ならず、言ひ換へれば、絶對主義より相對主義へ、唯物觀より社會連帶の理念に導かれての唯心觀へ、また自然主義より浪漫主義ないしは理想主義への思潮の、轉向を象徴したるものに外ならない」と云ふのである。かく觀ることによつて、實は自分もかねてクナツプ貨幣國定說に對し、更らにベンディクセンの貨幣の經濟的唯名說又は章券主義に對して抱いてゐる敬意を新たにすると同時に、デイールのクナツプ說酷評に對しては、ベンディクセン又たリイフマンと共に、之を論難せんとするを禁じ得ないものである。かくて、現實界に現はれる貨幣問題殊に其の對内對外價值問題が、凡そリカルドウ一派の又はより窮屈なるラアフリン一派の金屬說をもつて、理論的に將た實際的に明解せらるべきことを尙ほ信するにも拘らず、觀念界に否な寧ろ理想の王國に現はれるべき貨幣價值問題に到つては、却つて名目說または章券說によつて普遍的解釋の與へらるべきことを拒否し得ざ

るゆゑんは、一つには、後の説の背景には、確かに團體主義の思潮又は社會連帶主義の思想あつて、之を基礎づけてゐることが直感せらるればこそである。……〔拙著改訂増補金融經濟の諸問題。第一編の末尾の言葉。〕

かやうな考へを抱いてゐる私としては、團體主義の世界觀よりエマネトシ來たれる名目主義に對して、勢ひ、深甚の敬意をつながざるを得ないのである。ただ、その價值論に直面しての「その行詰りの打開の道程」については、言ひかへれば名目主義に内在するディアレクティックを超越する論理については、私は増井氏のヘルツフェルダの見解の強調にも拘らず、寧ろ尙ほ依然として近時の「劍橋大學派經濟理論」に就かう、否な其處に安住し得ようと考へてゐるものではあるが。――

これを要するに、同書が斯學界本年の最好收穫の一たるべきは明白。五月の花に背いて此れに沈潜し而かも秋毫も悔ひる所なかつたのである。ただ、をはりに一語表明したのは、同氏の貨幣物價理論の一新著作の發表の速かに實現せらるべき期待の心に外ならない。いま氏の斯かる貨幣理論の思想的礎石が團體經濟生活の認識にあり、またこの

認識がベンディクセンによりて最も鮮かに展開されてゐるのは言ふまでもないが、同氏のベ氏所論への傾倒に到つては、同書行論の行間に充ち溢ふれて見える。……Der Einzelne arbeitet fuer die Gemeinschaft. Alle fuer alle! ... Stellt sich die Produktion in den Dienst „aller“, so nimmt die Konsumtion den Dienst „aller“ in Anspruch. Benjixen, Wes. d. G. S. 27. 増井氏「同書」二二頁。の記述と對照せよ。而して其の當のベンディクセンは、主著たる單行書貨幣の本質を、まづ發表しおいて、そして其の基礎の上に三部の名論文集を築き上げたことであつた。轉じて、今わが座右を再顧すれば、大體において名目主義論者なる我が著者は、斯く、その論集を、まづ公けにされたのであつた。この故に、先人ベンディクセンの業績をば唯だ逆に行くべき爲めにすらも、われわれは約束されたる氏の「多少纏りたる一體系的」著書の刊行を待望して已まないものである。（大正十五年五月。）

第九篇
リイフマンに於ける景氣理論と景氣政策

- 一、十五年間に發展せるリ氏景氣理論の核心と此れにて卷首二篇を補ふの正當理由
- 二、謂はゆる限界餘剩均等法則にて一貫されたる經濟學體系中には必然同法則の經濟社會政策的一應用たる景氣理論政策の集成組織さるべきの所以
- 三、この理論の紹述及び評價の方法並びにピグウ新著景氣變動論の與ふる暗示
- 四、痛烈なる恐慌の代りに出現せる景氣變動の徵候
- 五、景氣變動の終局的二原因としての營利活動特殊化の發達と最高流通原理たる箇人的收益努力の無統制並びに之を強調する技術的進歩
- 六、景氣變動の必然性と必然害の認識より由來せる共同經濟態への渴望と其の不能性
- 七、右の歸結たる景氣政策としての社會的諸統制及び其の限界
- 八、右の理論を援きて考察せる本邦近時の經濟生活の沈降に即しての眞實にして有效なる景氣回復方策
- 九、偏一方的なる此の景氣理論の包藏する三缺陷——仍りてカッセルへ、更らにピグウへの轉向

—

グスタフ・シユモラアは曾つて、民族性國民型の生成を論じて、箇々人また國民の生活する善き精神的、道德的、雰圍氣すなはち環境が、隣人また國民總體の精神力の發展に對して與ふる作用の偉いなる理義を強く考證した。そして斯かるミリュウの力を深く感じさせるものが、また頃來われわれの學問的、生活でもある。すなはち、ちかく唯物史觀の修訂と歸趨を論じた砌り、僚友A氏は學としての社會政策體系の根基を主張すべくんば、ヴェンデルバンドの二範疇の科學的概念を藉り來るよりも寧ろリツカートの價值關係的態度を一步進めたる評價的認識の意に據るを妥當となすであらう、と言はれたのである。が、更らには又、曩きに景氣循環理論と景氣政策を説いたとき、同M氏は、リイフマン見解を一層深く顧みるべきであらう旨を暗示されたことである。オゾオンこき松林の内にて呼吸するとき、力強き斯かる學問的、ミリュウを生活するによりて、私は若返へさせられるのを覺える。幸福に思ふ。

そはともあれ、この文の起草を刺戟した動機の一つとしての宮田喜代藏氏の所見にい

たりては學問的客觀性の要求を失ふことなくして此所に記述し得られるものであらう。すなはち氏は、同文をもつて景氣總論は一とわたり關説せられたことであるが、更らに同各論に、殊には本邦に即しての現實相の研究に、進むべきであらう事。並びに最近時の優れたる景氣理論家として主にもシュピートホッフ、カツセル、リイフマンの諸見解を徵すとなしつとも最後のものに到りては顧みたるどころ僅かに其の斷想に過ぎざる事を指摘せられたのである。

みぎの評言の前者については、例へばパウエル・モムベルトの事實上の新著「景氣理論研究入門」改訂版（一九二五年）、さらに輝かしきビグウの近業「景氣變動論」（一九二六年）ごときの一層の系統的體系の提示されを限り、私は未だ綜觀を了へたりと爲すの勇氣を有たぬものであるし、また本邦産業に即しての現實的研究にいたりては私の將來の仕事の一つに屬することでもあるから、この點ただ首肯するに止める外はない。が、その後者については、多少の言詮の在るやうに思はれる。けだし、此の方面におけるリ氏斷想の最重要なるものとして私の引用した、リイフマンの一九一二年夙く發表したる「貯蓄と資本形成理論」(Tiefmann, Theorie des Sparens und der Kapitalbildung, Schmollers Jahrb. 1912, Heft 4)中の言葉は本書

第一篇第八節および第十三節参照)そのまま同氏近時の二著述「經濟學原理」(Tiefmann, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 2. A.)第二卷第十編および「一般經濟學」(Tiefmann, Allgemeine Volkswirtschaftslehre, 1. A.)第五章中に、再三現はれをり、従うて渝はらざるリ氏の「根本思想なることが明かであるから、従うて又た遡りては私の論態も一應は肯定せらるべき筈だからである。すなはち逆にいへば「原理」中に隔字間語にて明記されてゐる「交換經濟社會の組織における此の機構的缺陷、即ち技術的發達の影響のもとに、私經濟的收利性と國民經濟より見て合目的(合理的)なる資本形成度との間に必然發生する不適合性といふ缺陷、または必然的關係のうち、予は、恐慌問題を解明すべき最深奥の原因が横たはつてゐるものと理解する」とは、リイフマンにおいては實に、十五年前の舊想にかかるものであるからである。(「原理」第二卷、一九一九年。七六〇、八五三頁。「一般」七〇頁。)

ただし、この十數年の間には、おなじ思想おなじ論理も、著しく精醇化せられ深化せられ且つ補足せられ統合化せられてゐることは、一層明白なのであるから、此の景氣に關聯するリイフマンの近時の見解を、改めてより詳しく紹述し又た批評するの意義あることは、もちろん私の認めざるを得ないところである。

二

で、斯かる仕方にて前きの文を補はうとする動機は、單り右の事由のみに發するのでなく、もともと流通現象を重視し専ら交換流行程のなかに有らゆる價格關係を解かうとするリイフマンの思考においては、この價格關係を左右するところの景氣變動問題は、必然的に重大なる關心の對象たらざるを得ない、と云ふ省察も存したことである。それは必ずしも、靜態經濟の研究に續いて動態經濟の其れを接置せしめ其の理論的經濟學書の全四分の一を動態經濟論に割けるところの、カツセルの如き方法を探らぬのであるが、リイフマンの經濟學理論、殊にその大著第二卷、交換經濟理論體系においては、景氣消長理論は、切實且つ廣汎なる問題として、價格所得の論考を裏付けてゐるからである。さらに況んや、その「社會主義の歴史および批判」、また「企業形態論」「企業聯合及び企業合同等の諸著作」において、大戰直後における獨逸經濟論争の「一中心たりし」「社會化運動に對し、明確に抗争の立場を宣示せる限り、リイフマンは斯かる立場の前提としても、明確に景氣理論を把握しをるべき筈であるからである。が然し如上、我觀をもつて、景氣理論におけるリイフマン

の地位を云爲せるのみにては、些か心許なく思惟されるので、私はしばらく、福田徳三博士の見解を藉りるによりて、彼れの地位の重さを窺はうとおもふ。

同博士に據れば、景氣理論（正しく言へば、それは餘剩價値の理論なのであるが、姑らく斯く解するとも結果において大差はない）の集大成は將來恐らく、生産物に關するマルクスの考へ不足を補ふにリイフマンの生産物または餘剩または収益の觀念をもつてするとともに、循環に關してリイフマンが正しき理解を缺如せるを、マルクスの凝視したる循環の觀念にて補足するところに存するであらう、と爲されるものの如くである。（同博士「經濟生活と經濟政策との周期性」第五頁。原書名、第一篇に出づ。）リイフマンの見解を重要視せられる博士の論態は、敢へて右の近業を往見するまでもなく、其れに先きだてる「流通經濟講話」にも散見せられるところである。すなはち其は同博士が「収益なる名のもとに此の餘剩をもつて價格および所得すなはち流通の説明の根本としてゐる」ところの、リイフマンを高く揚げ、次いで其の理論一切を貫ける限界餘剩均等の理義を指して「交換流通の行はれるのは限界餘剩均等の法則なる大原則の作用に外ならない」旨を確説せられる所よりして、十分察知し得られるところである。（同書一二七頁、八九七頁。）かやうに看きたれば、既掲佛文中に現

はれてゐるリーフマンへの高き評價は、同博士においては、十年の昔にすら遡り得られる考へなのであつた。

およそ斯やうにして、流通經濟生活の觀照理解につき、リーフマンの地位の重大なるは略解せられたる事として、然らば、この謂はゆる大原則は如何なるものか、又、右の法則は如何にして動的現象たる景氣變動の説明に役たつか、を瞥見するであらう。まづ、その靜態理論體系を貫通すべく、定立せられたる法則としては、メンガアに限界利用の法則あり、マーシャルに限界費用利用均衡の法則あり、又、タリカルドウを精化せるものとして、カッツセルに稀少性の法則ある事を、吾人は知つてをる。ところが、このリーフマンの限界餘剩均等の法則にいたりては、その徹底せること此れら先行法則に比較するとも遙かに優れたるもので、即ち其は、消費經濟従うて流通經濟を、又、た價格所得従うて資本形成を併せ説けるのみでなく、更らに國富の國際的分配における均等化傾向をすら釋明するところの、力強き法則たるものである。いな、其れのみでなく、同法則はまた轉用むしろ擴充せられて、景氣理論および景氣政策の解釋にすらも役立たしめられてゐるものである。（丸谷喜市氏「リーフマンの限界餘剩均等の法則」國民經濟雜誌、大正十五年三月號。同氏「南亮三郎著、最新學說、流通經濟の原理」同上誌、十五年六月號。南亮三郎氏著「最新學說、流通經濟の原理」、十五年二月。宮田喜代藏氏「リーフマンの國富均等の思想」同上誌、十五年八月號。參照。）

ただし、この法則自體および其の有する理論上の強弱は、丸谷教授の前掲論文に盡されてゐるので、ここにては本文の理解に便する限りの簡叙を施すにとどめる。そもそも自由競争の前提せられる限り、一切の價格現象は、凡そ其の動力を、交換流通の組織原理たる餘剩または収益——利用と費用との較差——への箇人的努力に發する。この収益を得んとする努力は、各經濟者の行ふ利用と費用との計慮に基づいて爲されるもので、謂はゆる「經濟の根本原則」又は「經濟原則」Das wirtschaftliche Prinzip が此れに外ならない。（丸谷教授は近著「經濟學教科書」において正當にも之に「最大餘剩の原則」の名を命じて此の觀念を擴充せられてゐる。この點なほ、南氏の再論せる「最小手段・最大效果の原則」の考へを參照。）そこで更らに、この箇々人の行ふ主觀的な収益努力が、如何にして價格の成立てふ客觀的な綜合現象に歸趨するかを、鋭き理論的形式にて定言したるものが、即ち「限界餘剩均等の法則」Gesetz des Ausgleichs der Grenzerträge に外ならぬのである。短かう言へば、それは、有らゆる財への價格が悉く、その生産に關する各生産部門ないし各企業の收める流通經濟的限界

収益が略ぼ均等化する如き關係において定まる傾向あることを指すものである。そして消費經濟はた流通經濟において、斯かる傾向の存する事が、箇人經濟上ならびに國民經濟上もつとも有利なる關係であり、従うて一國國民經濟上もつとも望ましき状態は或る財の生産に利用せらるべき資本労働の分量と、國民經濟全般にわたりて利用せらるべき同上分量とが、斯かる傾向の實現に向うて最も適合するとき、正當なる比例および關係に立つて居ることである。

そして經濟生活の一斷面を時間的に限りて眺めるならば、かかる組織はた關係は箇人的収益努力の絶えざる作用のために保持せられる。ところが、國民經濟における或る機構上の缺陷——其れには右と同じく箇々人の最も多く収益せむとする努力および其の期待も含まれての缺陷、*eine Art Konstruktions- oder Mechanismusfehler* が伏在して、斯かる關係は爲めに韻律的に動搖せしめられるのである。しかも斯かる如きは元と經濟生活それ自體の固有するところであるから、或ひは他部門に對する一産業部門への投資比率を定め、或ひは全産業部門への投資を統制し、又或ひは消費度に照應して生産度を統制する等の事共を企畫するとも、景氣の波狀運動を全たく根絶するは不可能のところである。

言ひかへれば、全産業の社會化おこなはれ、計畫經濟ほどこされ、また共同經濟が營まれやうとも、韻律的景氣運動を全たく絶滅せしめるは不可能なのである。

が、これと同時に、凡そ景氣變動を其の生起するがままに放任するは、經濟政策上はた社會政策上決して可なる所以を見出し得ないところであること、論ない。そもそも景氣循環は、それが縦ひ經濟生活發達の象徴であるにしても、其の進歩の原因ではなく、而して其の運動の激しき跡々には、無視さるべからざる經濟上、社會上、殊に分配上の缺陷を遺こして行く。さらには又、經濟生活を貫通するところの限界餘剩均等法則の實現の爲めにも、景氣變動に對し、吾々は、能ふかぎりの平衡状態または平靜状態を促進し具現せしめる必要がある。ゆゑに、既に、謂はゆる完全社會化運動に望みを繋ぎ得ざるところの人々は、勢ひ社會的、福祉厚生運動の方向を轉換して、まづ景氣運動の諸原因を討究し、進みて之に對應すべき經濟政策を講じ、斯かる政策を盡くすも尙ほ、貽されたる成果、または禍害に對しては、各般の社會政策を施さすを須要するのである。私の解するところに據れば、ピグウの新舊二大著「福祉經濟學」および「産業變動論」は、想ひ俟つて理論經濟の開展以外にも尙ほ右の經濟政策社會政策を考察せるものである。

三

ほぼ上述のごとくに、私は、リイフマンの景氣理論及び政策の眞核心を讀みとつた。短言すれば、彼れにおいては、理論と政策とが併論されてゐるのである。右が必ずしも獨斷にあらざる事は、同主題が、リ氏「經濟學原理」：“Grundsetze”にありては、經濟生活の現實の認識より其の理想の討究に架橋せられむとする第二卷第終篇國民的福祉において詳論せられてをるし、さらに同氏「一般經濟學」：“Allgemeine”にありては、一層明白に「經濟科學の進化と任務のを除いては其の最終章である流通經濟の規制中に記述せられてをる事で判知せられよう。かやうにして景氣變動の必然性の認識と、その平調的推移方策の研究とは、彼れの經濟生活の理解方法において、可なり大いなる關心の對象となつてゐるものと思はれる。

序であるが、本文起稿中に接受したピグウ教授の新著「景氣變動論」Pigou, Industrial Fluctuations, London, 1927. においては、右の考へは最も明瞭に最も徹底して展開せられてをり、即ち其の第一部には景氣原因論が、また第二部には之に對する調正策克服策が詳論せられて居るのである。そのリイフマンと著しく異なる論調は、ピグウにおいては、景氣變動原因を多元的に論證するものであり、隨うて其の統制方策に到りても頗る多岐に亘り居れることに外ならぬ。曩きのピグウの名著「福祉經濟學」の續卷である、此の「景氣變動論」は實に前者にも譲らざる底の精到該博なる——たとひ簡潔雄勁の徳を缺けども——一大論考なのであるが、事問題外に涉るので、此所にては措くほかはない。

さて、かかる理解のもとに、リイフマンの景氣理論景氣政策を紹述し批評することであるが、此所にも多少の言詮が要るやうに思ふ。すなはち、この「一般經濟學」にありては、同主題は第三章第二節に瞥見せられてゐるものを除いては、悉く第五章中に纏め説かれてゐる。しかるに「經濟學原理」の方にいたると、主としては第二卷第十編第二章「資本形成理論」および同第三章「生産能性理論」の成果中に收められてゐるのだが、しかし同時に、第二卷の隨所に出沒してゐるのである。仍りて、如何やうに此の紹述の業を進めるのが最も有効であるべきかは、私の可なり惑ふたところである。が、本文の目的はただ、卓越せる地位を景氣理論中に有する彼れの思考の一端を、粗描するに過ぎぬものであるから、主として、より纏れる其の小著に據り、而して大著をもつて之を補ひゆくに止めようと思ふ。

四

さて、リイフマンは、交換經濟的組織の特質を解明せるのち、轉じて、箇人的收益努力のうへに立つ、斯かる複雑なる機制體は、その機能を果して何う竭くしてゐるかの問題に到達した。そして此の機制體は何らの摩擦なしに其の機能を果しをるものでなく、それは、箇々人の收める所得財産上の著しき較差の外にも尙ほ、景氣變動進みて恐慌てふ必然的なる禍害を生みだす、と言ふのである。然るに、この二成果は社會主義者の現存經濟秩序を論難するま、どの標的でもある事だから、社會思想上に保有する其の位置より見ても、リイフマンとしては必然、何事かを陳述せねばならぬ。すなはち、此れが原因を究明し、更らに此れが矯正策を展開せねばならぬ立場に居るのである。けだし、何故とならば、景氣變動は、一のネセサリイイヴルであり、避け難いものであるにしても、其の一部原因は十分緩和され統制され進みて克服され得べきもので、従うて其れを放置するは、取りも直さずソオシヤルイイヴルを看過することになるのだからである。

かかる原因討究の順序として、リ氏は先づ其の徵候一斑を記述する。いふまでもなく、往時における如き恐慌すなはち經濟的狀態が突然に變動して事業繁榮の時代より多少一般的なる不景氣の時代におちこんでくると云ふやうな様相は開戦直後ごとき特殊の場合を除いては、今や殆んど生起せざるに至つた。と同時に、最近の數十年間には、一般的に經濟生活における上下の波狀運動すなはち景氣變動 *das Auf und Ab im Wirtschaftsleben, die Konjunkturschwankungen* が、右に替つたのである。かかる變遷が一部分企業經營上の合理化による事は明らかであるが、然し一部分、經濟生活への認識の深化と豫測の發達に負ふ事は疑ひがない。

かくして歐洲大戰に先き立てる數十年間にありては、經濟的豫見と計慮的干渉とによりて、恐慌の影響を可なり緩和し得ることが明白にせられたので、この點に關しては殊に、好景氣にあたりては、過高なる價格騰貴の出現を、また不景氣に際しては、過低なる價格下落の突發を阻止し、能ふ限り常に平均せる價格を形成すべく配慮するところの、團結かたきカルテルの寄與の偉大なりしことは、最近、殊に戦前および戦後における獨逸經濟界の明證したところである。ついで進みてトラストの作用を擧げねばならず、又た銀行の側よりせられる、適當なる時期に際して信用授與を制限する如きの方法を擧示せねばなら

ぬ。また營利經濟者の側においても、好景氣が決して正當かつ永續的な状態にては在り得ず、却りて其は一種の熱病ごとくに晚かれ早かれ必ず、より深き且つより永き疲勞状態が繼起せねばならぬ事を、察知せねばならぬのである。

五

ついでリイフマンは、景氣變動の諸原因討究にすすみ入るのであるが、從來の學說への論争を戦ふためにも此の原因に關する明晰な理論的洞察を前提せねばならぬ、と言ふ。そしてまづ、從來唱へられた外生的原因説例へば凡そ十年ないし十二年毎に現はれる太陽黒點に關聯して農業的收穫が害はれ延いて一般的恐慌の原因となるといふ如きの思考を拒斥する。また純農業國か又は國土狹少なる國民經濟かの場合にありては、凶作が一般的不景氣を惹起することの必無にあらずとするも、近世的産業國の場合に對しては、斯かる外生的原因説は到底支持し得られざる旨を説くのである。

しかして普遍的にして終局的なる景氣變動原因を尋ねて、彼れは、其の何づれも現代交換流通經濟組織内に伏在するところの、二要素を抽出してくる。即ち其の一は、營利活

動における特殊化、Specialisation がますます精細廣汎に進みきたれる事、そして其の二は、右の營利活動を支配する唯一の交換流通の組織原理が單り箇人的、收益努力、Private Enterprise 存する事である、と言ふ。しかも右の第二の要因と密接に關聯しをるメントとして、更らに技術上の進歩、technische Fortschritte を擧げるのみでなく、此の技術上の發達、でふ點に彼れは、二重圈點を施して力説する。然り、技術的發達なくしては、箇人的收益努力の發揮されがたきは、勿論諸産業部門における特殊化も十分ならざるべきが故である。

然らばそこには、如何なる理論が辿られてゐるか。

まづ第一に特殊化が益ます進みきたるにつれて、特殊化せられた箇々の諸生産部門の間における生産關係性は、つひに又た時に、比例を失ふに到たる。この事情は、生産手段の諸産業において特に著しく現はれるものであるが、下に、其の過程の一斑を記さう。人口の増加に伴うて消費財への需要がおのづから増加し、此れに關係した諸企業が擴張されねばならなくなれば、従うてまた右に要せられる持續的生產財例へば諸種の機械に對する需要が増加してくる。ここにおいてか、機械を製作する工場が擴張せられ、また其は進

みて諸機械諸工場諸交通設備の建造用の原料品生産業に影響し來たる。然るに斯かる機械への需要は消費財生産業の側より見ては唯だ一回限りのものであつたが、此れらの諸産業部門より發せられたる機械製作注文は勢ひ一時に發出し來つたもので、従うて此れら一層多くの機械を供給するため機械製作工場は自然その規模設備を擴張したに相異なく、そして一旦、かく擴張せられたる工場設備は其れよりも一層長きにわたり又た一層多くの需要を充たし得るものであつた。かやうにして、經濟的發展は、必然的に跳躍して進行せねばならぬ宿命のもとに立つのである。

上來のリイフマン所説は、假りに最も一般的なる世相即ち人口増加を前提し、此れを出發點として敘説し來れるものであるが、その他諸般の外經濟的原因例へば世界の一角に生ぜる戰爭による消費財需要の激増より出立するとしても、之が論證は略ぼ同様である。が然し、斯くの如きは、カッセルとは言はずとも、さきにバラノウスキイの詳論せるところで、敢へてリ氏の創唱と看らるべきものでないと思ふ。

つぎに第二の箇人的収益努力が交換流通の唯一最高の組織原理である、と云ふ要素には更らに深い影響が伏在してゐる。そして其れは、技術上の進歩と密接に關聯してゐる、

と言ふのである。すなはち例へば技術的進歩による生産方法の低廉化は其れを最初に利用する企業者に對しては常に必ず収益性又は餘剰收得性を豊かならしめるもので、彼れは他企業者よりも安價に其の製品を提供するによりて自己の販路を擴張し確保し得る。然し、之とともに又従前投資せられ而して現在では最早や十分有利に使用せられなくなつてゐるところの資本もなほ殘存してをることであるから、其れは新生産方法の採用に連れて必然に且つ速かに償却されねばならぬものである。しかして國民經濟でふ一般的なる利害關係より眺めれば、かかる技術的進歩が舊投下資本の償却せられる速度よりもより、迅速には採用せられざらむ事が要求されるに相異なる。然るに技術上の進歩を最初に適用する企業者の、より大なる利潤を收得せむとする私的利害は、明かに斯かる國民經濟の一般的利害に對立して居るのである。すなはち苟くもより大なる収益の約束される處にてありさへすれば、いくらでも新しい企業が設立せられ新しい技術的進歩が導入せられ、生産設備が擴張せられる事となり、そして之が結果招來される事あるべき過剰生産にいたりては一向顧みられぬこととなる。さて今、技術上の進歩が、多くの産業において甚だ敏速に且つ引續いて行はれる場合を豫想して考へると、舊企業殊に舊生

産方法に頼つてゐる諸企業は必ずしも生産を中止するものでないから、従うて廣汎なる範圍に亘りて過超資本化および過剰生産が惹起せられ得ることとなる。従うて既に投下されてゐる舊資本は、一層低廉に同一作用の行はれるところの新しい生産資本よりの利潤によりて漸次に償却されねばならぬ。この故に、最近時に到りては、技術上の進歩發達より生起するであらう過超資本化および失業、失職を防止するため、生産者は屢しば協同して、低廉なるべき新生産方法が餘り敏速に導入され採用されないやうにすら配慮してきたことである。

ただし右にて謂はれてゐる生産者の意義は、必ずしも一見明晰である如くには明瞭ではなく、私は暫らく之を、企業者及び労働者を併指すものと解する。とまれ、リイフマンの右の論證において、リ氏が、簡人的収益努力の歸趨を指して其處に景氣變動の一要因ありと爲せるは、氏の論態全體よりして必然的に豫想し得られるところの考へであり、従うて自明の所と看るを妨げない。仍りて此所にて氏独自のユニツクなる考へは結局、技術上の進歩の重要視てふ一點に外ならず、是れ、私が曩きに氏の景氣理論を指して技術進歩説と呼んだる所以でもあるのである。

かやうにして氏の左の結論がおのづから指標されて來る。そして私の會つて力調しおいたるやうに、其が十數年來リ氏の渝らざる愛説なる旨は、豫じめ再び注意せらるべきところであらう。その説かれてゐるところは斯うである。——此の事情ないしは關係即ち利潤を目的とする私的利益と、技術上の進歩に基づく國民經濟上もつとも合目的なる資本構成上の範圍との分裂する事情のうち、景氣運動および恐慌の最終的な決定的な原因が明らかに横たはつてをる。——之を、多少細かに説いて、斯う言ふのである。

この原因は、一九九五ないし一九〇〇年の好景氣時代の後ちに襲來したる獨逸等の大恐慌においても最も重大なるものであつた。即ち當時にありても、製鐵製鋼業や電氣工業や化學工業その他の諸工業における著しき技術上の進歩が、一の過超資本化を惹き起したものである。之には更らに注意さるべき一事がある。すなはち、此の國民經濟の處分し得る資本が善く應ふるを得るよりも以上に、技術上の進歩を迅速に採擇應用し得ると云ふ事情は、有らゆる營利行動者が總べて完全に經濟的状態を洞見明察し得たる場合においてすら尙ほ等しく作用するものである、と言ふ事である。で、思ふに、大正九年以降の本邦を重く見舞へる不景氣、即ち金融、製造、交通、動力、紡績、製糸等の諸企業の大多數に

おいて目撃されたる過超資本化の状態に到りても、同一理論が妥當するものであり、従うて徹底的なる減配および減資の段階を経過するなくしては、眞の過超資本化されたる諸企業の完たき整理は、ついに空望に歸することであらう。

なほリイフマンは、恐慌の要因としての過少消費説および所得額較差説を共に排斥する。前者を斥ける理由は自明であるとして措き、後者すなはち箇人的所得上の著しき差異を恐慌原因とする説については、その主張せられてゐる一般的な意味においては正當でないと言ふ。即ち、技術的進歩のまさに旺んなる場合に際してこそ、資本構成が須要せられるものであるが、斯かる大資本は唯だ單とり平均以上の所得を収めてゐるものより發出するものだからだ、と論ずるのである。ただし、斯くの如きが唯だ一應の見解に過ぎぬ事は多言を須ひないであらう。更らにリイフマンは此の外、實際經濟生活においては、經濟的發達に關する錯誤、計算上の誤謬、また投機等もまた、恐慌の一因として極めて大なる役割を演ずる旨を言ふ。然し、斯かる如きは、原因そのものではなく、ただ此の運動に拍車を當てる副的一動力に過ぎぬ事は既に指摘せる通りであると、私は信ずる。

六

いまは三轉して景氣政策を討究するの順序である。が、自から「經濟學原理」第二卷の序文中 (Vorwort zum II. Band, xii.) にて言ふところのごとくに國民經濟學の原理たる領域を固く守らむとするリイフマンは、その卷末に國民的福祉厚生國民的資本形成國民經濟と國家經濟ごときの好題目を掲げつつも、尙ほ政策的論議は能ふ限り抑制してゐるので、従うて景氣政策は其の一般的意味においては論究されてゐない。

然し、カツセル、シュピート、ホッフ、アモン等と同じく、景氣變動を經濟生活における一ネセサリイイイヴルと看る以上、更らには殊に箇人的収益努力と國民經濟的合目的資本構成度との不調和の必然的結果と看る以上、彼れが現在の箇人的經濟秩序の根本に信ずる限りにおいて、此のリイフマンにも又、何らかの政策的發言が豫想されねばならぬ。然り、果して「經濟學原理」および「一般經濟學」における事實上の最終章に經濟組織の將來的發展傾向を考察せる機會において、寧ろ正當にも、この景氣政策の見解の一端が漏されてゐる。今、本文にかかはる限りの摘録を試みて見よう。

リイフマンの論態より豫想せられるがやうに、彼れは先づ、恐慌の現存經濟秩序崩壊説を拒否する。これが論證は、氏の他著述例へば、企業聯合および企業合同の第六章「企業形態論」の第四章、または「社會主義の歴史と批判」の各所等にありて詳しく、而して却りて此の「經濟學原理」中にては盡されてをらぬ。然し、消極的には、半ば又は全たく或る時代の獨逸および露西亞において實現された共同經濟秩序の失敗を跡づけ、積極的には、企業聯合と企業合同が進展して屢しば景氣變動を平衡化させ緩和するに寄與したる事實を指摘してをる。すなはち前者については、國家社會主義的秩序が縦し持續し得られたとするも、この場合、經濟と政治とは一層混同せられ、さらに政治的權力の支配が同時に經濟的實力の把持を意味する爲め政治的權力への鬭争は一層激成せられて正常なる經濟的進化が阻止せられるのみでなく、此の秩序のもとにては分配の基準を缺如する爲め正義の理想郷も其處には存在し得ない、と言ふ。さらには氏一流の自由主義觀より出立して、謂はゆる共同經濟または計畫經濟の施行の前提たる組織上の「官僚化」が將來に亘りても到底、個人的企業精神の役割を代行し得ざる所以を説いてゐる。

また佛英にて主張せられる組合社會主義サンデイカ又はギルドを中心とする組織、ま

たは勞働者生産組合(ミル)の名と聯想せられる勞働者を企業者たらしめる提案等の考へを排斥するには、現存文化階段を省察して逢遭する諸難點や、大なる現存秩序内に此の如き比較的少なる組織の點在散在する事の不能等を理由とする。(この點、殊に「社會主義の歴史と批判」の第二章末尾往見。なほ勞働者生産組合の考案の有する諸問題については上田貞次郎博士の同題名の論文に夙に盡されてゐる。「社會改造と企業」二。参照)ただし、リ氏にしても、斯かる組織の永遠に不能なるを豫斷するものではなく、一定の世相が展開されるに到れば、おのづから可能となる、と言ふ。この條件とは然らば何か。すなはち例へば、人口増加の趨勢が停止し又は逆轉して箇々人の欲望調達が今日ごときの切實なる問題たらざるにいたるか、或ひは豫想すべからざる發明發見によりて一切の勞働勤勞の與ふる苦痛感が平等化するにいたるか、する場合には現存秩序以外の組織は、其所に初めて可能のところがとならう、と言ふのである。が然し、斯かる奇蹟の實現せられるまでは、私的収益努力が、依然として最も合目的なる流通經濟の最高原理たるの外はない、とする。そして右の論理が、ポオレ、カツセル、アモン等の見解に大同してをることを注意すべきであらう。

七

ついで討究さるべき事は、將來における社會組織の發展が如何なる傾向をとるであらうか、の問題であらねばならぬ。この點、リ氏の見解を一言に掩へば、それは必然の世界でなくして自由の王國にあり、ザイン・ミュツセンの歸結でなくして理念的なヴェアデンの歸趨に在り、と爲すにあるであらう。それは即ち、左の如くに心讀される。

そもそも現存經濟秩序の原則は、決してホッブスの描いたやうな「總べてに對する總べての鬭争」を要求せず、否、却りて、種々なる團體の形態、すなはち會社や産業組合や又恐らく斯かる團體的企業の聯合や合同等のうちに、終局において其の何れに歸趨すべきや、は未知なりとするも、とまれ、まさしく其處よりして現存經濟秩序が擴充し開展し行くべき素質が、潜在してゐるのである。おそらく其の結局歸趨するところとしては、「私的収益努力の最早や存在する餘地なかるべき欲望満足の組織に到達することであらう。が、斯かるごときは、謂はゆる「自然は飛躍せず」て、ふ古るき箴言の指標するがやうに、おのづから生成し徐ろに發展するものであらねばならぬ。そして、右の終りの二引用句が、マーシャル

「原理」欄筆の言葉を聯想せしめるものであるのは、言ふまでもなからう。

右は併しながら、然らば一切を、収益努力による交換流通の自動的規制の主義原則に放任すべし、と言ふ事を意味するものでない。いな、リ氏においても、實は可なりに廣汎なる社會的統制を認めるもので、即ち、現存經濟秩序の内部においても、箇々の經濟主體又は經濟集團が過度に収益努力を濫用し且つ實現する場合にありては、制限を加へ得べく又た當然これを加へねばならぬものとする。かかる場合の第一は、景氣變動によりて、最大利潤を獲得する經濟生活における最も動搖的なる要素、即ち商業および投機である。そして第二は、一般的欲望配給に不可缺にして且つ著しく獨占的なる事業、例へば鐵道業や燈火動力配給業である。しかして前者には、洞察的統制及び累進的課税を施し得べく、更らに後者には、價格に對する認可權を留保し、また勞働協約の代りに官吏的契約を結ばしめると共に、從業者側の同盟罷業權を制限すべきである。

さらに一般的には、餘りに著しき大所得または大財産を制限するためにも課税の方法を施し得べく、之が主要手段は、鋭く累進的なる所得税および相続税、殊に相続税である。此れが傍らには、一面、老幼者及び所得不能者以外には、不勞所得の獲得を制限するととも

に他面、収益不能者には公共的扶助を豊かにし遍ねからしむべきものである。ただ此所に注意すべきは、相續税をもつて客觀的正義の未だ判定せられざる共產主義的理念を實現するの道具たらしめ、有らゆる私有財産を國家に沒收するの目的に供用するの不可なる事である。實に當分のところ、他の如何なる原理をもち來たすとも代替する能はざる經濟組織の根本原理、即ち私的収益努力が、斯かる課税のために減退するに到るであらうところの一點において、此の租稅政策は、其のおのづからなる必然的・限界に逢遭する筈である。大凡そ右やうに論じ來りて、リイフマンは、箇々人と人格との尊貴さを力調する。一切の文明文化は、單り箇々人の創造するの理義、また指導する人格の内在力なくしては社會的綜體の成長するなきの理義を強調するのであつた。かく、箇人的力と社會的心との進歩發達を併らべ翹望し來たるところ、われわれは、このリイフマンにおいても、かのミルの心を見出しえられるやうに思ふ。

八

以上、簡約ながら、主題の大綱を傳へ得たことと信ずる。この主題の根本を盡くすべくば、少くともリ氏名著第二卷第十編の全四章を考察するを要する事であるが、然し、上來だけをもつても尙は一面、リ氏景氣理論の輪廓を傳へるとともに、他面、ともすれば本邦論壇を横行する景氣理論における皮相的な金融疏通説や、銀行券創造説や、利率緩和説や、貸出助長説や、綜じては偏重商主義的と言はるべき諸見解の有する謬妄を、より、正しき光りを齎らして暴露せしめるに、多少の寄與を爲すものであると思ふ。例へばわれわれは、ここ兩三年來殊に景氣問題が議會における一つの重要な政治的イツシユウとすらなりて世論を賑はすのを見ることだが、中には積極政策とか消極政策とか云ふ空虚の概念的なる題目をもつて、此の問題を處理しようとするものもある。のみならず、恰も政府の政策一つにて、この雄大且つ微妙なる經濟生活の動向が左右されるものもあるかのやうに妄信し、謬つて空疎な謂はゆる積極論を讚仰する人々も必無ではない。かかる小兒的見解が憶面なく發表せられ、素材にも之を受け容れるものがあるのが見うけられるごとき、時代に、叙上の概説にも、尠なからざる啓蒙的意義あることが承認されねばならぬ。然るに最近、簡單なれども、一部世論の迷妄を痛快に指摘せる短文に接したので、今之を再録し、其を機縁として、リイフマンの所説をば我が現實世相に當てはめてみる實例たらしめ

よう。題は「景氣不景氣」と云ひ、去る昭和二年一月十五日、大毎紙上、財界是非の欄に掲げられたものである。曰く。

我國今日の不景氣は、決して現内閣のせみではない、と又しても藏相がくどくと辯明してゐる。一方に政本兩黨が、現内閣に肉薄せんとする三大攻め道具の一つに、この不景氣問題をかつぎあげてゐる以上、藏相としては「いや俺たちのせみではない、俺たちは寧ろ景氣を直しつゝあるんだ」と、大きく見得を切つて置く必要があるのだらう。

だが、世の中に、これ位をかした話はない。お前のやり方が悪いからだ、と政府に喰つて掛る政黨も政黨なら、それを眞に受けて事ごとしく辯解に努める政府も政府だ。一體、經濟界の景氣不景氣などといふ大きな潮流が、政府だの政黨だのの微々たる力で、勝手に動かし得るものだ、と思ふこと其れ自體が、自己幻滅の途方もない誤りでないか。

經濟界の動きを、若し人間の力で左右し得るものがありとするならば、それは、多數財界人の努力が或る方面において一致した場合に限られる。それ以外においては、失禮だが、政府が何うあせらうと、政黨が何うもがかうと、線香花火にも劣つた瞬間的空景氣か乃至は痙攣的引緊めをやり得るぐらゐるが落で、事實また、この大きな經濟界の潮流を人爲的に防ぎ止めたり、その速度を増加せしめたり爲し得た歴史はないのである。だから今更、不景氣は誰のせみだの何のと、身のほど知らぬ水掛論なんか、よしにして貰ひた

い。聞いてゐるだけでも鱗唾が走る。實際、繰返していふが、政府が經濟界に加へ得る力は、善惡ともに推移する自然の大勢に順應して何ほどか、その潮流の妨げになる小石を拾ひのける程度が、關の山なのだ。従つて政府の財政經濟政策に對する論争は、要するに邪魔になる小石をどれほど澤山拾ひ取つたか、又は反對に大勢に逆抗して、水の中に礫を投げ込むやうな馬鹿なまねをしなかつたか何うか、といふ範圍に限られねばならぬ。

現に見給へ、玉藏相が「現内閣の政策は現下の不景氣の原因でない、却つて不景氣程度増大の防止とその期間短縮の効果を齎らしつつあるものなり」と稱し、現内閣が景氣回復方策として實行せるもの並びに實行せんとしつゝあるものとして列舉せる各種施設ないし其の結果財界がこれだけ回復の兆候を示して來たと拾ひあげてゐる數々の條項だつて、何一つ、經濟界の根本に觸れたものもなければ、又た政府の力だけで、出來上つたものもないではないか。

(朗々子)

さて、右の文中「……ありとするならばそれは、多數財界人の努力が或る方面において一致した場合にのみ限られる」とは、抑も何を指すのであるか。又た、經濟界の根本に觸れたものとは何か。今、私は之を吟味したい。右の二句は綜じて之を言はうなら、現實の有らゆる經濟行爲者營利活動者が正しき明るき脚光を浴びて悉く各自の現在の立脚地を照明させ、此の深き長き不景氣の由來せる眞原因を探究して以つて此れを除去するの決意

努力を實現したる場合又は狀勢を指すものに外ならないであらう。然らば、それは一般的の意味において正しい。が、特殊的に本邦輓近の現狀に照らして其の除去さるべき根本原因は何くにあるかと問うてみる。すでにリイフマンの上來の景氣理論に聽ける上は、此れが解答は難くはなく、その難きは寧ろ之を探知し得たる上にての其の實行である事が判かるであらう。すなはち其は、その工業家製造家、鑛業家、海運業者、造船業者はた銀行業者たるを問はず、有らゆる企業家が、その各自の事業狀勢と資産狀態を吟味し、再吟味し、その内容の在るがままに、此れが外容を適應させ調正する事である。一旦その在るがままの正體で、更らに改善を策しつつ、出直す事である。かやうに考へてくると、斯う言へると思ふ。我が事業界は大正九年の恐慌、大正十二年の大震災の禍害を蒙り、更らに大正年間の最終時なる十五年末日、否な昭和年代に入るも、右による不景氣は下向き一方なのであつたが、然るに一轉して箇々の企業の資本狀態に眼を差向けるならば、其處に恐ろしき矛盾の存在するを發見するのである。すなはち其の外形のみは表面上、大正三年乃至同八年までの好景氣時代に膨脹された其のままの資本化狀態を、持續してゐるのである。そして吾われは、之が當然調正されねばならず、この矛盾が統一されねばならぬ、と言ふのである。再びリイフマンの解釋を平たく言ふと、斯うなる。——かの景氣運動の逆轉せる大正九年の初夏より秋にかけての景氣沈降時代を境ひとして、本邦事業界の少くとも一部は綜じて非常なる超過資本化、*Ueberkapitalisation* に喘ぐ事になつた。すなはち、若干の工業會社、商會社は、今や公稱しをれる資本だけの實質を固有せず、又は謂はゆる企業金融 *Das Finanzieren* に巻き込まれたる若干の銀行業者に到りては、従うて其の缺損少くも不良貸の部分だけは、過超資本化してゐることになつた。すでに斯く過超資本化してをれる限り、名實の間に現存する矛盾を統一して、合理的經營に進出すべき爲めには、何を措きても、實質に應ふるだけの低減資本化を敢行し、同時に減配、または配當停止を行ふを要諦となすは當然のところであらう。かく資本を縮少して、尙ほも存立の脅かされるものに到りては、更らに合理的に減資したる上に、新たに眞實の増資を行ふか、又は他の同業者と合併するの必要なる事は自明のところであるだらう。——で、若し、箇々の企業當事者にして之を堪へ難きの苦痛又は犠牲なりとなすならば、須らく去りて、近時實現し得たる獨逸經濟生活の安定化が、主として、世界未曾有の犠牲、即ち一兆分の一へと云ふごとの貨幣低價従うて、箇人的資産の切捨と云ふ大煉獄を通過したるの賜であるの事情を

想ひ合はさるれば宜しいであらう。更らに二三年前可なり財政整理を實行し得たる塊太利が、一方外資を借入れるとともに、他方政府一切の冗費冗員をはぶき、又た爾來兩年豫算額を増加せしめざらむとしたるの實例を省慮すれば宜しいであらう。ただし勿論、本邦事業界は未だ大戰後の獨塊ごとき状態に立到つてゐるものではないから、かかる資本化上の調整を敢行するにしても、それは極めて輕微な匡正政策を實行すれば足りることなのである。とまれ、リイフマンの見解をば、我が實狀に當てはめて考ふるならば、多數の財界人經濟人が一度び自己相應の力量に立ち戻り而して改めて出直すほかには、少くとも内在力より出發するところの眞の景氣回復の道は在り得ないのである。そして、其れ以外の他力的方策に懇へての謂はゆる景氣挽回策が若し講ぜられたならば、それは綜じて景氣理論に背くものなるが故に、必ずや他日の一層痛烈なる反動的禍根を遺すに相異ない。重ねて言ふ、方今わが不景氣の根本原因は、不可避な然し重大な過超資本化にありと。

九

さて右のごとく、リイフマン説を藉りて本邦近時の景氣動向を解釋してみると云ふや

うな仕事とても、あながち本題外に涉れるものではない。けれども、今や、より正道に戻りて本文自體を論結する準備をなさねばならず、即ち斯説の批判を試みねばならぬのである。

さきにも言へる如くリイフマンの理論は、綜じて言へば技術進歩説とも要約さるべき比較的簡單なる且つ偏一方的なる理論なのである。しかし、それは認識の一方性の強調されたる最もよき標本の一つなのである。すなはち、租税政策による不勞所得および過大所得の制限が、彼れの謂はゆる限界餘剩均等法則の社會政策的一應用であると爲さるべくば、一方には舊資本の償却に先きだちて無計慮に多費なる新生産施設新産業組織を導入するを制限し、他方には景氣變動による不勞成果に對して課税的制限を加ふると云ふ事は亦た、同じく限界餘剩均等法則の經濟政策的社會政策的一擴充なりと看做さるべきものである。——少くとも私は然う解する。

かかる一面的理解の論態なるものは、把握觀照の視角はた描寫の角度が二三に別たれをらず焦點が正しく合うてゐるために、その視へる對象中もつとも重要なものは、いと鮮明に寫象せられ、従うて讀者の理解に向うて強く迫り得る長所を有する事は明かだ

ある。ただ斯く評するうちには、元もと現實世界には、其の主對象の外または裏に、必ずや幾多の脇役を演ずるものないしは背景にありて主對象を操つる潛存力の存在するに拘らず、それは此れらを抹消したる上にての抽象なりてふ遺憾さを含蓄してゐるのである。すなはち、現實の景氣現象の原因は甚だ複雑なるもの故に、此れが思惟的反映たる景氣理論とても亦た勢ひ、一層複雑に又た一層陰影的なものであるべきに拘らず、リイフマンにありては、此れらを悉く抽象し遊離せしめたる一方的考察なるを免れずてふ遺憾さあるを暗示して居るのである。然し、此の種の缺點は、凡そ有力なる理論には免かれ難き一屬性でもあること、例へば其がカツセルの同理論の場合にも妥當する事によりて判知されるのであるから、従うて問題は結局、例へば此の點、リ氏とカ氏とのうち、何れが果して、より現實的なるか、より包括的なるかに歸してしまふ事であらう。

然し今は斯かる架空的な穿鑿に長く低徊してゐる餘裕はないのであるから、リイフマンの見解において尙ほ望蜀せらるべきところの、二三點を摘録し、此れが説明は讀者諸卿の構成に任じたいと思ふ。

その第一は、彼れが景氣變動の韻律的上下動を認めつつも、諸家の重視したる景氣運動の循環性はた周期性を論定せず、少くも力説しない點に横たはる。われわれは必ずしも十年毎の周期性如きを法則化するを期待するものにあらずとは云へ、何らかの論據を覓めて此れを定言化しうべき事を望まざるを得ない認識要求を有つてゐるからである。その第二は、景氣變動原因を鋭どく且つ單純に定式化して表現せむと企てたるの餘まり、之を過度の一面の見解にまで昇華させて了ふた點である。そして第三は、右の必然的歸結に外ならぬものであるが、彼れの景氣政策が、舊資本の償却や新資本充用または新持續的費用財設備の統制の一點張りに陥つて了ふた事に存する。然るに此の原因中には、カツセルの力説せる如き、おのづから運動する利率高低の保有する作用、すなはち自動的にして且つ同時に統制的なる金融作用が、看過さるべからざる重大なるモメントを爲せるがやうに、従うて此れが政策中にも亦、貨幣創減や金融統制や金利統制等が、無視さるべからざる重要地位を保持してゐるのである。

かやうに觀來れば、流通經濟原理を貫ぬく大法則、即ち限界餘剩均等法則を應用し擴張して築きあげたる、リイフマンの景氣理論と景氣政策の論攻は、その外見的な觀照態度における驚嘆すべき統一さにも拘らず、利率その他の考慮をもつて能く補足される事な

くしては、完美たり得ないやうである。さらに従うて、此れらの双方を無視せざりしかツセルの見解をもつて、より、體系的なりと爲さざるを得ないやうでもある。いな、カツセルにも増して、此の原因を多元的に討究し、従うて其の對策をも、物價安定政策失業防止政策等を重視しつつ多元的な寧ろ包括的に考察し來れる。ビグウの近著をもつて、理論的に言はずとも少くとも實際的には遙かに優れたる業績であると評定せざるを得ないやうである。ただし、體系的なる「經濟學原理」中の唯だ一つの「篇」むしろ「章」たるに過ぎぬところの「國民的福祉問題」の敘述と、新たに卷を改めて大版四〇〇頁をもつて精論し來れるビグウの「産業變動論」または「景氣變動論」の成果を比較するは、もともと無理なる要請たること論ない。然し、吾人は尙ほ待望する。——實に往年この「一篇」の單行文的發表によつて高名を成すところありしリイフマンよりして、他日必ずや、此の景氣問題に關する一層透徹雄大なる論證を聽くの機會が到來するであらう事を。

(昭和二年二月末日。 同三月修訂。)

附 錄

附録一 金融論の一節――

銀行業における分業主義と兼營主義

一、金融の概念

金融信用および金融業の意義——双面的信用取引を主とする銀行業——双面的信用取引の本質種類および相互關係

二、銀行における分業および種類

銀行における兼營主義と分業主義——我が國銀行の二大種別——特殊銀行の種類および業務——普通銀行および其の發達の働因——銀行營業狀態の公表および検査制度における進化

三、商業銀行の意義資本金および業務

商業銀行の意義——その資本金および積立金——謂はゆる減配か増資か又は整理のうへにての合併か——その業務の種類および資金運用法

四、わが商業銀行經營主義の將來

兼營主義か分業主義か

五、大預金銀行と大信託會社との併進

少數大預金銀行主義と少數大信託會社主義

たとひ若干の自家主張を羅織しありとするも、本文ごとき講義録的稿本を採りて、本書中に採録するの妥當にあらざるは予の萬々認むるところなり。けだし、こは昨年初め、金融論の講義臺本の一部に對して少許の朱筆を施せるものに過ぎざるなり。しかも斯く認めて、尙ほあへて之を爲す所以、一あり。……予は久しく密かに、十餘年前、國民經濟雜誌(大正四年)に寄稿したりし「英獨銀行業の經營比較研究」中にて開陳したる見解の或る部分、殊に將來本邦において兼營主義の普及すべき旨を力説したる部分を、修正するの機會を欲しむたるなりき。然るに近時たまたま、主としては田中金司氏稿「銀行制度における兼營主義と分業主義との接近」(同上誌、十四年五月號)に示唆せられ、従としては串本友三郎氏著「日本の銀行業——比較的一研究」(獨逸文の小冊子。スツットガルト、一九二五年)の後半に見えたる所説に暗示せられて、ここに圖らずも、此の小文の發表によりて希くば、右に謂へる宿志の片鱗を傳へ、同時に自家現在の立場を示さんと欲するに到りたるなり。發表の動機すでに斯くも輕微にして且つ偶發的なり。仍りて、此の鶏肋の一片にして、もし若干の讀者の一察をち得たりとせば、そは予において寧ろ望外の歡びとするところなり。をばりに、それを附記せざれば、筆者としての良心ために掩はれんとする一事あり。本文中に表はれたる「資金運用法」に關する記述が實は、佐野善作教授十數年前の提唱より、借り來れるものなる事、即ち是れなり。まことに、右の考へは今や、斯論共通の知識と化したるもののごとしと雖も、同教授當年初めて此れを慶應義塾における一講演中にて論述せらるるや、そは、正さしく斬新の着想たる

を失はざりき。あへて記して、舊記を新たにせんと欲するゆゑなり。(大正十四年六月。)

廣汎にして多様な意義に使用せらるる語少なからずと雖も、例へばギツフエン卿が會つて此の語を其の「金融論文集」(Giffen, Essay on Finance. London, second ed., 1880.)にてまたヂエヴォンスが同じく其の「通貨金融研究」(Jevons, Investigations in Currency and Finance. London, 1884.)にて用ひたる以降の「金融」てふ語並びにマクラウドが夙に此の語を其の「銀行の理論と實際」(Macleod, Theory and Practice of Banking. London, fourth ed., 1883.)中にて博引旁證したる「信用」てふ語は其の尤なるもの。中に就き、金融なる語において、殊に然り。すなはち此れにありては例へば、public finance, government or national finance, municipal finance, local finance, business finance, corporation finance と云ふが如く其れぞれ適當なる形容詞を冠せざる限り、その傳へんとする精確なる意味を表出するに由なければなり。しかも、ここにて用ひらるる此の語義にいたりては、何らの制限語を添へずして尙ほ直ちに其の明哲なるを見る。けだし謂はゆる貨幣市場長期融通を職とする資本市場 Kapitalmarkt より區別せらるるものとしての貨

幣市場 Geldmarkt を指す……ハーン説における取引一般を指示するところの此の場合こそ、たとひ語原的には最古のものにあらずとするも、尙ほ最も普通にして且つ最も普遍的なる用例なるに因るなり。

之を略敘せんか。先づ、金融、Financing, Finanzieren とは、資金、金錢資本または之をクラーク、カツセル流に謂はば資本、さらにシュウムベエタア流に一層抽象的に言ひ表はさば一般的購買力を融通し動化する作用をいひ、次いで信用、Credit, Kredit とは、姑らくボエム・バヴェルク流の解釋に従ひて、將來において同じく金錢的資金による反對給付を受くべきを「信認」して、現在において資金を給付する作用をいふなり。(ただ、右にて言へる一般的金融を、企業金融、das Finanzieren と混同すべからず。)但し、此の場合、財の將來的價值が其の現在の價值よりも低く評定せらるるは、實に個人心理よりするのみならず、國民經濟理論よりするも、自明にして且つ必要なるところに屬するが故に、實際上、右の將來資金の低評價分だけが、謂はゆる利息となりて、或ひは現在の給付額より除去せらるるか、或ひは他日の反對給付額に添付せらるるか、一の方法の施行せらるるは、言ふを俟たず。かくして、國民經濟的に見れば、資金の融通に任じて資本の利用または價值を増加せしむると共に、私

經濟的に眺むれば自己の計算にて信用を授與し以つて資金の現在將來價值間の較差を
收得するを業とするを凡そ金融業 *Financial Businesses* といひ、之に任ずる人々を金融業者ま
たは金融家 *Financiers* といふなり。ただし、此の場合、割引料または金利が、國民經濟的に見
て、信用授與を妥當に統制するの機能を竭くすこと、恰も一般財貨または勤勞の濫費濫用
を防止すべく其の價格が竭くす職分に同じきものあるを注意すべし。

かかる廣義の金融業には、おのづから諸般の形態を含むべし。實に古るき金貸業、質業、
無盡講新らしき信用組合、建築貸付組合の類より、英國にて殊に榮ゆる手形仲立業、割引會
社、手形引受業を経て、諸種の銀行業及び信託業並びに海外放資信託業にいたるの、諸般の
資本貸出關係業は、凡そ此の金融業に屬するなり。

しかも、金融業の中心たるものとして、本文の主に關說せんとするものは、中に就き、その
最後のもの、即ち諸種の銀行業および信託業、殊に商業銀行業に外ならず。されど、彼れ
らより此れを分別せんに、必ずしも常に、その規模の大小によりて之を爲すを得ず。け
だし、金貸業者にも倫敦等におけるロスチャイルド、漢堡におけるワーブルグ、また米國に
おけるモルガン、ケエン、ロエブ等のごときものあると共に、均しく銀行と稱するものにも、

謂はゆる一行員銀行 *One-man bank* ほどのものならずとも、微弱なる小銀行なほ尠からざ
ればなり。尤も、經濟の發展殊に産業一般の規模の發達につれ、銀行業には其の性質上、こ
とに同業者間に愈いよ合併合同などの集中運動 *Concentration-movement* の行はれ、必然的に
大經營化し來る傾向の著しきものなれば、事實上の問題としては、規模の大小によるとこ
ろの、彼此の分別も、全然失當にはあらざるべし。

されど、綜するに所詮は、その竭くすべき經濟上の職能のみが、銀行業の概念を定むべく、
從ひて彼此を明劃すべきなり。

銀行業を他の金融業より別ちてその概念を定むるところの經濟上の職能 *Economic*

function とは、それが單に自己の計算にて信用の授與の業 *Credit Businesses* をなすに止まらず、そ
の授くる信用または資金の主要部分が一般社會より受け入れられたるものに係かるこ
とを指すなり。換言すれば、その受働的業務 *Passive Businesses* においては債務者として信
用を受け、而してその能働的業務 *Active Businesses* においては債權者となりて他人に信用を
授くることをいふなり。されば、前者を受信的業務、後者を授信的業務ともいふ。ただし、

この二業務に跨り屬すと看做さるべき業務あり。例へば銀行間に行はるる爲替取引の如きはた獨逸帝國銀行また一般銀行の營む振替預金業務または當座預金業務の如き、是なり。いま後者について略說せんに銀行は預金業務の殘高グットハベにつきて債務者なれども其の顧客に屢しば許容するところの當座貸越に關しては債權者たるべければなり。即ち貸越は記帳上よりは別箇の業務として取扱はるる點あれども、實際よりは銀行が當座取引を開始するとき概ねは他日同勘定において當座貸を許容すべきことを前提するものと看るを妨げざるなり。とまれ、之を約づめて言へば、信用の授受てふ双面的信用業務 *Both-sided credit businesses, Zweiseitigkreditgeschäfte* を併べ營むこそ、銀行業の銀行業たる本質をなすものなり。而して、リイサア、コンラアド、リイフマン、オプスト、ライトナア、ブリオン、アルバアト・ハーン、アドルフ・ウエバアらの獨逸學者、概ね此の見解を採る。

尤も、世上おほむねの銀行は、かかる信用取引の外、營業として、例へば爲替の如き單純なる支拂取引の媒介を行ひ、更らに尙ほ、獨逸大銀行において正規の業務をなすところの證券の發行引受及び受託賣買を營むもの亦た尠からず。之を附隨業務 *Inliferent businesses* と云ふ。然れども其は銀行業の本質と看らるべきにあらずして、双面的信用業務を營むことこそ、銀行業の銀行業たる所以をなすなり。かく、この受働的能働的の兩信用業務の經營によりて銀行は、産業社會體における靜脈および動脈たるの職分にあたり、その血液たる資金を流轉し淨化して以つて國民經濟の發達を培ふものなり。

上述したる受働的能働的信用業務の經營とは、約して言へば、一面において、預金の受入、銀行券の發行、債券の發行賣出しによりて資金を吸収すると同時に、他面において、割引、短期貸付、長期貸付によりて其の資金を放散することに外ならず。この外、或ひは中央銀行が保有金準備高を超えて銀行券を發行し、或ひは一般銀行が手形割引を行ひて其の手取金を割引依頼者の當座預金に振り替へ、若干比率の預金準備額を力として此の小切手拂預金債務を負擔する如き業務に到りては、銀行自からの信用によりて或る程度まで、資金の創設を行ふものと看るべし。ただし、之を指して任意創造の可能の義に解するは勿論、謬想なり。この點は敢へてグスタフ・カツセルの稀少性の原理等に聽くまでもなく、凡そ進歩的社會における遞増的資金の需要は必ずや之に應ふる遞増的蓄積資金を限度としてのみ充たさるべく、しかして信用の授與または銀行通貨の創設にして若し之に超ゆる

ときは、銀行通貨過發に因る不當の物價騰貴を惹起せずしては已まざるべし。而して之を戒むるの晴雨計が金準備または預金準備支拂準備の比率の消長に存し、また之を妨止するの制働機が金利政策の緩急に横たはることは周知のところなり。

之を要するに、銀行業は、單に自己の資本金のみならず他人の金錢資本を受入れ、之を貸出しに供用して金融疏通に任ずるを、その經濟上の特色となす。しばらく、シユウムベエタアの語を藉れば、銀行業は、一般的購買力(金錢資本の義)の媒介、乃至は其の創設に従ひ、世の靜的資金 *static capital* を集めて之を動的資金 *dynamic capital* に化し、更らに生産資金化するを、その經濟上の特徴となすなり。さはれ、この間の消息については一世紀前すでに、先人の道破せるところに係かる。リカルドウすなはち曰く、「銀行の銀行たる固有特異の職分は、他人の貨幣を用ひて營業するときに始まる」云々。The distinctive function of the banker begins as soon as he uses the money of others.—Ricardo. 後ちバチオット之に補註して曰く「自己資金を用ふる間は、單に金貸業者ないしは資本家たるに過ぎざるなり」云々。As long as he uses his own money he is only a capitalist.—Bagehot, Lombard Street, ch.ii. しかして此の義の今に渝らざるは上來これを盡くせり。

ただ、一語を之に加ふべきは、銀行がその資金を調達するには必ずや銀行經營的 *banking, bankbetriebsmässig* の形式にて之を爲すを要す、といふことなり。すなはち、上述せる預金の受入銀行券の發行等によりて貸出資金を調達すべく、之に反して單純なる借入金等の形式にて資本を求めて之を高利にて貸出す如きは斷じて銀行業にあらず、といふことなり。事實上、銀行經營的の形式によりて集められたる資金の値ひ又は待望の價格、即ち預金利息は必然的に低廉なるべく、この低廉なる資金をやや高き利率にて貸出して、以つてその差額を主たる營業利得となすこそ、企業としての銀行業の目的たるなり。

さて、双面的信用業務間には凡そ、斯かる密接不離の關係あり。その詳細にいたりては、後來おのづから釋明せらるべき所なれども、例へば當座預金の受入、コールマネーの取入、銀行券の發行の如き要求拂債務を負ひて吸収したる資金は成るべく短期手形の割引に放散せらるべきに對し、債券の發行によりて蒐集したる資金は之を長期貸付に運用するを妨げずとなすが如きは是れなり。この相關作用を道破して遺憾なきものにアドルフ・ワグナーあり、仍りて、その語を掲げて節を結ばんとす。曰く「銀行は凡そ、その主たる受働的業務借方業務、又は負債の性質に應じて、その主たる能働的業務貸方業務、又は資産の性

質を鹽梅し適合せしむべし」と。他の機會においてワグナーは又た之を短語して曰ふ、
„Eine Bank darf keinen wesentlich anderen Kredit geben, als sie selbst genommen hat.“と。人呼んで之を「銀行業務經營の原則」Fundamentalsatz des Bankwesensといふ當れりといふべし。
實に此の提唱以來、そがウエバア、リイサア、オプストラの悉く祖述するところとなれる、また所以なきにあらず。姑らく此れを謂はゆる銀行經營の二主義と相ひ關はらしめて言はば、それは實は、收利性主義 Rentabilitätsprinzip を目標たらしめつつも尙ほ同時に、資産流動性主義 Liquiditätsprinzip てふ他の標的を閑却すべからず、との謂ひに外ならざるなり。而して右後者が即時現金化し得らるる資産の高率なるべき事を力調するものなるは論なし。

二

すでにかく、双面的信用業務の間には密接不離の關係あり、また堅實なる銀行業務の經營は凡そ上述せる原則に據らしむるを要する限り、謂はゆる銀行の分業は、おのづから成立し來らざるを得ず。再び例へば、資金の主要部分が銀行券の發行より成るの銀行券發行銀行の貸方業務の中心は、短期手形の割引および再割引に存すべく、又そが要求拂ない

し通知拂預金より成立するの謂はゆる預金銀行の能働的業務は、主もに手形割引または短期貸付たるべく、更らに、そが長期に亘り償還せらるべき債券の賣出によりて構成せらるるところの動産銀行および不動産抵當銀行における能働的業務にいたりては、長期貸付たるべしと爲すが如き、謂はゆる銀行の分業 Arbeitsverteilung der Banken, division of labour in banking は、必然成立し來らざるを得ざるなり。

その受働的能働的信用業務の相關關係より必然的に轉來する斯かる銀行の分業は、事實上概ね、文明諸國を通じて存在するところなり。然るに之とは別箇に、各國に特異なる經濟的傳統ないし事情および金融慣習によりて成立したる、銀行經營上の二分派あるを注意すべし。是れ英國流の銀行主義又は預金銀行主義 English banking system, Deposit b. s. と、獨逸流の銀行主義又は兼營銀行主義 German banking system, Mixed b. s., Gemischtes Bankwesen との對立に外ならず。前者は、純粹銀行主義 Pure b. s., Reines Bankwesen と別稱せらるるほどに然かく窮屈に其の能働的業務を、手形割引および短期貸付または當座貸越すなはち商業的信用の授與に限定して、嚴に銀行の分業主義を墨守す。之に反して、後者は其の名稱の示すが如く、商業的信用の授與に兼ねて更らに、有價證券賣買業務、證券

發行引受下引受業務等を含み、實際上、商業銀行たると同時に、株式取引所仲買人たるものなり。しかして、我が國銀行經營上の傾向は久しく、英國流の經營を採りて範となすものにして、この點、串本氏が證券發行業務は日本においては決して銀行經營的業務に屬せずと論斷したるは寧ろ當を得たるものと言ふべし。(Siehe Krishimoto, 'Japan's es Bankwesen', 1925, S. 43, u. 44.)

獨逸の大預金銀行ないしは大商業銀行は、かく分業の主義を超越するに拘らず、その經營の旨に安全なるのみならず、謂はゆる「銀行經營の原則」Grundsatz, Fundamentalsatzより判するも尙ほ正當とせらるる所以は、別に在りて存するなり。是れ、彼れらが一方、盛んに預金 Depositen (主たる外來資金 Fremdgelder) を收受すると共に、他方、その能働的業務の發展につれて、絶えず其の自己資金 Eigengelder を増加せしめゆくに因るなり。故に、獨逸大銀行ごときの經營に出づべくんば、その國情經濟事情及び金融習慣における相異の外か尙ほ其の前提として、必ず、自己資金 Eigenkapital, eigene Gelder の巨大なるを要するものと知るべきなり。リイフマン明かに之を言ふ、「企業金融は勿論、預金通貨すなはち外來資金をもつて行ふべからずして、ただ銀行自からの資金すなはち自己資本をもつて營まざるべからず」

と。(Tiefmann, Allgemeine, Leipzig 1924, S. 49.)

その主として營む業務の性質よりみて銀行には斯くおのづから、銀行券發行銀行または發券銀行 bank of issue, Notenbank、預金銀行 bank of deposit, Depositenbank、動産不動産抵當銀行 Hypothekenbank, credit mobilier, et credit foncier、といふ、銀行の分業を生ずるものなるが、この他なほ廣く行はるる見方に、各銀行が其の金融形成の主對象となすところの産業別によるものあり。謂はゆる商業銀行(外國爲替銀行を含む)、工業銀行、農業銀行、植民地銀行の別は、即ち是れなり。

銀行の分類觀は必ずしも、以上に盡きたるものにあらず。中に就き、一、その主なる受働的業務より觀て、發券銀行、預金銀行、債券銀行 Pfandbriefbank 等の別を立つるもの、二、その主たる能働的業務の性質より察して、割引銀行 Diskontbank、投資銀行 Anlagebank、不動産抵當銀行の種別をなすものは、理論的には、より、統一的なる分類といふを得べし。

凡そ上述したる、理論的分業觀を経て、次いで吾人は事實上の我が國銀行の種類を窺はんとするなり。即ち、我が銀行法規によれば、そは、普通銀行と特殊銀行とに大別せらる。

しかして、これは銀行の設立要件、業務の種類範囲（これは普通銀行法および各異の特殊銀行法に據りて規律せらるる）および當局の行ふ監督検査等、主もに大藏省銀行局の監督検査を指せども、最近時日本銀行も其の二百數十行を算する取引銀行に對する銀行検査を大いに勵行せんとするもの（如し）における性質の相異によりて施されたる區別に外ならず。

まづ、特殊銀行は、普通銀行と云ふに對して使用せらるる稱呼にして、各々特別な法律によりて設立せられ、原則としては各々特別な業務を營む銀行をいふ。日本銀行、横濱正金銀行、朝鮮銀行、臺灣銀行、北海道拓殖銀行、日本興業銀行、日本勸業銀行、朝鮮殖産銀行、農工銀行の九種銀行之に屬す。なほ、普通銀行よりも寧ろ、特殊銀行と看らるべきものに貯蓄銀行あり。特殊銀行は勿論、今後銀行は凡そ株式會社組織に據るを要件とせらる。

尤も今、特殊なる業務を營むといひしも、それは實は、各特殊銀行が各特殊業務に對して特に主力を注ぐの謂ひに外ならずして、銀行券および債券の發行以外の業務、例へば預金貸出の如き業務にいたりては、事實上、各行概ね等しく之を營むを見る。しかのみならず、各特殊銀行の業務種類にして、普通銀行の營業科目とも共通なるもの、必ずしも尠なからず。

仍りて左に、各特殊銀行の主力をそそぐところの、特徴ある業務の一斑を示さんと欲す。

- 一、日本銀行 日本銀行は我が中央銀行にして、一面、銀行券の發行權を獨占し、また、殆んど凡ゆる銀行より、同行の帳簿上にて行はるる手形交換および振替に必要な預金を、直接間接に受入ると共に、他面、凡ゆる銀行の爲めに手形の再割引を營み、以つて謂ゆる銀行の銀行として、一般金融市場統制の任に當る。（但し、その借方貸方業務狭隘なるため、英米中央銀行の如く力量を缺く。）この外なほ、國庫金の出納を管掌し、近く其の出納には小切手の制を利用するにいたり、種々の意味において政府と密接なる關係に立つなり。
- 二、横濱正金銀行 横濱正金銀行は、我が國、外國爲替銀行の太宗にして、その大なる資本金積立金及び預金の外、極めて低利なる日本銀行當座貸を利用するによりて、盛んに外國爲替業を營み、事實上、日本銀行と協調し協働して、我が貨幣の爲替價値の維持に任ずるなり。尙ほ同行は、支那の一部において銀にて兌換すべき銀行券を發行する權能を有す。
- 三、臺灣銀行 臺灣銀行は、臺灣における中央銀行ともいふべく、一般銀行業務の外、臺灣において流通し、金貨または日本銀行券と兌換せらるべき銀行券を發行する特權を有す。尙ほ、その外國爲替業務には、近時、視るべきものあれども、その企業金融は適正にあらず。
- 四、朝鮮銀行 朝鮮銀行は、朝鮮における中央銀行として、單り朝鮮のみならず、關東州および南滿洲鐵道附屬地内において通用するの銀行券を有し、更らに手廣く一般銀行業務および外國爲替業務を營む。

- 五、北海道拓殖銀行 北海道拓殖銀行は、預金を受入る外、拂込資本金額の十倍までの債券を發行し得べく、之を力として、一般銀行業務の外、北海道及び樺太の拓殖事業を幫成するため、低利長期の貸付を行ふ。故に、其が市街地不動産貸に偏するは寧ろ職分外なり。
- 六、日本興業銀行 日本興業銀行は、預金の外、拂込資本金額の十倍を限る債券の發行によりて、各種の工業的株券、債券その他の動産を擔保とする、やや長期の貸付を行ひ、又た擔保付社債信託を營む。尙ほ同行業務は將來益々、諸信託會社と共耕するところとならむ。
- 七、日本勸業銀行 日本勸業銀行は、前者と同様に、預金を受入る外、拂込資本金額の十倍を限りて債券を發行し得べく、之によりて、一般銀行業以外に、主として不動産を擔保とする長期貸付を營む。ここに注意すべきは、同行と後述の農工銀行との關係に於ける、輓近の發展に關するの一事なり。すなはち、同行は元もと、ほぼ各府縣別に存在する各農工銀行の中央機關たる觀ありしが、近く、勸業銀行が地方の農工銀行を合併し得る事となる結果、前者の支店數および資本金額の勢ひ急速に増加したること、是れなり。
- 八、農工銀行 農工銀行は、單一の銀行にあらずして、元と、各府縣に略ぼ一行づつ設立せられ、日本勸業銀行と連絡して、低利の不動産擔保貸付を營むを目的とするの地方的金融機關なり。此れもまた、拂込資本金額の十倍を限りて、債券の發行をなす事を得。しかし、その近年の發展——勸業への合併——傾向については、前に「日本勸業銀行」の條りに説ける如くにして、一國不動産擔保貸付銀行系統の統一および能率化より觀て、寧ろ歡ぶべき現象たるを失はず。將來には、全農工銀行が一層組織的に勸業に合體する日あらむ。
- 九、貯蓄銀行 貯蓄銀行は、むしろ零碎の貯金を受入れ、之を確實なる投資に運用するを主目的とし、現今、大正十年の貯蓄銀行法によりて其の營業の範圍定められ、特殊の監督を受くるものなり。即ち、小切手によりて支拂をなす預金(當座預金)を受け得ざると共に、普通銀行には許されざる小額の預金を、法定せられたる特殊方法にて受入るを得べく、主も之を國債、地方債及び認可せられたる種類の株式、社債の應募、引受、買入等に用ひ、また、確實なる擔保貸付に運用するなり。貯蓄銀行は、受入れたる預金額の三分の一以上の金額に相當する國債を供託するを要し、更らにその各重役は預金債務につき連帶して其の責に任ず。そもそも商法規定の一例外たる斯かる規定の存する所以は、元とそが、金融界の狀勢には精通せざる中産以下の多數民衆を主もなる顧客となし、謂はゆる庶民銀行たる性質を有する爲めに外ならざるなり。尙ほ郵便貯金事業との其の交渉を考ふべし。
- 右の諸特殊銀行の外、この種類に屬するものと看做さるるものに尙ほ朝鮮殖産銀行あり。さらにまた、輓近の設立にかかる、産業組合中央金庫なるものあり。されど、産業組合中央金庫に到りては、營利を目的とせざる公益法人なるのみならず、ただ産業組合のみを顧客とする會員式の中樞的金融機關たるものにして、銀行と看做すを得ざるなり。

普通銀行は凡そ特殊銀行法よりも、やや自由にして一般的なる明治二十三年の銀行條例および大正五年の銀行條例實施細則に準據して設立せられ大藏大臣(大藏省銀行局)の監督検査に服して、一般的銀行業務を営む。その行數極めて多く、近く、合併合同盛んに行はるれども、今なほ本店數約一千六百行を數ふ。(但し、中、千餘行は資本金百萬圓以下)

その企業組織は諸特殊銀行の如くに、從來は、株式會社たるを要件とせらるるなく、箇人組織または各種類の會社組織中における一形態を採ることを得たり。然れども既述せる如く、重要産業諸部門における大規模化大經營化と歩調を合せて、銀行業にも集中運動の盛んなるよりから、その大多數は(新銀行法を俟たずして)既に株式會社の組織に據り、さらに大銀行は悉く株式會社組織に據るといふも謬らざるなり。顧みれば、ウイザアスが其の著貨幣の意義において、英國銀行業における發展改善が實に株式會社組織銀行の發展と同時に發生的なるを力説せるや、ロバートリイフマン亦その「企業形態論」中、獨逸における銀行業が悉く資本的會社の雄、すなはち株式會社の形態に據れるをいひ、その原因を求めて、資本の非人格性又は株式賣買業によりて導かれたる資本の動態化證券化を擧ぐるの詳密なるを見るなり。(Withers, The Meaning of Money, ch. vii; Liehmann, Die Unternehmensformen,

Kap. II, 2. 増地・横原二氏共譯「企業形態論」同上。) しかり然らば、その之を論證せる意圖こそ異なれ、アダム・スミスが十八世紀中、夙に株式會社組織が特に銀行業には適當する旨を道破したる、慧眼に服せざるを得ざるなり。かくて綜覽すれば、その濫觴の一五五三年に在りとせらるる株式會社組織は、勿論英國のみならず國際的に觀するも、最も普遍的なる銀行企業形態となれるものと云ふべし。(Ashley, The Economic Organisation of England, Lecture iv, p. 84.)

そもそも銀行は、極めて廣汎なる社會的經濟的事に商工業的の利害關係を保有するものなれば、各銀行は隨時、その營業狀態および資産狀態について、銀行検査官の検査を受けるのみならず、株式會社の組織に據らざるものにも、毎年二期、大藏大臣へ宛てて貸借對照表および營業報告書を提出し、且つ新聞紙上等に貸借對照表を公告せざるべからず。右に謂へる銀行検査については、近時慶ぶべき一施設に接せむとするものあり。すなはち、一は近く小銀行の破綻の頻りなるに鑑がみ、他は米國における通貨監督官(銀行局長)の謂ひなれども、其の權限は本邦の其れよりも遙かに廣し) および各聯邦準備銀行の行ふ銀行

検査の好成績に顧み、ここに本邦當局は検査部を特置して、検査官を増員し、また日本銀行は検査員を新設し、あひ俟ちて全國銀行の一々について少くも隔年一回の検査を施すに決せりとの報是れなり。尙ほ銀行は、定められたる休日以外、毎日一定時間營業を行ふを要するのみならず、臨時休業を爲すにあたりては少くとも前日その旨を公告せざるべからず。をはりに附記すべきは、上に言へる年二回の報告公表とは法定の最少限度の意味と解すべく、若し能ふべくんば毎月、大銀行自から貸借對照表すくなくも其の摘要を發表することと爲し、以つてウインドウドレツシングの弊を一掃するを望ましとなすべし。

三

上述せる普通銀行は、凡そ商業銀行と通稱せらるるものと略ぼ其の範圍を同じうす。そもそも商業銀行とは、その何づれも、短期なる受働的業務および能働的業務を營むものをいふ。すなはち主もに一方、通知預金要求拂預金の受入れ又は銀行券の發行によりて資金を蒐集し、以つて他方、商業取引一般(工業家の行ふ商業取引を含むは勿論なり)より發生する短期債權に對して此の資金を融通するものをいふなり。

しかして、さきの銀行種類の記述と相ひ關はらしめて、商業銀行の範圍を略示すれば、左の如くなるべし。卽はち、まづその受働的業務より觀て、發券銀行、預金銀行たるもの、次いでその能働的業務より眺めて、割引銀行爲替銀行たるもの、終りに其れにより統制せらるる法規の異同より察して、特殊銀行に對して普通銀行と呼ぶるものは、總べて商業銀行と總稱し得。(右に特殊銀行といへるも、日銀及び正金が商業銀行なるは論なし。)

之に對して、非商業銀行に屬するものは、放資銀行、債券發行銀行、投機銀行および長期貸付を營む不動産抵當銀行などなり。信託會社及び外投資信託會社また然り。

そもそも商業銀行に屬する本邦の一千數百の諸銀行は、中央銀行にして同時に大商業銀行たる日本銀行を中樞として、謂はゆる一般的金融市場を形成するものと看るべし。而して、その間の連鎖を表徴するものは、諸商業銀行が日本銀行に預託する當座預金、並びに前者と後者との課する割引歩合間卽はち銀行利率市場利率間 the Bank rate and market rate, Banksatz und Privatsatzkont に存在する一脈の關係に外ならず。

さて、商業銀行なるものは、かくて、凡らゆる種類の銀行中、その行數および資本力について絶對的多數また壓倒的優捷を示すのみならず、更らにその業務にいたりては、さきに屢

しば、一般的銀行業務といへるほどに然かく、最も普遍的典型的なるものをなし、従ひて之が運営の奈何んは、廣く經濟生活の全般に影響せずしては已まざるものなり。

この故に、ここに施さるべき銀行業務に關する記述は、大凡そ之を、商業銀行の業務の説明に限定し、終りに、少許の敘述を、現下の時論を成すの觀あるところの信託業務の一斑に割くを、以つて足れりとすべし。

抑も銀行資金または貸出資金の大部分は、概ね、預金受入れ等の日常業務を通じて形成せらるるところなり。されば、その資本金額の大いさは、商工企業などの資本金額の大いさは、勢ひ其の意味を異にす。前者の額が必ずしも其の營業規模の指針たらざるに對し、後者の其れは大抵その營業規模の大いさを示すべければなり。

しかれども尙ほ深く考ふれば、斯かる差異は、一見然かあるべき如くには著しきものにあらず。けだし一面その營業規模の愈いよ大なるにつれ、事實上、銀行も次ぎ次ぎに増資しゆくを例となすと共に、他面信用大なる商工業會社にいたれば、直接に増資するに替へ、あるひは社債あるひは借入金の方法に懇へて、その營業を擴張するもの尠なからざれば

なり。さはれ、畢竟するに、設立久しく其の成績の擧れる銀行の貸出力にいたりては、主もに預金等の外來資金より成立し、拂込資本金の如きは銀行資金全體中の僅少部分をなすに過ぎざるを發見すべし。されば、少くとも、銀行經營の方法につき、英國流の預金銀行主義を採れる限り、銀行の規模大なるを世に示して信用を高むるため、公稱資本金を巨大ならしむると共に、拂込資本金は之を必要なる程度に止どめ、寧ろ大なる未拂込の資本金を剩まして他日の發展に備へ、更らに諸債務に對する保障たらしむるを、より賢明なりとなすべし。つとに英國流の銀行經營を稱揚して措かざりし故、アドルフ・ワグナーは、この點について曰ふ、「銀行資本金は先づ保障手段たるべく、次いで然かる後ちに始めて經營資金たるべし」と。„Das Bankkapital zuerst das Garantiemittel, und dann der Betriebsfonds sei.“ Wagner. しかのみならず、資本金に對する利益配當率は、例へば一割二分を通例となす場合、預金利率は精々高きものにて、大凡そ其の半ばにて足るべきが故に、銀行預金の構成にして、預金より成ることより大なれば大なるほど、資本金への利益歸屬額は益ます増大すべき筈なり。この點、商工業會社における、資本金と社債との關係もまた、同一なりとす。次ぎに、積立金とは、決算期毎に利益の一部を割きて積立てられるものをいひ、我が法律

は從來、普通銀行に對しては純益の二十分の一以上、また特殊銀行に對しては概ね同十分の一以上の積立金をなすべきを命ぜり。この法定積立金は、營業上の損失又は配當金の不足を補ふを目的となすものなるが、此の法定積立金の外なほ、所有財産の評價低落に備へ又た毎期配當率を平均せしむるため、別に積立をなすは勿論、自由否な望しき事なり。

積立金は、將來における營業上の基礎を堅固ならしむるため、營業利益の處分にあたりて、割除しおくものなれども、その目的とする必要の生ずるまで全く別途に貯藏しおくを要せらるるものにあらず、却りて銀行は任意之を銀行資金として運用するなり。故に、元と、利息支拂の必要なきところの此の積立金の増せば増すほど、その銀行の利益おのづから増大し、従ひて配當を高め得べきは言ふを俟たず。世上しばしば、同一程度の信用を有する各異銀行の株式市價の著しく異なるを見る如きは、此の積立金の大小の差異によりて説明し得らるることあり。この點、生命保險會社の株價のごときは、殊に然かるを見る。

銀行資本金の性質は凡そ上述せるが如し。されど、資本金額の大ならざる群少銀行の濫設の流す弊害にいたりては、眞に言語に絶するものあり。循環しきたる景氣不景氣の變動、産業諸部門における急變、進みて恐慌の發生に直面して、信用上の微動だに容るさず、

泰然として金融疏通の大業に任ずる如きは、自から巨大なる資本を擁有して始めて克くし得るところなり。況んや、輓近、諸産業部門の規模日を逐うて發達するおりから、諸企業の需むる、より大なる信用に應すべき銀行の規模は、必然的に大ならざるべからざるの理由あり。ここをもつて、近時當局者は、一方既存銀行の合併集中を策すると共に、他方新設銀行の資本金の最少限度を定だめ、相ひ俟つて、銀行業を整理し金融業における健全なる發達を遂げしめんとするなり。（この點、本篇末、追記二をも往見。）

即ち、目下、我が國普通銀行の資本金最少限度額は、主務省の内規により、人口十萬以上の都會においては、貳百萬圓、同以下の所にありては、百萬圓とせられざるもの如し。但し、右は單に内規たるのみ。仍りて此の限度は、例へば日本銀行制限外發行税の如く、それを限度として時に應ひて増額するを妨げざるのみならず、今や盛んに既存中少銀行の合併集中を立策し勸説しつつある折柄、我が當局者は論理上よりすらも、右の制限度をも鋭く増加するところあるべきなり。尤も、銀行設立の認可權は主務省の管掌するところなれば、設立に當りては、其の發起人の信用等に顧みるほか、斯かる時々資本的要求を參酌して之が決定をなしをれるは、言ふを俟たざるべし。この點に關しては予は更らに思ふ。近時喧傳せらるるところの銀行減配問題の實行策にいたりては、眞正面より單に配當減率を勸説するにとどめず、或ひは大銀行の資本金増加を行はしめたる上にて、其の副産物として減配を導きだす

か、或ひは群少銀行の整理と減資を行はしめたる上にて合併増資を遂行せしむるか、の一方法を選ぶをより、有効とすべしと。實に一般的物價の斯くも激變を蒙れる大戦の前期より後期にかけて、ひとり我が銀行資本の増額のみが、今日の微弱なる程度にとどまりをれるは、斷じて適正の道にあらざるなり。しばらく股鑑を獨逸における其れに尋ねれば、一九一二年における謂はゆる四D大銀行はおのおの約二億馬の資本金なりしが、一九二一年には既におのおの其の倍額を公稱するにいたれるなり。否な、此の二倍加の増資をもつてしても尙ほ、大戦後における大銀行が、——少くともドーズ案の實施せられたるまで——曾つて其の産業界の指導者たりし舊との重要な職分を、遂行するを難からしめられたるは、争ふべからず。(Fiehnann, Allgemeine, I. A. S. 43.) 而して、それは偶然にはあらず。けだし、同國事業界の雄た R.A.E. = G.O. とき、戦前における資本金一億二千萬馬より、一九二一年における同八億五千萬馬へと膨脹し宛がら其の前時代における米國の D. & S. O. 乃至はスタンダードを想はしむる底の發展を目睹したればなり。(Fiehnann, Unternehmensformen, 2. A. Kap. II, 2.)

業務經營の裡ちに、商業銀行が凡そ自働的に負擔し取得するところの債務及び債權は、共に、短期又は要求拂の償還回收の可能なるものたるを通則とす。しかして斯かる要望に應ふる受働的業務および能働的業務の主要なるものは、一方にては通知當座定期預金、

他方にては手形割引短期貸付に外ならず。斯かる限りにおいて、之が經營は流動性原則に叶ふものとす。尙ほ内外爲替業務も亦た重要な一業務たるを失はざるなり。

純粹の預金銀行たり商業銀行たりとも、かかる信用業務のほか尙ほ信用の保障または支拂ひの媒介を行ひ、其の他、銀行の營むを便宜とし利益とする勤勞を提供するを例とす。信用業務に對して、學者之を、附隨業務などと稱するは既述せるところなり。

さて、商業銀行の主要業務が斯く、一方、短期または要求拂預金を受入れて、他方、短期貸付または手形割引を營むに存すること、今や吾人の知れるところなるが、この信用受授を行ふところの經營上の方法について、注目すべき一事あり。是れ、學者の謂はゆる資金の直接運用法および間接運用法なるものに外ならず。そもそも經濟文明すすみ、信用發達し殊に小切手の行使盛んなるにつれて、資金運用は勢ひ、前の方法より後の方法へと發展するにいたる。かくして、資金の效用はために著しく増進せらるるなり。

この運用方法を明かにするため、銀行資金または貸出資金の性質より、叙説することとすべし。そもそも銀行資金は、既存資金および創設資金の二種より成る。まづ、既存資金とは、事實上すでに社會に現存する資金の謂ひにして、銀行の資本金および積立金のうち現金のまま手許に残れるものと、預金として取引先より直接に受入れたるものとの二者より成る。

しかして、銀行業務の性質上、外來資金が自己資金よりも一層重要なことは、言ふまでもなし。ついで、創設資金とは、貸出と當座預金との形ちを通じ、その信用力によりて、銀行が創成するところのものをいふ。

今、當面に關說せんとする間接運用法とは、右に謂へる後者の機能を指すものなれども、念のため、運用法二種を併べ説かんに、まづ既存資金の運用法には、直接運用法と間接運用法との別あり。直接運用法とは、既存資金そのものを直接に貸出すものをいひ、此の場合には例へば十の資金は十だけの效用を現はすに過ぎず。之に反して、間接運用法とは、既存資金をそのままにて貸出す代りに、之を基本として其れに數倍する貸出を營みつつ、その貸出手取金を借受人の當座預金に振り替へ、いつにても要求次第に拂渡すべきを約するを指すものにして、此の場合、十の資金は三十にも又た五十にも運用し得らるべし。ただし、前節において注意しおける如く、此の資本金の創設にも一定の限界あるを忘るべからず。

しかして、信用増加し、當座預金取引發達すれば、間接運用法はおのづから益ます盛んに行はれ、世の資金はそれだけ、一層大なる效用を發揮すべきなり。實に、この間接運用法の最も盛んなるは、方今、英米兩國、殊に英國の金融界を最となすなり。まことにウイザアスが英國支拂界の特徴として論じたる、近代英國の商業および金融に用ひらるる貨幣は小切手なり、而して英國金融市場にて取引せらるる信用とは此の小切手を振出すべき權利を指すなり」とは、間接運用法の妙諦を指稱せるものに外ならず。(Withers, op. cit. ch. v.)

更らにまた近時、フランクフルトの銀行家ハーンが恐らくはペンディクセンの思考を承けたりと覺ぼしく、資本市場における對象を銀行券通貨 Reichsbankgeld, Notalgeld となせるに對して、貨幣市場または金融市場における取扱對象を振替通貨 Ueberweisungsgeld としたるも亦、同じく此の間接運用法の妙用を指せるものと看るべし。(Hahn, Zur Theorie des Geldmarktes, Archiv, 51. Band, S. 289 f.)

四

みじかく且つあらく言ひて、この英國流の純粹商業銀行の經營に對する對立を示すものは、實に大戰前における獨逸の大兼營銀行または大信用銀行の其れに外ならず。しばらく獨逸のアドルフ・ウェバアの語を藉れば、實に「わが全産業わが全外國貿易の示せる輝かしき發展にいたりては、その大預金銀行または善き意味における其の投機銀行の側における活動的にして且つ犠牲的なる幫成關與なかりせば、全たく考へ及ばざりしところならん」(Die glänzende Entwicklung unserer Industrie und unseres Aussenhandels waere ohne das tatkräftige und opferwillige Eingreifen der grossen Depositen- und Spekulationsbanken gar nicht denkbar gewesen. — Adolf Weber.) とは事實なり。然れども、かかる輝かしき發展への動

機において、單なる經濟的なるもの以外、政治的外交的色彩のあまりに著しかりしがため、それが槿花一朝にして泥土に委ねられたる事また争ふべからず。この間の消息は、曩きに予がフランクフルタアツアイツングの所論を引きて其の危殆なるを強調したるところ、讀者の往見を請ふ所なり。(拙著「改訂増補、金融經濟の諸問題」第四篇、第五節)

しかのみならず、彼れら獨逸大銀行の經營態様の、近時漸く否な大戰なかば以降は寧ろ激しく推移して、英國大預金銀行の其れに接近しつつあるは、田中金司教授が最近數年に亘る統計資料の權威をもつて論證せられたるときも存するなり。おもふに、上の論證の中につき、その受働的業務中に短期預金の占むる目ざましき地位の上進と、能働的業務中に證券業務の占むる地位の著しき減退とを、その最も有力なるものと爲すべく、而して是れ、獨逸兼營主義の英國分業主義への接近を、物語るものに外ならず。しかして此れが原因にいたりては多々あるべしと雖も、預金の増殖、小切手行使および手形取引の普及、商工諸事業會社の集中合併に伴ふ其の自己内における資本調達力の充實、斯かる資本的、事業會社の合同に伴ひて自から生じたる銀行の取引所業務活動範圍の縮少等は、まづ高揚せらるべき要因なりと信するなり。

そはともかくもとして、我が國一般銀行または普通銀行が原則として、少くとも自からは産業的企業に對する長期投資または經營關與にいでざるは、上來縷述したるところのごとし。而して銀行分業主義を株守して尙ほ固きものあるの我が銀行界において、現在および將來に亘る、此の方面への金融的活動の不足不備を補ふべきものは、大銀行間の聯合 Syndicate, Konsortium、または大債券銀行またあるひは信託會社 trust companies, investment trust companies、更らに或ひは結局大いに集化せずしては已まざるべき大商業銀行の活動なるべし。しかも、この最後の形態をもつてしても、尙ほむしろ、兼營主義より漸く遠ざからんとするものあるは、輒近獨逸大信用銀行の明かに例證するところなるなり。

かくて最後の分析において推測し得べからんとする、我が國金融業の發展方向にいたりては、恐らく巧みにしては英國流の、而して拙なくしては佛蘭西の分業主義に横たはり存すべきか、を想ふものなり。之を要するに、我が單一銀行が、然り今や大戰前における「ドイツ・チェ・バンク」にすら譲らざる底の自己資金を擁有するにいたれる大銀行にありてすら其が、單獨にては、證券發行事業會社關與ないしは企業組織變更に携はり、以つて商工業

企業の經營に對して關與するを深く慮かる所以のものは、他なし。今日のごとく其の外來資金をば經營資金の大部分たらしむる限り、當業者は常に危険の廣き頒布を期せざるべからず、總べての鶏卵を一つの籠に盛らざるを念とすればなり。また收利性主義より誘惑を超越すべく、衷ちなる確實性主義、または資産流動性主義の要求ありて絶えず反省を促がせばなり。コールを取りて企業金融ダスフイデイヤレンを營むは、此の點、自殺的なりとすべし。

五

かくの如くにして本邦銀行業の發展方向にしてすでに兼營銀行に在らず、却りて大預金銀行に存すとすれば、主として長期金融にあたるべき正常的金融業者は別におのづから發達し來らざるべからず。しかして此の企業金融の當事者として(生命保險會社はしばらく措置)有力なる信託會社が、概ね其れぞれの大銀行系統より派生し長大養し來らむとしつつあるは、今や周知のところなりとす。すなはち既に成れる三井銀行系の三井信託、安田銀行系の安田共濟信託は勿論、今や近く三菱、住友、鴻池等の亦た獨自の信託會社を設け來り、以つて其れぞれの大銀行を背景とする企業金融會社たらしめたるは、すでに明

歴々として將來の趨舍をトせしむるに足るものあり。

おもふに本邦信託會社の母制たりしものは言ふまでもなく、米國の信託會社 *Trust companies* たりと雖も、それが將來、右の母制の歩める道を踏みあゆむべきか、また英國流の放資信託會社 *Investment trusts* に傾向すべきかは、た獨逸流の起業金融會社 *Finanzierungsgesellschaft* に轉向すべきかは、いま明らかに逆睹しうるところにあらず。(今や周知の所なるべきも念のため附記しおきたきものは、獨逸において信託會社 *Treuhandgesellschaften* と呼ばれるものが、米英國型の信託會社にあらずして、寧ろ英米における會計士に類し大ほむね大銀行と連絡を有する會計監査專業會社たるの一事なりとす。……リイフマン「企業形態論」第二章第八節)さはれ、信託會社の信託會社たる所以をなす實際業務上の中心が、一面において長期資金を信託せられ、他面これを長期信用ことに起業金融または有價證券放資に運用するに存するは明白なり。しかして更らに將來、例へば三井合名、三菱合資、安田保善社、住友總本店のごときの謂はゆる持株會社(米國における *holding companies*、又獨逸における *Beteiligungsgesellschaften* のごとき)に結びつきて集大成し來らんとする事も必無にはあらざるべし。然らむときその自己資金は必然將來益々、より巨大ならざるを得ざるなり。

かく信託會社の信託會社たる所以の職能を發揮せしむべく、先づ其の資本構成を相當巨大ならしむるを須要するものとせば、今後の信託會社政策の基調は、必然同種會社の濫設防止にあらざるべからず。しかり、之が對策としての一府縣一信託會社ないしは最低資本金百萬圓の主義は、すでに宣明せられ、從ひて「一見」本邦金融界の病弊たる普通銀行過多の轍をふまざるべきが如し。しかれども、我が金融界從來の常套事に顧みれば、警戒せらるべきものは寧ろ、その「後」に存在するなり。何ぞや。すなはち、或ひは往年國立銀行が各地に競ひ設けられたる如くに、その独自の信託會社を有するを各地方の誇り又は特權とすら謬想するのあまり、敢へて之を須要せざる地方にも勢ひ弱少なるべき同種會社の簇生するなきを保せざる事、是れなり。かかる如き曉には、その結果は豫想するに難からずして、暫らくならずして自から倒るるか、然らずば早晩有力なる都會地の金融系統の買收するところとなり、名目上の支店——實は事實上の本店を、大都市に移轉開設し、遂ひに復また信託會社過多症に陥らしむるか、の一をいでざるべし。萬一かかる愚かなる事業の企てらるるものとせば、之を防止するの道は、何づくにありや。すでに銀行業自體において集中合併運動の勧められ、多支店大銀行趨向の歎ばるる限り、そは勿論、支店禁止の主

義に出づること能はず、仍りて専ら、一方官憲において認許主義を嚴密に適用するとともに、他方事業家又た社會一般において信託會社の性質を正解するの邊に存すべし。

(追記一) 大正十五年末ないし昭和二年初め大藏省内に開かれた金融制度調査會の審議は從來の諸バンク・アンケート以上の收穫を示した。(一)日本銀行にても其の取引先二百五十行に對して營業内容検査を行ふ、(二)日銀自體の改善としては商業手形割引市場の發達を指標して商業手形割引利率を國債擔保の割引利率よりも日歩二厘方廉からしめる、(三)從來日銀銀行券發行の保證準備中には事實上手形なかりしを、今後この準備物件を増加させる、(四)將來は保證準備の發行税を廢して利益納付金制度を採用す、然る場合には現在の保證準備一億二千萬圓を相當擴張する、(五)將來は各産業利益を代表する評議員を擧げ右會を日銀總裁の諮問機關とする、(六)輸出貿易促進のため正金をして貿易業者に低利長期の爲替資金を貸させる、(七)鮮銀・臺銀の兌換券を統一させる、(八)諸農工銀行を勸銀に強制合併させる、等々である。右らは、凡そ「金融經濟の諸問題中」にても、吾人の屢しば力説せるところであり、而して新獨逸帝國銀行、米國聯邦準備銀行の示せる例を踏んで早晩實現されることであらう。

(追記二) もちろん右よりも一層意味あるは、第五十二議會(大正十五年末ないし昭和二年初め)が、その不備を長年曝してゐた「銀行條例」に代るべき新銀行法案を可決せる事である。全文四十六條より成り銀行代表者に課しうべき體刑の規定すらを含む浩瀚なものだが、本

篇の目的に關はる諸點のみを下に摘録しよう。(一)預金貸出爲替を固有銀行業務とし、之に附隨する業務の外は營み得ず、(二)擔保附社債信託法による社債信託は營み得れども、信託法信託業施行細則による金錢信託は兼營し得ず、(三)銀行業は資本金百萬圓以上(凡そ人口十萬以上の都市に本支店を有する銀行は同二百萬圓以上の株式會社にあらざれば免許せず、(四)既存銀行にして同限度未滿のものは七箇年(小邑に在るものは十箇年)以内に右の制限額までに増資すべし、(五)資本の總額に達するまでは利益を配當する毎に準備金として利益の十分の一以上を積立つる、(六)銀行の合併は認可を要する、(七)常務に當る取締役支配人は認可を経ずして他會社の常務に従ひ得ず、等々。(詳細は「銀行法」昭和二年三月二十九日、法律第二十一號を往見。)之こそ四分一世紀以降の劃期的立法といへるものと思ふ。右の結果、全國約千五十行の普通銀行はここ數年内に百萬圓乃至二百萬圓以上に増資するを要求される事であるが、斯かる過多數銀行そのままにての増資は不能否な必要でもある事は自明である。仍りて一つの道を辿るより外、發展の行手はない。即ち、おのおの適當な整理合同を行ひ、結局は英獨佛に見られるごとく少數巨大銀行の多支店制に推移するであらうことが、此れである。そして其の曉には、時代錯誤的な金融不安や取付騒は——その極限には支拂猶豫令を布き、日銀發行高平素に二倍大しての二十七億圓てふ無前の記録を示させ、各々五億圓及び二億圓までの損失補償日銀特別貸出及び特別融通の立法を激成せしめたる、一誘因を爲したところの、最近四月十八日乃至二十一日に亘れる、本邦空前のラン又はパニック(之は決して恐慌でない)ときは——跡を絶つであらう。(昭和二年四月)

附録二 名古屋とボストン——

文化批判より文化創造へ

- 一、ハーヴァード在住十周年にして偲ばるるボストンの風物
- 二、古都市としてボストンと名古屋とが共通にもつ誇り
- 三、今日のアメリカと文明と文化と
- 四、標準化能率化萬能の米國には固有文化おこらざる所以
- 五、ただ弗の力によりて既成文化を輸入し鑑賞するの意味
- 六、之が一例外たる鑑賞を通ほして創造に到らむとするのボストン
- 七、昔わが東西文化の鑑賞者批判者たりし名古屋市人
- 八、しからばボストンの成長過程のごとくに創造に躍進すべきの必然性
- 九、固有文化創造に要せられるものは努力對象における方向轉換のみ

一

新嘗祭といふに今日はうすら寒い雨である。

書齋の壁をはふ蔦がいろどられ伊吹おろしが野道をおびやかす、この新嘗祭の頃ともなれば、わたくしの懐舊の情はいつも、くれなゐの蔦に彩られて蒼然とたつハーヴァードの學舎、ことにはエマースン・ホールあたりに漂ふ風物を思ひ浮べるのであつた。わたくし達の働いてゐる學園はさきごろ創學五周年を祝ふたことであるが、顧みると、わたくしがボストンに着いてハーヴァードにおける一學徒となつたのは一九一六年の秋十月のことであるからそれは正さしく十周年を越えた譯である。かたがた、けふは一つの隨想文としてこの名古屋と、かのボストンとが、そのおのこの國の文化に對して保有してゐる、そくばくの意味を語つてみたいと思ふ。

二

おほかた、私の好みは、人口にしては七八十萬ぐらゐ、比較的おちついてゐる古都市の空氣

に適應するものごとく、わたくしには内外三つの都會が、いまに懐かしまれる。リオンとボストンと名古屋が、それである。そして産業諸部門における發展階段が紡織業より鐵鋼機械工業へと云ふにあるのは、今や定説の形ちをなしてゐるが、何づれも和やかに私を安住させてくれた。此れら三都市における中心産業がおほむね、右の發達線を歩んでゐるのも、一つの悦びである。しかし、リオンのことは今おいて問はずとして、ボストンと名古屋との間には、もつと内面的な交錯の索がたぐられさうにおもふ。そもそも文化は、歴史傳統そして時代のうちに徐ろに育成されるものである。かへりみると昔し、ハーヴァード・スクエアの楡の大木がジョージ・ワシントンの征馬をいこはせたがやうに、宮—名古屋の舊中心—あたりの老杉は吃度あゝの戰國時代を終局せしめたる桶狭間の役に向うて銜をふくんだ征馬をながめたことであらう。うつり替りのはげしい都會相をかへりみれば、この東西の二都市はまさしくともに、その舊さを誇るに値ひする。が舊きものの精神力で生みだすところの、其の文化にいたりては、二者の今ま有てるものの優劣は果して、いかがであらうか。

三

アメリカと文化！ 人はいふであらう、それは永遠のエトランヂエである、アメリカに詩なく藝術なく哲學なし、其處にはゲエテ、カント、ロダンの片鱗すらなかつたでないかと。けれど待たれよ。あらゆる精神文化の創造のおよそゆたかな經濟生活といふ土壤に深く根をおろす所以については、衣食足りて云々を引かず、又た中世南北歐のルネッサンス文化、ハンザ文化の興隆をかへりみるまでもなく、史乘の凡そ明徴するところである。そこで、近く傳へられてるやうな、五時間の勞働日を一週五日だけ營むによりて、全勞働者の豊かな生活が保障せられようとする——言ひかへれば、シモンやブランやオオウエンの夢を現實でゆかしめようとする——かのフォオドの國には、またゲリイの王國には、唯物史觀の有効であるかぎり、近き將來において、ゲエテをはぐくんたるワイマアルの環境が、醸成されるべき筈である。が、この筈は果して可能さをもつてゐるか。答は簡明であつて、其れは金輪際、出來ない相談であるやうに見える。では、何故であるか。

四

米國人の創造への努力が全たく、歐洲諸國人の其れと直角的に異なる方向を走つてゐるからである。すなはち、歐洲すぐれたる人々の精神がふかく内潜して自からのものを裏ちに完成しようとするに對して、米國的天才の努力はひたぶるに外的表現をもとめ、もとめて大衆を標準化しようとする。で、米國人の努力の指標するところは、中西部より東部および南部に重油輸送管を全通せしめることであり、數條の全通急行列車で東西または南北をつなぐことであり、摩天樓を築いて數十の昇降機をはしらせ、以つて空間を征服することであり、大機械を動力化することであり、フォード自動車で國道をみたすことであり、インターナショナル・ハーヴェスタで大農耕化することである。みじかうすれば、一切を最高能率化し、最大最廣標準化することである。これこそ文明なるものの尺度に照らして其の最高表現でなくて復た何であらう。ただし、其れからして、高度の精神文化の生まれ來ないのは同時に明かで、私はこの點かつて大西教授が、文明高きが故ゑに其の文化かへりて進まざるなりと言はれたのを、あながち同氏一流のパラドックスと評し

去り得ないのをおもふ。そして此の視角より眺めては、東西の文化を評騭して、東は東にして西は西なりと言ふた、キツプリングの大體論は、返上されねばならないと考へる。けれど、大ぼづかみに言うて、日本および日本人のほうが米國よりもより、歐羅巴的であり、米國人よりもより、歐羅巴人に有縁の衆生であると思はれる點が多いからである。

五

しかし是れ、彼此のいづく世界觀の相異によることで、大抵の米國人は最初より此の領域に安住してをり、自から其の文化を創造するかはりに、創造されたる文化財一斑をば「弗」の力で端的に遍ねく鑑賞しようとしてゐるのである。みよ。世界おほよその文獻の原本譯本は米國で翻刻されてゐるし、殊に關稅上の關係からもあらうが優れた英國刊行物は米國でも同一紙型で多數刊行されてゐる。華府にある議院圖書館の藏書は、種類數量ともに、歐洲いづれの圖書館のにも冠絶してゐる。また一ポストン美術館に蒐められてゐる浮世繪だけにても日本中に在る其れを遙かに凌駕してゐる事であらう。いな、生ける歐洲の人間までも大量生産的に輸入されてるので、大戦争後多くの獨逸の自然科学者

たちを招いでゐるのは姑らくおくこととして、佛蘭西の舞臺季節のをはつた頃の紐育のタイムス・スクエアは、宛として巴里のプラス・ド・オペラたる觀を呈するのである。かやうにして、多數米國人は、自國の文化財を生産する代りに、佛蘭西製の、又獨逸製の部分品を鑑賞し喋々するのである。底に徹せる「弗」の力の萬能への信仰ではある。……ちかくフリーヴァーが米國の國內金保有高四十六億弗を超え、戰時貸付を除いての對外箇人的放資高百十何億弗を算し、あひ俟つて地上の天國ここに築かれたりと言ふたのは、まさしく其の國民的な感情と理想を代辯したものであらう。かかる全世界の黄金の半分を保有するは彼れらの矜りを充すものの如く、例へば全世界の金總在高が九十七億弗ゆゑ、右の記録では米國は其の約四割八分を保有する譯だとは、近ごろ屢しば傳へられたニュウスのなのである。これでは「國際貸借均衡理論上、既成文化の大量的輸入者とならざるを得ない。

六

たとへばコウファイの生産をブラジルに又た硝石の供給を智利に仰ぐがやうに、これもしも一種の國際的な地域的な分業であると達觀してしまへば、それは極めて便利な分業形

式ではあり得よう。しかし向上への翹望なるものは固とも人々をして決して久しく、外來の文化の鑑賞だけに安住するをゆるさず、多少の天分の相異ありとしても結局、之が創造へと進ましめざるを得ないものである。よつて文化創造の天分よし少なき民衆なりとて、經濟生活の根柢にして既にほどよく培かはれたる以上、その所有し支配する文明力の推進方向^{リヒン}をば、かかる文化的方面に轉換すること若し一日早ければ、其れだけ、その生活内容は豊潤たり得るであらう。果して、此の米國にあつても、創造的精神に先づ覺めたる、都會都會人必ずしも、なくはないので、其れはロングフェロウを、又たホイソーンをはぐくんたるポストン・ポストニアンであること、いまさら申すまでもない。内外の劇や歌劇が上演される米國最初の都會がポストンであり、その鑑賞眼を通過したるものにして始めて紐育はじめ全米にわたりて成功しうるとは、數時代前のポストンにゆるされたる正當な誇りであつた。しかるに今や其處には、もう一つの誇りが加へられたので、かかる文化所産の鑑賞ないしは批判を通ほして、其の創造自體が、潑刺と觀取されるに到つたこと、是れである。まことに二十世紀式急行によりて粗野老雜なるシカゴより繁激混沌たる紐育にはこばれたる異國の遊子が、やがて一夜急行の旅を経てポストンに着くや、彼

れは必ず、文明力の重苦しい空気を脱して、文化力の快よい朝の雰圍氣によみがへさせられるであらう。そして、その創造的オアシスにあふれる泉源の一つに、ハーヴァードの存在を見のがさないであらう。くどくどしく説明するのは遠慮することであらうが、かのポストンとケムブリッジをふくむニューイングランドの一带には、米國の他地方にては味ひえられぬ創造の泉わきいでて、其の人と大地を高雅豊潤ならしめてゐるのである。

七

さてここで吾人の脚下をかへりみる。が現代のを措いて姑らく過去の文化發達の跡に徴してみる。すなはち外來文化に全く支配されてゐた戰國時代までを問はずとして我が江戸時代にはすでに、内外文化綜合のうへに独自の文化が形成されたのであるが、今これを狭く文藝的所産に限りて、その源泉をたづねてみようとするのである。しからばそこに大阪江戸といふ二中心が存在したので、例へば、京阪の人々が巢林子をもつたがやうに、江戸の民衆は西鶴また馬琴を享有した。そして、その前後においても、これら二種の文化は燦爛と高揚せられたのである。その時すでに事實上の中京を誇れる名古屋には、

然らば、何らかの創造のあとが印せられたであらうか。むろん、明確なる否定であつた。けれども唯一つ、十八世紀のポストンが米國文化上に示したる誇りをば、同時代の名古屋が享有しをれるものある事には争ひがない。何であつたか。かやうに東西で創造された二種文化を、すどく批判するによつて、そこを通過したる江戸の文化の文化財のみが上方にすすみえたとともに、そこを通過し得たる上方文化にして初めて箱根をこえ得たる状態が、其れである。別言すれば、名古屋名古屋人は、ゆらい、本邦最敏感の批判家であり、鑑賞家であつたのである。そして斯かる如きは、單なるヘーゲル的な歴史的地理的説明で釋かれるべきでないのは、言詮するまでもない。

八

かやうにして名古屋人は古來、まれなる才人の集團であつた。が同時に天才でなく従うて創造人ではなかつた。さうして、よくないことには、そのおもかげが現代にも尙ほ傳へられてゐるやうに、少なくとも私も外來者には見えるのである。すなはち、この鑑賞的天分を超越するによりて、より、高き人文的業績——創造に到たらうとする意氣、氣魄、努

力の乏しさにおいて、今の名古屋は今のボストンへの對立として現はれると、私どもには感ぜられるのである。人はしばしば今の時代相が最もよく、ヂヤナリズムとラディオとにおいて示されるといふ。私は固と其れに信じないものであるが、もし然うであるとしたら、今の名古屋が大阪ヂャアナリズムに隸屬せず、また東京のラディオに支配せられず、と誰れか言ひきり得よう。

とまれ、江戸よりも、舊き歴史傳統を享有してゐる名古屋には、今や独自の文化がうちたてられても、然るべきであるまいか。ただし、文明力従うて經濟力の固有する推進力にして、正だしき動向を指さないかぎり、いかほど高まれる文明よりしても、一片の文化の生れないことは必定である。あだかも、現代米國の大ほうのごとくにである。だから既に名古屋人の——そして、それは同時にわれわれ日本人全體の傾向でもあらうが——すでに優越してゐる文化鑑賞の高度の感覺をば、乗りこえて、更らに其の創造に向うて努力することは、まさしく吾々の任とすべきところと思ふ。記せよ。中世の末をイタリヤ諸都市に文藝復興を齎らし、最近アメリカにすら西歐文化を改鑄せしめ得むとする底力——經濟力に到りては、今や名古屋の、廣ろくしては本邦の、可なり高度に把握せるところで

ある事を。また記せよ。彼れらにありて、十字軍役の伊太利に與へたる、近くは歐洲戰のアメリカに與へたる、其の同じ底力、經濟的底力は、より、小規模ながらも等しく吾々の今や、享有せるところである事を。だから、今ここに、需められるものは、ただただ人々の努力對象における多少の方向轉換だけで足りるのだと思ふ。

(大正十五年、新嘗祭の夜。)

附録三

名古屋とリオン——

企業分散より企業集中へ

- 一、反省的に祖國を顧みる遊子の心情
- 二、その市民性とその事業相
- 三、共に独自の市格を誇り得る傳統
- 四、共に享有する山と水の美
- 五、諸産業部門における類似と相異
- 六、二都市銀行業における類似と相異
- 七、英獨佛銀行集中の實例——英國五大銀行、獨逸四大D行、佛蘭西四大C行
- 八、リオンにて生成したるクレディ・リ・オネエの優れたる經營振り
- 九、みぎの成績を招來したる内面的および外面的集中
- 一〇、みぎへの對立を示す在名銀行の分立と經營振り
- 一一、銀行分立による一般産業の、及び銀行自體の不利益
- 一二、進歩が競争より生れず、却りて社會性經濟性が合同によりて遂げられる所以
- 一三、この合同を妨げる市人の有つ地方心と封建的傳統
- 一四、信託會社の新設は果して總地元銀行のクレディ・リ・オネエ化するべき海燕たるか
- 一五、其れよりの解放の望ましき絶對主義の傳統と其の表現

一

「祖國を顧みて」におけるK氏や「伊太利亞の旅」におけるO氏や、また日本の國と人に關するあまたの佛文著作におけるW氏（其のために近ごろフランス學士院賞をうけた、昔し水戸城跡學寮時代のわたくしの友で今はリオンにをるところの、）らによつて、おのがじし異なるる視角より代り述べられてゐるやうな、回顧的な、比較的な従うて反省的な考察といふものはおよそ、多少の又た深淺の相異こそあれ、おほかたの海外會遊者のいづく心情の表現なのではあるまいか。この心境の表出時期における遲速はもともと、機會の問題にすぎないので、よきおりが與へらるれば、謂はゆる腹ふくれる業から解放されるといふものであらう。

二

さやうな意味で、わたくしは最近別の機會に、約十年前の歐米巡歴にあたりて、ともすれば心のいらだちやすい歐洲大戰時代の在外者に對し、和やかな心と美はしい環境とを與

へてくれた二つの都會を追憶してポストンとリオンを擧げ中について、前者と名古屋が示す類似と對立を、一語したことである。すなはち、文化一斑の批判ないし鑑賞の尖鋭なるにおいて、此の内外二都會人は正さしく日米兩國におけるおのおのの先達なのであつたが、今のポストンがすでに文化を、しやくの境を超脱して優れたる文化創造の域にいれるのに、今日の名古屋には未だ独自の文化所産が示されないのにおいて、鮮かなる對立があるとした。さうして此所まで到達せる經濟生活發達の道程においては、その既有しえたる文明力の一部を方向轉換せしめて文化創造の業に割かざらむとする人々の精神生活は勢ひ、貧しからざるを得ない旨を結語したことである。かかる内外の或る都會に見られた其の人心と世相における類似と對立を尋ねたる同じ心で、——ただし、此のたびは幾らか視角を現實的に轉回させつつ——リオンと名古屋との有つ市民性の相異、および大いなる程度まで其の現はれであるところの事業相の異同を考へて見たい。

三

まづ類似をもとめる憧れの心を勞するまでもなく、日佛の此の二都會の示す自然と風

物に多くの相ひ似たるものを、わたくしは眼前に浮べえられる。兩者ともに、古都市である。産業都市としての名古屋が、いかに舊い歴史をもてるかは、その中心を貫く堀川が開鑿されて既に三百餘年を経てをる一事實にも窺はれるのであるが、リオンのにいたつては同市を限ぎるソオン河中に浮べる古城の蒼ざんとして數百年を生きてをる事や、より近くしては前世紀のはじめ既に佛蘭西いな歐羅巴きつての絹織業の最大中心であり、而して同國産業革命の進展するや一八三一年に發生せる同市織工數萬の要求した最低生活賃銀設定運動ありて、同國の共和主義と無産階級運動の先驅者となつたる事などで、明徴されるのである。かく此の二都は其の歴史において優に東京と巴里に拮抗するものなのであるが、舊名古屋が江戸大阪の單なる縮圖でなかつたごとくに、リオンはデュネエヴはたブルツセルが小巴里たるを誇れるやうな意味にては決して巴里のミニアチュウアでなく、今に人口八十萬の都市に過ぎぬけれども、然かし、独自の市格を誇示してゐるのである。

四

その都市の自然美にいたりては、二都とも、私の嘆賞の好対象たるを失はない。何かの機會で賀川氏が、山の京洛を、海の神戸を、また河の大阪を高揚したるとき、ついで太陽の平面より出でて平面に没する大平原美の名古屋を描いたのを、興味ふかく讀んだことであるが、わたくしは更らに其のいづれも雄大な山と海と河との美を兼有する、名古屋の自然美を稱へるものである。すなはち、木曾と揖斐と庄内の三河流の「水泡」より生まれいでたる此の大平原都市は、みづからは平面的なれども、西のかた伊勢灣を支配して北勢の連峰をのぞみ、東のかたは自からただちに數里に連なる八事の丘陵もていだかれてゐる。これと趣きを同じうして、スイスアルプスの氷河を融かし流れる巨流ロオンの男性と、潺緩たる深淵ソオンの女性との「間」より産まれたと確く傳説されてるところのリオンは、實は、西のかた、ノートルダムあたりのかぎりなき丘陵にいだかれてゐる「島都市」なのである。かやうにして、ともに清く美はしき水流の舊都市であることは、人々のゆるすところであらう。でわたくしは詩人シェツフェルが若し此れに見いつたならば、かの「ネツカア」とラインとを横たへ、そして較べられるものなき美はしの古都市ハイデルベルグ「のほかに」もなほ「カイン アンドレ コムト デイア グライヒ」では必ずしもないところの、

リオンと名古屋とを、ひとしく禮讚したことであらうとおもふ。

五

きよい豊かな水にめぐまれてゐる都會には由來、諸般工業殊に織維工業が榮えるのであるが、やがて數代を隔みすると、其のうへ、其處の市民には同業に對する傳統的に優越せる手が成長してくるの事情は、バアミンガムの織物について、マーシャルの、又たマンチエスタアの綿類のについてアツシュレイの詳述せるごときものがある。ところが、かの中部佛蘭西の舊都が十七世紀このかた絹織物の中心たるがやうに、この中部日本の古都市は逸はやく紡績業織物業の太宗となつてゐる。このうへ更らに、その港と堀川とをよ、り深うし、また中川運河を開鑿しえたる曉には、ひとりリオンの優越とし言はず、マンチエスタアの、更らにはバアミンガム、シエマイイルドの強みすらを併有しうる事でもあらう。が、有頂天になるに先きだつて立ちとどまり、ふかく省思せねばならぬことがある、と思ふ。外ではない。地の利に配するに、更らに事業の組織および運用において、われわれは果して彼れのもてる長所を有してゐるか否かである。みじかく説けば、現代の産業

諸部門は大概ね、同業者が少さく分散するかはりに大きく集中するによつて、その經濟性をより強く發揮しうるものであるが、わが名古屋の諸般事業の大規模化は、はたしてリオンの其れほどまでにすら進展してゐるか否かである。

六

うち見る。その都市の一主要産業である輸出陶器の製造業には、輝やかしい集中の實が夙とに示されてゐる。が然かし、次いで紡績業はどうであらうか。しばらく名古屋のといはず、全國にわたる紡績業者が約七十社を算するとは、まさしく分散分立に過ぎるものとおもふ。傳統の手がたい英吉利にても近時その紡績業が、——機織および捺染の業は未まだ然うでないが——非常な速度で集中されるのは周知されてるところであるが、性質上むしろ分散の傾向つよき絹織物にしてからがいま當面してゐるリオンの同事業者は、もつともつと合併され集中されてゐるのである。

けれども、かかる生産部門のこともは暫らく措くこととして、彼此事業界において最も顯著な對立を示してゐるものとして、銀行業の發達および歸趨を述べて見よう。けれども、銀行殊に預金銀行なるものは、その借方諸業務において支拂組織上いはゆる有らゆる雜役にあたる家^{メットヘン}政^{フユッファ}婦^{アル}であると同時に、その貸方諸業務において短長期金融を通ほし有らゆる諸産業の乳母であるものだから、此れが事業組織の現状を考へることがとりも直さず、産業部門の組織はた規模を指標するバロメータと爲るからである。

七

一語に比較というてみても、歐羅巴戦争を轉機として、フランスの銀行界は中歐にては、恐らく獨逸のに次いで其の資産負債および損益状態上に最もはげしい變動を蒙つた。すなはち總じては、戦時に入れるとともに利益一たび激減したる後ち徐々に増加し、そして最近其の貨幣價值の暴落につれて名目上の資産および利益は却つて急増した。此の故に、比較を精しうすべきには、暫らく、一九一三年度の計數によりて、その規模を窺ふのを安全なりと爲すであらう。が、正確な計數自體の擧示がわれわれ直接の主題ではないのであるから、かの國の場合はもちろん、我が國のも、宜に從うて説くことで、満足せねばならぬ。

そもそも戦前戦時および現時を通じて、フランスの全信用銀行界は、かの全英吉利の全

預金銀行界が五大銀行すなはち謂はゆる *Big Five* で、又た獨逸の全信用銀行界が四大銀行すなはち謂ふところの *vier D* で統制されてるがやうに、實にただ四つの大銀行で獨占されてゐる。すなはち、巴里に本店をもつところのコムトア・デスコムト、ソシエテ・ジェネラル、クレデイ・インヅストリエルの三行、およびリオンに本店を有するクレデイ・リオネエをもつて統一されてをり、そして全國にわたる短期金融は悉く、此れら四大銀行の張りめぐらす二千何百の支店網をもつて全く統制されてをるのである。短かくいへば、フランス全金融市場は、その何づれも *C* の字で名づけはじめられる(ただし、言へば、そのうちの一行を除いて)謂はば *quatre C* をもつて完全に組織されてゐるのである。しかも驚異に値ひする一事が、なほ残されてゐる。其れは、右の四大預金銀行中の最大にして最有力なる信用設備が、實に、この中部フランスの然まで大ならざる一都市リオンに生まれ、努力し闘争し協同しつつ而して大成し來つたる、クレデイ・リオネエである、と云ふことに外ならない。

八

もう少し詳はしうすれば、わが正金銀行ごときの對外金融業者の覇者としては四大行中、コムトア・デスコムトが推されることであるが、然し、フランス國內金融の關する限りは、大戦前より今日にかけて明確に、此のクレデイ・リオネエが王者たるのである。一九一三年において既に、此のリオネエは、資産の額(もちろん之は同時に略ぼ負債の額でもあるが)三十億佛純利益四千百萬佛を示してゐる。のみならず、このクレデイ・リオネエの示す營業状態にいたつては、普通銀行として、すなはち獨逸流の信用銀行はた兼營銀行に對立するものとしての預金銀行又は割引銀行として、凡そ營み得らるべき最上な理想的な境地に立つてゐたのである。すなはち、一方その負債が、わにおいて全銀行資金の九割強が預金勘定より成立して拂込資本金および積立金は僅かにその八分にすぎざるとともに、他方その資産が、わにいたりては全貸出の七割一分が専ら割引商業手形より成りて貸付および擔保貸は僅かに一割七分を超えないと云ふごとき状態を示せるのである。しかば、その必然の結果たる、収益に現はるべき營業成績にいたりては、もはや逆睹するに難くないので、その配當率は實に、六十五佛(拂込百佛に對し)を示せるのである。尤も、かかる成績は、翌一九一四年度には同二十五佛に激落したのであるが、一五年一月モラトリアム

を利用せずとも危機を突破しうるにいたれる以後は漸く回復し、更らには上述ごとき同國をば激しく見舞ふたる景氣消長の波にゆられながらも、最近より常態化した事である。(ちなみに右の數字は、ル・シュミナンの「植民地および外國銀行の諸體系」、アングアソンの「佛米國における貨幣信用および金融に對する戰爭の影響等」——Keith Le Cheminant, Colonial and Foreign Banking Systems, 1924; Anderson, B. M., Effects of the War on Money, Credit and Banking, 1919.——に據つた旨を申し添へておく)

九

さて大凡そかかる業績の由來せる所以は、そもそも何であつたであらうか。もし人がこれを銀行業の貸借對照表上の負債が、わより釋かうとして、わが國とはけたちがひの蓄積資本の豊富なるによりて預金利子の廉きがためとか、または資産が、わより説いて、我が國以下に小切手の行使せられざるによりて割引手形出廻りの盛んなるがためとか、爲されたならば、斯やうな細目的な論議は、今の私の關心するところでない、と申すほか無い。また、銀行使用人一斑の能率よりする考察にいたりても、吾人の關心の的を逸する、何故な

らば、フランスの使用人殊に銀行業従業員の働きぶりは、必ずしも吾人の範たらしむるに足りるものでないからである。で、われわれは、より深く事業の組織運用の相を見きはめねばならない。

さやうに考へてくると、其れは斯う解せらるべきであると思ふ。……外面的に眺めては、クレデイリオネエがリオン市における唯一の本店銀行であるのみでなく、幾百の支店を包容して更に南マルセイユにのび西ポルドウをつき北しては、パリを征せる事にあるのである。が、然しながら、より内面的に、右の外面的勢望の由來したる所以を考へるならば、それが最大限度に集中されたる資本力信用力組織力といふ點に、而して斯かる組織力に伴うて實現さるべき積極的には、能率の増進、および消極的には、營業費ことに重役費の節約といふ契機に、横たはつてをることを見出すに相異なる。しかして其れは、全然争ふべくもない明哲な所であると信するのである。

一〇

いま轉じて眼前なる名古屋銀行界、いな、ただしく言へば、其の銀行資金のうへより見て、

同市における組織されたる全金融資金の三分の二強の保有者であるところの、同市本店銀行界の事象をながめる。が、その構成分子の有する營業狀態、ことに自己資金外來資金間の比例、および營業成績ことに収益率等については、大方の銀行通信録のたぐひを翻へせば容易く判明するところであるから、多く關説する必要がない。また、略述しおくとしても、大正十四年末日における全本店銀行の擁する總銀行資金貳億圓すこしあまりのうち、自己資金は六千萬圓餘なのであるから、全銀行資金の實に三割は拂込資金および積立金より構成され、しかも此の必ずしも大ならざる外來資金の三分の一強は可なりの高利を食むところの定期預金より成るものであり、そして斯かる低級發展段階に在る銀行資金構成狀態の必然的結果として、その配當率は到底年一割二分を上はまはるを得ない、と云ふ旨を記せば充分であらう。これから眺めても既に、クレディリオネエの其れとは銳どい對角線上に立つてゐるものなることが判かる。

かやうにして、ここにては一意その企業經營上の一面、しかも最重要と私には思惟されるところの、其の分立的傾向といふ一面だけを、短言すれば足りるのである。いひかへれば、其處に所在する少くも三大銀行——名古屋、愛知、明治——が、其れぞれ各自の關する

限り、大正九年に到たる其の數年間の變調期における飛躍を措くとするも、同十年より十四年にわたりて拂込資金および積立金ともに五割餘の發達をとげ、また其れぞれ貳千萬、千五百萬、千四百萬圓の資本金を公稱し、中部日本における一流銀行たるに到つたのであるが、彼れらは何故を、なほ一步を進めて、少くとも公稱壹億圓、拂込五千萬圓ほどの一大銀行に集中しきたりて、恰かもクレディリオネエの全フランス金融界におけるがごとくに、わが全國的なる一流銀行たることを期しないであらうかを、略語すればよいのである。より、銳どい言葉にひるがへせば、たとひ今日は増資するの好機にあらずとするも、彼れらは何故を、名古屋全銀行界の精銳の集中によつて、一三井銀行の半ば、または一住友銀行の四分の三にあひ當たるほどの自己資力をば、協同して動員しきたる事を企てないのであらうかを暗示すれば、本文における當面の意圖は遂げられるのである。それ、銀行の發達にしても、又た集中にしても、一種の歴史的背景を帯び來らずしては善く實現しえないのは事實ではある。が、右に謂ふた東京、大阪の各銀行が近かく、五十年史および三十年史を編纂してゐるがやうに、在名三大銀行の一つは、實に四十五年史を誇唱し得るものなのである。で、第三者には一見大いに動けさうに思はれる。

一一

過ぎたる多数銀行の分立によりて、同市が現に、社會または産業のための銀行たる代りに銀行のための都市または諸産業たる勢ひを馴致し、更らには銀行業のための重役たる代りに多数重役のための銀行界たる觀を呈し、その結果の一つとして、その自からの収益性またはより正しくは、經濟性確實性および資産的流通性すらの如何に妨げられてゐるか、の一端は、その銀行街の外觀を瞥見するによりても、如實に感得せられる。近時、同市中心の移動につれて、元と概ね市を南北に貫ける本町筋に所在したる諸銀行は、あひ競うて其の東西をはしる廣小路に移りきたり、美はしき一直線のプロオドウエないしはグランブウルヴァアルの、かの一帶は、恰かも丸の内はた北濱ごときの金融街と化せんとしてゐる。金融業の地域的集中はかやうにして、既に實現せられた。が、金融業それ自體の集中にいたつては、正さしく其の逆を行つてゐる。而して其處にては、右の一流三銀行および二流三本店銀行の併存する傍らに、更らに東京および大阪のあらゆる一流銀行の支店が介在して、然まで廣汎ならざる同一陣地然かり、精々おほく見積るとも參億圓に

満たざる銀行資金の蒐集および運用てふ狹隘なる同一陣地をば争ひ耕やしてゐる。すなはち、おそろしきまでの集約的な金融業經營が、そこに展開されてゐるのである。これら名古屋の本店銀行の、更らには其の大概ねの分有する機關的な諸貯蓄銀行の擁有する重役の員數にいたりては、おそろく百何十名を數へる事であらう。——尤も同市において殊に著しき重役兼任の普及のために、其の重役たる箇人の員數にいたりては勿論より、少ない數字を示すであらうが。——

さて斯かる金融業の分立的な過超競争的な集約的な金融業の經營といふものは、その然らざる場合に比較して、果して、一般産業は固よりとし、銀行業自からにより、大なる利益を齎らしてゐるであらうか。銀行集中のもたらす利弊の何づれに對しても眼をおほはなかつたるマーシヤルはたサイクスを拉致して之を評せしめるとも、必ずや然かり、とは言はないであらうと思ふ。けだし、彼れらの指した弊害の、最も本質なるものは、謂はゆるマネー・トラストの専横と、地方的利害の閑却とに盡きるのであるが、前者の虞れの斷じて在らざる所以は、歐洲大戰前すでに米國のピユウヂョオ委員會報告書の明確に論證したる通りであり、また後者については英國に普及されてゐる地方重役の制度によりて十分

善後さるべき筈であるからである。況んや、一名古屋における銀行集中ぐらゐにおいてをやである。

一一一

かく説き來れば、ひと或ひは言ふであらう。何事にもあれ新しきに即いて苟くも停滞するところなき米國に見よ。當年二億弗以上の銀行資金を擁有する大銀行は紐育に三つより無いのであるが、この如き規模のものは倫敦には十行、伯林には五行、巴里には四行あるのみでなく、この紐育最大銀行の支配しをる資金とても此れをクレディリオネエに比較しては僅かに四分の一に過ぎざる旨を言ひて、權威あるビュウヂョオ委員會報告書が米國諸銀行における合併集中の急務なる事を力説してより、既に業に十數年を経過せるに拘らず、未だに同國金融界の中心たる國立銀行の數千行は依然分立してゐるではないかと。また言ふであらう。外國の事例に即くまでもなく、最近數年にわたりて我が主務省および地方官憲の懸命してゐる集中運動の獎勵促進あるにも拘らず、僅かに百十億圓餘りの預金の蒐集運用のために、本邦には尙ほ千六百の預金銀行が併存してゐるの

ではないか、仍つて同市の狀勢は本邦銀行界一般の單なる縮圖にすぎぬのではないかと。更らには、その千何百行中、日本銀行の取引銀行たるに堪えるほどのものは僅々二百五十餘行に過ぎずといふごとくに例へば、資本金百萬圓未滿の小規模銀行が尙ほ各地方に約千百行も分散分立してゐるのではないかと。より、現實的に迫り來りて或ひは言ふであらう。名古屋地方銀行界にも絶えず集中運動は行はれて居るのであるが、其れは主要三銀行を各独自の併合銀行となしてであつて、同市三大銀行自身の集中ごときは、其の各異の歴史的存立と發達を無視せる非實踐的な問題ではないかと。

右やうの議論にして若し提唱されたとしたならば、其れは、或ひは衷ちに整理さるべき經營を包藏するの眞事實の消息に通じないものであるか、或ひは的を外づれ現實を誇張し糊塗してゐる言説であるか、乃至は不合理なものを強ひて合理なものに歪め考へて現狀に安住しようとする偷安ないし獨斷であるかの、以外ではあり得ない。銀行集中、然り、常に小銀行整理の上にての集中合併を行はざりし爲めに、暴露することあるべき苦き經驗に想到するものは、平常無事の時に際して、須らく三省し敢爲すべきであらう。

史を展開するまで放置さるべきである、と一般的に言ふごときは、正さしく人の意志力理想価値を拒否するものにあらざるを得ない。いふまでもなく、方今企業の組織より、狭ましく言ひて其の規模の問題を嚮導し決定する指標は、其の規模によりて發揮せらるべき社會性および經濟性の外には存在し得ない。別言すれば社會的奉仕性または社會的合目的性 *Sozialdiensttaetigkeit, Sozialzweckmaessigkeit* と収益性收利性 *Ertragsfaehigkeit, Erwerbstaetigkeit* 或ひは一層廣き概念であるところの經濟性 *Wirtschaftlichkeit* と云ふ、兩面的要求が、銀行業における如何なる組織と規模によりて、より善く又よく多く達せらるべきかが、この場合、ただ一つのクライテリオンであるべきであらう。さうして此の二要求の、ともに、指標する方向は、少くとも銀行業の關する限り、管理及び資本の集中、すなはち大經營の外には存在し得ないのである。顧りみて名古屋銀行界指導者たちの有するところの經驗慧明認識が、かほどの平凡事を知悉しをらぬ筈はないので、それは當業者の萬々承知してゐるところなのである。しからば、萬々承知のうへにて、而かも尙ほ社會性、經濟性の、双つながらの指標する大道を進むべく、強く抗爭するものとしたならば、それは果して何の故であるか。この點、少許の吟味を加へたいと思ふ。

一三

もしも其れを單に、各行成立の歴史的壓力の故と片付けて仕舞ふたならば、あまりにも皮相觀に過ぎるであらう。しかり、歴史的重荷ではあるが、片々たる各行の成立又は主要株主の構成のそれにあるのでなく、一層深い底に横たはつてゐると、わたくしは考へる。まことに、之が強調が、本文意圖の一つなのであるが、即ち同市人々の心——傳統のうちにこそ、それは横たはり存すると、わたくしはおもふのである。そして、この心の傳統よりして、善く解放されざる限り、集中されたる單一大銀行ごときの實現にいたりては、全國都市中最も後れたるものと爲りをはるべき事が慮かられるのである。何であるか。

それは、率として同市指導者たちすらの心に植ゑつけられてゐるところの、ロオカリズム、又はフェウダリズムに外ならぬ。この強き根ぶかきロオカリズムまたはフェウダリズム、すなはち地方的分立の精神または封建的割據の思想こそは、時に應がうて、寛容ならざる、開放せざる、衷心より協同する能はざる、謂はゆる鶏頭となるも牛後たるを肯んぜざらんとする心、すなはち短う言へばお茶室的の心または大同する能はざる心となりて、その

事業相のうへに現はれざるを得ないのである。で、わたくしは思ふ。地方的小中市市すなはち警察國家的なる舊小中藩の延長であるところにのみ残存して、かの參勤交代の制度によりて全國あらゆる民衆を包容したる江戸と此れを傳へる東京に勿論存せず、また舊幕治下全國あらゆる人々と物資を集散せしめたる大阪に其の片鱗を見るべからずして、奇しくも此の大藩の舊都に三百餘年間生きつづけ成長しきたれる、此のロオカリズムよりこそ、今や、大名古屋と其の人々は完全に解放されねばならないと。しからんとき、大概ねの事業には必ずや、近代的なる自由な空氣が生きいきと吹き入れられるであらうし、また従うて、近かく同市民の翹望しつつある眞の「大名古屋市が形ちのみでなく魂ひの吹入れられて、きつと實現されるであらう。

一四

ただたどしき筆を重ねて、もう少し附言したい事が残されてをる。わたくしは此のロオカリズムよりの解放の先驅として、一見至難に見えるところの、三大銀行集中の實現を待望すること切實なるものであるが、最近時、右に謂ふところの先驅の先驅とも考へ得ら

れる一事實に面接したことであつた。地元六銀行協調による一信託會社創立の議、および其の行きなやみが、此れである。(節末の追録を往見。)

すなはち、先きに安田信託の支店開設され、ついで近かく三井住友三菱の各信託會社のおのがじし長驅し來りて、この長期資金の沃野を耕やさんとする風聞のつたはれる折から、主務省よりの「一府縣一信託會社の主義」の内規に接したる、名古屋銀行界には勢ひ、一道のセンセエションの緊張せるのを見のがし得なかつたのである。かくて、全名古屋本店銀行による、中央信託會社の設立をもつて、此れが對策たらしめる由が傳へられたのであつたが、吾人には其の創業の未だに行きなやんでをるやうに見うけられる。もちろん、信託會社については性質より言ひて、預金銀行とは異なり、放資者一般に對して善き受託勤勞の提供せられる限り、必ずしも地元會社を要するものではない。にも拘らず、この行きなやみが、例のロオカリズム又はフェウダリズムの表現でないことを祈らざるを得ない。と云ふ所以は、地元六銀行の協働によるところの此の信託會社の實現において、吾われは來らむとする一大預金銀行——名古屋のクレディリオネエ——の誕生を前觸れする、また従うて、社會性と經濟性とをもちたるところの産業諸部門の集中の普及を豫報する、海

燕を見ようとする悦びをもつてゐるものだからである。

(追録) それは筆者の迂濶を告白する事になるものであるが、私の意圖より眺めては、迂濶を表白するのが寧ろ喜ばしい消息となる一事を、追録し置きたい。右にて私は、久しく傳へられてた名古屋中央信託會社の未だ成立せぬのを遺憾と爲した事であるが、それは實は來る年末の日に、資本金五百萬圓四分一拂込をもつて其の創立總會の開かれる運びに到つてゐるのを聞かされた事が、すなはち其れである。みぎ信託會社の成立のいきさつは、このごろ各地殊に關西地方で頗りに目撃されてゐる、多數の既設小會社の合同なのでなく、地元三大銀行系統の聯盟にて全たくの白紙に書きおろす約款より成るものである。——たとひ事實は、三大銀行中の一行が特殊利益を保有してゐた一大土地會社の發展したもので、そして右の性質の限りにおいて眞實の信託會社の機能の發揮上ハンディキャップが伴ふことではあらうけれども。——とまれ其れが一楔子となつて將來、地元總銀行合同の機運を打開し來るであらう待望の必ずしも夢を語る者ならざるべき事を祈るのである。(十二月十八日)

一五

事の序にもう一つの言葉を添へておかう。すこし溯りかへりみると、その適用都市として六大都市が必然豫定されたる先年立法の借地法の施行を、ひとり名古屋に限りて

昨年まで阻止せしめぬた、ランデッド・インテレストの大ほげさに言へば反社會的な心は、今や既に跡方なく消えうせた事であらう。市民の生活と工商業の經營は、いふまでもなく、一定地積を占有せずしては能はないところであるが、この點について、もう一つ名古屋の一部マネエド・クラスの有つところの、或る心の消えるのを、望まねばならぬ事があるやうに思はれる。すなはち、ひたすらに地價の昂騰を期待して、彼れらが其の所有大地積を、賣りもせず貸しもせず又た何らの意味においても直接利用することなくして、徒らにながく文字通りのよむぎが原たらしめおく、その反社會的な精神に外ならぬ。新鮮なる空氣の呼吸をすら市民に容るさざらむとするは、暫らく措き、關東天變直後すすみて移り來らんとした多數工場の建設を斷念せしめたるごとき、所有權絶對主義に信ずる心に外ならぬ。このごときは、市および市民一般が、當事者の單なる利己心營利心の現はれとしてのみ見のがし置いてはならぬ事であると思ふ。けだし、此所に表現せられた流通經濟理法に無智な地方心にして、若しながく容されるとしたならば、その地方團體の歳入を害なひ又た其處の金利を高からしむるごとき結果の生ずべきことは、姑らく等閑視するにしても、中川運河新設堀川浚渫築港はた名古屋驛新築、區劃整理等の意義の一半を失はし

め、延いて「名古屋市の産業的發達を阻ばますしては已まないからである。」

* * * * *

しかし綜じて思ふに、ゆたかなる流水または海に洗はせ、さらに又、大平原にたてられたる世界大概ねの都會と都會人には明るさと朗らかさが見いだされる。心ひらけて自由な空氣をすふが故である。巴里にするも、リオンにするも、紐育にするも、又た大阪にしても、然うである。さらに思ふに、文化一般の進むにつれて、その世界の都市と都人の心には、明るさと寛容包容の徳の増し來てゐるのが歴々と明徴せられる。人と事を眺めるに、より高いより、大きい所から爲すが故である。近世史をひもどけるもの誰れか、一八三〇年前のフランス、一八六〇年前のアメリカ、そして一八七〇年以前のドイツにおける諸都市と其の市民が頑くななるロオカリズムはたセクシヨナリズムによりて支配され居らなかつた、と言ひ得よう。しかも今や、其處には、地方的偏見、地方的狹量の片鱗すらを見いだし得ない事、それは、歐米を巡歴する人々の均しく感得する印象であらねばならぬ。かやうにして國際的なる彼れらの心は、その國際的なる音樂美術とともに、同じき旋律を異邦人に傳へ、其の心を和らげる。海と水は寛容と流動を訓へ、都市の空氣は人を自由な

らしめ、そして文化の進みは人の見解を高所大局へ昇華せしめずしては已まないからである。さしうて是れ、吾人の經驗にうつたへて容易く肯づきえられるので、敢へてビュツヒヤアの史觀を藉り來るを須ひないところであらう。自然と文化の、人心にもたらす影響の力の偉きくして遍ねきものである事の一斑は、およそ此れにても、知り得られるのである。で、此の二條件をすでに相當よく、且つたかく、充たしをれるところの、今日および明日の名古屋にして、單とり、之が歸結よりの除外例を、要求する權利はあり得ない筈であると思ふ。

(大正十五年十二月。)

—— „Städtische Luft macht frei!“ ——

Buecher, Die Entstehung der Volkswirtschaft, I. 15. A., S. 120.

參 引
照 用

著 書
論 文
名 索
引

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '著書論文名索引']

A

アモン

「理論的國民經濟學の建設者としての
カルドウ」

一九二

「國民的福祉學原論」

三五、一九三

アツシユレイ

「社會化の主要問題」

一〇一

アリストテレス

「英國の經濟的基礎」

三〇三、四六七、五〇五

アルトマン

「政治論」

三〇〇

「十九世紀に於ける獨逸貨幣諸理論に就
いて」(シユモラア七十歳賀壽論文中)

三七二、三七四

赤松要

アンダアソン

「貨幣の價值」

三七五、三八二

「佛米兩國に於ける貨幣信用金融に及ぼ
せる戰爭の影響」

五二〇

B

ボエム・バヴェルク

「國家學辭典」第三版——「恐慌」

一〇、二九

ブツヂエ

「マルクス主義の終り」

一四五

ベルグマン

「國民經濟學綱要」

一〇

ブウニアテイアン

「英國に於ける商業恐慌の理論及び歴史」

二

ベルンシュタイン

「マルクス主義の批判」

一三、一〇六

ブレンタノ

「自敘傳に據れる現代の國民經濟學」中
の一篇

一五三、一八一、一八六、一八七、一九六

ペンディクセン

「近代社會的苦惱の原因」

一八二、一九六

ベエア

「貨幣の本質」

一〇九、三七三、三七五、三七七、四〇四、四〇五

ベサンソン

「古代社會鬭爭史」

一三三、一三五、一三六、一六五

「産業革命てふ語の古き用例」 一五六
 バチオット 「英國憲法論」 三八五
 「ロムバード街」 三八五、四五六
 ビユツヒヤア 「國民經濟の成立」 五三五
 C
 カツセル 「理論的社會經濟學」 一〇、七〇、九〇—一、
 九三—六、四四四
 「理論的經濟學の根本思想」 六三—七
 「一九一四年後の貨幣及び外國爲替問題」 七四、
 二五七、三九六、四〇一
 「世界の貨幣問題」 三九六
 クラーク 「富の分配」 六三
 キヤナン 「資本てふ用例の小史」 一三六
 クロオチエ 「唯物史觀とマルクス經濟理論」 一四六、一六四
 クウルノオ

「經濟理論の數學的原理」 二四四
 カーライル 「チャアテイズム」 「過去と現在」 二六四
 カーヴァア 「經濟學原理」 三〇七
 キヤナン 「富」 二九一
 シュミナント(ル) 「植民地及び外國銀行の諸體系」 五二〇
 D
 ドーズ (チャールズ・デイ) 「獨逸賠償問題専門委員會報告」 三三八、三四三、三四四、三九九、四〇一
 (カアレント・ヒストリイ、一九二四年五月號)
 E
 エンゲルス 「英國勞働階級の狀態」 一三九
 「共産黨宣言」 一四〇
 「オイゲン・ヂェウリングの科學の革命」 一五三、一八八

エツチウアアス

「經濟學論文全集」

二二、二五五

エエヘルヒ

「戰時財政一斑」

三三八

エルスタア

「貨幣の魂」

三七五

F

福田徳三

「經濟生活及び經濟政策の周期性」 三、三六、
二二、四三、—四、
三三

「日本經濟史論」

「社會政策と階級闘争」

「經濟學講義」

「國民經濟講話」 「流通經濟講話」

フイツシヤア

「貨幣の購買力」 「安定化されたる弗」

フランクフルタアツアイツング

「一九一六年九月十日朝刊」

フオオド (ヘンリイ)

四七八
八三、四八九

G

ゲエテ

「ウエスト・オストリツヒヤア・デイウアン」

一三三

ギゾオ

「佛蘭西に於けるデモクラテイに就て」

一三四、
一四〇、

ヂイド

「經濟學說史論」

「經濟學講義」

ゴンナア

「リカルドゥ、經濟學原理」への序説

グレゴリイ

「幣制改造に關する軌近諸理論」

グラッドストオン

「豫算に關する議會演說集」

ゴツシエン

「フアラア編、ゴツシエンの財政」

ギツフエン

「經濟學者としてのバチオット」

三〇、三三三
三三
三二四
三八五

「金融論文集」 四五〇
銀行法（昭和二年法律第二十一號）の概要 四八四

H

ヘルクナア
「國家學辭典」第三版——「恐慌」 一一
ハーン（アルバート）
「銀行信用の國民經濟的理論」 三〇、四五〇
「貨幣市場の理論」 四七七
ヒルファアデイング
「金融資本論」 四〇
ヘエゲル（ヘーゲル）
「哲學の全體系」 一三、一八三
「法理哲學」 一五〇
「精神現象學」 一五〇
ハインドマン
「社會主義的經濟理論」 一四、一四四
ハアスト
「アダム・スミス論」 二七、一三〇
ホオランダア
「經濟的自由主義」 二〇三
ハゼツク

「アダム・スミスの經濟思想の獨逸への導入」 二七六

堀江歸一

「貨幣論」 二九〇

ホツブス

「レヴィアタン」 三〇一

ホートレイ

「通貨と信用」、「貨幣の改造」 三五八、三七五

ヘルツフェルダア

「國民經濟的貸借對照表と爲替相場の
新理論」（増井氏に據る） 三八〇——

フリーヴァア

「我が國際金融の現状及び改善策」 三九七

井上準之助

「我が國際金融の現状及び改善策」 三九七

井上準之助

「我が國際金融の現状及び改善策」 三九七

井上準之助

「我が國際金融の現状及び改善策」 三九七

チヨオレ

「社會主義諸研究」 一四〇

チエヴオンス

「經濟學純理」 二四四、二四六、二六八

チエヴオンス

「經濟學純理」 二四四、二四六、二六八

「通貨金融研究」 四五〇
チエエズ
「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六
「財政學要論」 三五五

チエエズ

「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六

「財政學要論」 三五五

「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六

「財政學要論」 三五五

「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六

「財政學要論」 三五五

「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六

「財政學要論」 三五五

「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六

「財政學要論」 三五五

「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六

「財政學要論」 三五五

「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六

「財政學要論」 三五五

「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六

「財政學要論」 三五五

「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六

「財政學要論」 三五五

「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六

「財政學要論」 三五五

「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六

「財政學要論」 三五五

「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六

「財政學要論」 三五五

「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六

「財政學要論」 三五五

「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六

「財政學要論」 三五五

「戦時の政治及び財政の諸問題」 三三六

「財政學要論」 三五五

K

ケインズ（ケーンズ）
「貨幣改革論」 一一、一五七、一九〇
「自由放任の終り」 一〇一
「マイシヤル記念」 二二、三〇、三二〇、三三〇
「印度の通貨と金融」 二九〇
「平和條約の修訂」 二九〇
クニイス
「經濟學原理」 二二六
カント
「恆久的國際平和論」 一九、二八、三七
小泉信三
「近世社會思想史大要」 二二、一八三
「價值論と社會主義」 一六九
「チエヴオンス、經濟學純理」 二二八、二六二
「改訂社會問題研究」 二九三
カウツキイ

「自叙傳に據れる現代の國民經濟學」中の
一篇 一七、一七九

クナツプ

「貨幣國定學說」 二五六、二五八、二七五、二七九、三三三、三九四、四〇三

金原賢之助

「ベルンシュタイン、マルクシズム批判」 一八三

串本友三郎

「日本の銀行業——比較的一研究」 四四九、四六〇

金融調査委員會

「諸報告」の概要 四八三

河上 肇

「祖國を顧みて」 四八三

キツプリング

「祖國を顧みて」 四八三

キツプリング

「祖國を顧みて」 四八三

ロエヴエ（レエヴエ）

「獨逸に於ける景氣研究の現状」（ブレレン
タノ八十歳賀壽論文集）中 一三、二六、五〇、一〇五

リイフマン

「貯蓄と資本形成の理論」 九三、四〇〇

リイフマン

「貯蓄と資本形成の理論」 九三、四〇〇

リイフマン

「貯蓄と資本形成の理論」 九三、四〇〇

リイフマン

「貯蓄と資本形成の理論」 九三、四〇〇

リイフマン

「貯蓄と資本形成の理論」 九三、四〇〇

リイフマン

「貯蓄と資本形成の理論」 九三、四〇〇

リイフマン

「貯蓄と資本形成の理論」 九三、四〇〇

リイフマン

- 「一般國民經濟學」 二、三七六、四二一、四六六、四八八、四九二、四九三、四九四
- 「社會主義の歴史及び批判」 四〇〇—八、四六〇、四七四、四七五、四七六、四七七、四七八、四七九、四八〇、四八一、四八二、四八三、四八四、四八五、四八六、四八七、四八八、四八九、四九〇、四九一、四九二、四九三、四九四、四九五、四九六、四九七、四九八、四九九、五〇〇
- 「企業聯合と企業合同」 一〇七、四二二
- 「企業形態論」 三九、四六六、四七四、四八〇、四八二
- 「諸國民の富に就いて」 三二二
- 「ラブリオラ (アアチエロ)」 一四五
- 「社會主義者大系第一卷」 一四五
- 「ラブリオラ (アントニオ)」 一五五
- 「唯物論者流の觀念」 一五五
- 「ルロア・ボオリウ」 一四八
- 「經濟學綱要」 一四八
- 「財政學」 二七、三〇三、三〇六、三一一
- 「ラアフリン」 三七二、三六六、四〇三
- 「貨幣原理」 三七二、三六六、四〇三
- 「リスト (フリイドリヒ)」 四〇
- 「經濟學の國民的體系」 四〇
- モムベルト

M

- 「景氣理論研究入門(綱要)」 一三、四一〇
- 「經濟恐慌論選集」への序 一一
- マルクス
 - 「資本論」第一、二、三卷、 三—三、九、九、一四一、一八四、二八二、
 - 「オイゲン・ヂェウリングの科學の革命」 一五三、一八八
 - 「共産黨宣言」 一四〇
 - 「創立宣言」 一四七
 - 「フオイエルバッハへのテーゼ」 一五四
 - 「哲學の貧困」 一六六
- ミーゼス
 - 「貨幣及び流通手段の理論」 二六—九
- マーシャル
 - 「經濟學原理」 六、一六六、一七三、一九一、二〇〇、二〇四、二〇五、二〇六、二〇七、二〇八、二〇九、二一〇、二一一、二一二、二一三、二一四、二一五、二一六、二一七、二一八、二一九、二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、二三八、二三九、二四〇、二四一、二四二、二四三、二四四、二四五、二四六、二四七、二四八、二四九、二五〇、二五一、二五二、二五三、二五四、二五五、二五六、二五七、二五八、二五九、二六〇、二六一、二六二、二六三、二六四、二六五、二六六、二六七、二六八、二六九、二七〇、二七一、二七二、二七三、二七四、二七五、二七六、二七七、二七八、二七九、二八〇、二八一、二八二、二八三、二八四、二八五、二八六、二八七、二八八、二八九、二九〇、二九一、二九二、二九三、二九四、二九五、二九六、二九七、二九八、二九九、三〇〇、三〇一、三〇二、三〇三、三〇四、三〇五、三〇六、三〇七、三〇八、三〇九、三一〇、三一〇
- 「産業と貿易」 四七、三四、二七六、五〇五、五一五
- 「貨幣信用及び商業」 三四、二五七、二五九、二六七
- 「産業經濟學要論」 二八〇
- 「産業經濟學」(マーシャル夫人と共著) 二六三
- 「婦人職業問題」 三六〇、三六五、三九〇、三九一、四〇五
- モンロー
 - 「アダム・スミス前の貨幣理論」 四〇〇
- 丸谷喜市
 - 「リーフマンの限界餘剩均等の法則」 四一四
 - 「南亮三郎著、流通經濟の原理」 四一四
 - 「經濟學教科書」 四一五
- 南亮三郎
 - 「最新學說、流通經濟の原理」 四一五
- マクラウド
 - 「銀行の理論と實際」 四二〇
- 三井銀行
 - 「三井銀行五十年史」 四二五
- ニコルソン
 - 「經濟學原理」 四二〇
 - 「マルクス主義の復活」 四二五
 - 「租税に關する一考察」 四三〇

- 「マーシャル、議會報告書集」 二六六
- 「現代に於ける經濟學の地位」 三三二、三三八
- 「マーシャル記念」中の「マーシャル論文選集」 三三三、三四七、三五二
- ミツチエル
 - 「經濟循環論」 六九
- メエアヴァルト
 - 「松本金次郎」 九
- 松本金次郎
 - 「マーシャル、貨幣信用及び商業」 二六七
 - 「經濟學原理」 二六七
- 「代表的政治論」 二八三
- マイナア (編)
 - 「自叙傳に據れる現代の國民經濟學」 一七四
- メンガア (カール)
 - 「國民經濟學原理」 四八、二四五、三六七、三八八
- 宮田喜代藏
 - 「クナップ、貨幣國定學說」 二九〇
 - 「リーフマンの國富均等の思想」 四一五
- 増井光藏
 - 「貨幣經濟の研究」 三六五、三六九、三七二、三七四

O

オツペンハイマア
「社會學體系」 四三、三
大西猪之介
「囚はれたる經濟學」 一七
「舊い文化と新しい文明と」(人口と國力)中 四九〇
「伊太利亞の旅」 五〇一
オンケン
「國民經濟學說史」第一卷 一三二
大塚金之助
「マーシャル、經濟學原理」 二七、二七七
オプスト
「銀行業務論」 四五六
大阪毎日新聞
朗々子「景氣不氣景氣」 四三六—七
P
ファイリツポヴィツチ
「經濟學原理」 一七、二七四
ポール
「人口運動、資本形成及び周期的經濟循環」 五三、五七

ブルウドン
「資本主義と社會主義」 五三六
「財産とは何ぞや」「經濟的矛盾——貧困の哲學」 四三二
ビグウ
「厚生(福祉)經濟學」 一九二、四二七
「經濟學の實際生活」 二二四
「マーシャル記念」 二三七
「應用經濟學論文集」 三七二、三九四—五
「産業(景氣)變動論」 四〇〇、四二七、四二八、四四四
ブレエン
「財政學要論」 三四六
パリイ
「貨幣理論上の未決の諸問題」(ブレレンタノ八十歳祝賀論文集)中 三七七
ピユウヂョオ
「ピユウヂョオ委員會報告」 五五—六
Q
ケネイ
「經濟表」 二六、三〇三

R

ロエブケ (レブケ)
「信用と景氣」「景氣理論」 一九
リカルドウ
「マカロツク編、リカルドウ全集」「ゴッナア編、經濟學論文集」 一五、二六〇、四五六
「經濟學租稅原理」 一五—六四、二八一、二八四
リツカアト
「文化科學と自然科學」、その他 二〇六
ロツシヤア
「アダム・スミス體系の獨逸への導入及び普及」 二七七
ロツドベルトウス
「資本論」 二八一
リイサア
「獨逸大銀行論及び其の集中論」 四三三—四
S
シユウムペエタア
「經濟生活の波狀運動」 六、五、三
シユビートホッフ

「恐慌」「景氣交代の諸學說」一、二、四—九、七〇、九二
シユビートホッフ著とカツセル著 五七—六二、七五—八八
ゾムバルト
「經濟恐慌理論の體系化の試み」 一三、二五、二八
「近世資本主義」 一七
シユモラア
「國民經濟學原理」 一五、二七、二七九、三九一、四〇九
坂西由藏
「日本經濟史論」 三三
「經濟生活の歴史的考察」 二八、三六八
シユパン
「國民經濟學の主要理論」 一七
スミス
「國富論」 一三七—三三、一六、三六、四六七
「道徳的情操論」 二二五
「政治行政講義」 二二五
「哲學的問題論文集」 二二六
スモオル
「アダム・スミスと近世社會學」 二六
スカルチンスキイ
「倫理學者及び經濟學の創設者としての」 五三七

- 「アダム・スミス」 一三
- シユタイン 「近代佛蘭西の社會主義及び共產主義」 一四
- ソオレル 「マルクス主義の批判」 一四、一五〇
- 「マルクス主義の解體」 一五六
- ソオルター 「マルクスと近世社會主義」 一四八
- 左右喜一郎 「經濟法則の論理的性質」 二二八
- 「クナップの貨幣新理論と貨幣の本質」 二九一
- 「貨幣とその價值」 三二四、三六〇、三六六
- サンガア 「アルフレッド・マーシャル」 三三八
- セリグマン 「租稅論文集」 二九七、三〇四、三〇七
- 「財政學諸研究」 三二七—三三六、二五〇
- シラス 「財政學原理」 三三三、三四四、三五三
- 齋藤茂吉 「ドーナウ源流行」 四〇三
- 佐野善作

U

- 「銀行論」 四四九、四七五—六
- シエツフェル 「美しき古都ハイデルベルグ」 五〇四
- 任友銀行 「任友銀行三十年史」 五二三
- サイクス 「英國銀行に於ける集中運動」 五二五
- ツガン・バラノウスキイ 「英國に於ける商業恐慌の理論及び歴史」 四二—四
- 高田保馬 「經濟學研究」 六五
- 田中金司 「銀行制度に於ける兼營主義と分業主義」 四四九
- 高垣寅次郎 「銀行論」「銀行集中論」 四四九、四七五—六、五〇八
- 上田貞次郎 「英國産業革命史論」 一三七

W

- 「株式會社經濟論」「社會改造と企業」 一三三、二八、三九一、三九三、四三一
- 「株式會社の現代經濟生活に及ぼす影響」

- 山崎覺次郎 「若干の貨幣問題」 三九五

- ワグナー 「經濟學原理」 一六—七、一九一
- 「財政學」 三〇一、三〇四
- 「銀行理論」「發券銀行政策」 四七、四九、四七一
- ヴァイルブランド 「國民經濟學發展史」 四六、三三六
- ヴォルフ (ド・) 一三
- ウエルズ 「古き世界より新しき世界へ」 一六九
- ウオオカア (フランシス・エス・) 「貨幣論」 三八六
- ウイザアス 「貨幣の意義」 四六六、四七六
- ウエエバア (アドルフ) 「預金銀行と投機銀行」 四七七

Y

昭和二年七月八日發行

動態經濟の研究

定價金參圓六拾錢

著者

高島佐一郎

發行者

名古屋市中區御器所町南永金
株式會社 同文館

代表者

東京市神田區表神保町二番地
株式會社 田中六藏

印刷者

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
株式會社 鷺見九藏

印刷所

東京市神田區今川小路一ノ一
株式會社 山縣英次

製本者

東京市神田區今川小路一ノ一
株式會社 山縣英次



發兌

東京市神田區表神保町二番地
電話九三三〇八〇番
振替貯金口座東京一三五番

株式會社 同文館

同著者によりて

改訂 金融經濟の諸問題 増補

大正十三年十月
東京實文館刊行。

序——第四版序——改訂増補版序

第一篇 社會對立より社會連帶へ

第二篇 財政思想の社會連帶的表現としての特別賦課と土地増價税

附録一 社會改造より人間改造へ

第三篇 企業大經營化の經濟的社會的考察

第四篇 我が企業大經營化の金融的源泉

附録二 輓近我が貿易・爲替の逆調に關する
或る考察

第五篇 再論、米國聯邦準備制度の運用

第六篇 金融梗塞の意義と英獨佛の金融組織

第七篇 我が金融界への望蜀數束

附録三 最近我が爲替逆調の由來、狀勢及び
對策

第八篇 外國爲替文獻と爲替利潤源泉の研究

第九篇 アダムスの業績と米國財政學文獻

第一〇篇 米國における緊急財政の一斑

第一一篇 マーシャル中壽賀に因みての其の經
濟學業績の回顧

附録四 ギイト修正經濟學原論を讀む

第一二篇 經濟學における大西教授業績の回顧

561
196

